公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第65集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(37)

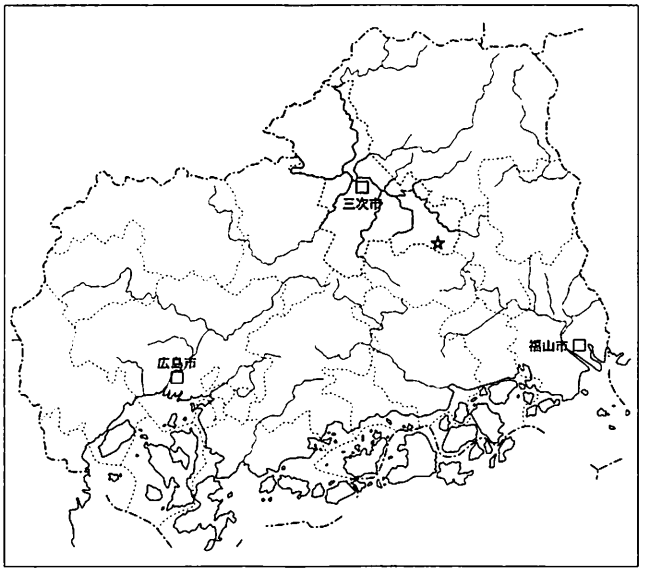
頼藤城跡

2014

公益財団法人　広島県教育事業団

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(37)

頼藤城跡



三次市位置図　　(☆は頼藤城跡)

2014

公益財団法人　広島県教育事業団

頼藤城跡遠景（南西上空から）

例　　言

1　本書は，平成20（2008）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う頼藤城跡（三次市甲奴町小童所在）の発掘調査報告である。

2　発掘作業及び整理作業・報告書作成は，国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団が実施した（平成25年４月１日より公益財団法人に移行)。なお，発掘調査支援業務は，株式会社イビソクに委託した。

3　頼藤城跡の発掘作業及び出土遺物等の整理作業の担当者は次のとおりである。

発掘作業（平成20年度）　岩本芳幸（主任調査研究員，現広島県立海田高等学校)，岡田有司・服部英世（株式会社イビソク調査員）

整理作業（平成22年度）　岩本芳幸，村田智子（賃金職員）

整理作業（平成23年度）　唐口勉三（主任調査研究員)，大田けい子（賃金職員）

整理作業（平成24年度）　沢元保夫（主任調査研究員)，唐口勉三，大田けい子

整理作業（平成25年度）　唐口勉三，大田けい子

4　本書は，Ⅰ・Ⅲ・Ⅳを岩本が，Ⅱを沢元が，Ⅴ・Ⅵを唐口がそれぞれ執筆し，唐口が編集した。

5　本書では，発掘調査で明らかになった山城の郭状の平坦面をすべて「平坦面」と呼称し，これらの平坦面のまとまりを「郭群」と呼称した。

6　本書で使用した遺構の表示記号は，ＳＢ：建物跡，ＳＲ：炉跡である。

7　挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。

8　本書に使用した北方位は，すべて旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

9　第２図は，国土交通省国土地理院発行の１：25,000の地形図（上下・本郷）を使用した。また，第29図は，国土交通省国土地理院発行の１：50,000の地形図（上下・府中）を縮小して使用した。

10　発掘調査の記録類及び出土品は，広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目８-49）において保管している。

目　次

Ⅰ　はじめに …… (1)
Ⅱ　位置と環境 …… (8)
Ⅲ　調査の概要 …… (12)
Ⅳ　遺　構 …… (17)
Ⅴ　遺　物 …… (38)
Ⅵ　まとめ …… (46)

挿図目次

第１図　中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図 …… (2)
第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000） …… (9)
第３図　周辺地形図（１：3,000） …… (13)
第４図　郭配置図（１：1,000） …… (15)
第５図　調査区周辺グリッド図（１：1,200） …… (16)
第６図　第１郭群遺構配置図（１：400） …… 折込み
第７図　平坦面１－２・１－３実測図（１：80） …… (19)
第８図　平坦面１－５実測図（１：80） …… (20)
第９図　平坦面１－７実測図（１：80） …… (21)
第10図　ＳＢ１実測図（１：60） …… (23)
第11図　ＳＢ２実測図（１：60） …… (25)
第12図　ＳＢ３実測図（１：60） …… (26)
第13図　ＳＢ４実測図（１：60） …… (28)
第14図　石列１・２実測図（１：60） …… (29)
第15図　石列３・４実測図（１：60） …… (30)
第16図　ＳＲ１実測図（１：20） …… (31)
第17図　第２郭群遺構配置図（１：400） …… 折込み
第18図　第３郭群遺構配置図（１：400） …… (34)
第19図　ＳＢ５実測図（１：60） …… (35)
第20図　堀切実測図（１：100） …… (37)
第21図　出土遺物実測図（１）（１：３） …… (39)
第22図　出土遺物実測図（２）（１：３） …… (40)
第23図　出土遺物実測図（３）（１：３） …… (41)
第24図　出土遺物実測図（４）（１：２） …… (42)

第25図　出土遺物実測図（５）（１：２）…… (43)
第26図　出土古銭拓影（原寸）…… (43)
第27図　平坦面面積別箇所数 …… (47)
第28図　土師質土器皿法量分布図 …… (50)
第29図　小童地区城跡位置図（1：75,000）…… (52)

表 目 次

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧（１）～（３）…… （３）～（５）
第２表　土器類観察表 …… (44)
第３表　鉄製品計測表 …… (45)
第４表　古銭計測表 …… (45)
第５表　平坦面一覧表 …… (46)
第６表　掘立柱建物跡一覧表 …… (47)
第７表　グリッド別出土遺物数量表 …… (49)
第８表　土師質土器皿計測表 …… (51)

図版目次

巻頭図版　　頼藤城跡遠景（南西上空から）
図版１　a　頼藤城跡遠景（南西上空から）　b　第１郭群完掘全景（真上から，上が北）
図版２　a　第１郭群北半部完掘状況（真上から，上が北）　b　第１郭群南半部完掘状況（真上から，上が北）
図版３　a　第２郭群完掘全景（南上空から）　b　第３郭群完掘全景（真上から，上が北西）
図版４　a　第１郭群・堀切調査前近景（南から）　b　第１郭群完掘状況（南から）
　　c　第１郭群南半部完掘状況（北から）
図版５　a　第１郭群北半部完掘状況（南から）
　　b　第１郭群平坦面１－２～１－４・１-14～１-16完掘状況（南東から）
　　c　ＳＢ２（第１郭群平坦面１－２内）（南東から）
図版６　a　ＳＢ２（北西から）　b　石列１（第１郭群平坦面１－２西側）（東から）
　　c　石列１北半部（西から）
図版７　a　石列１南半部（西から）　b　石列１土層断面（北から）
　　c　石列２（第１郭群平坦面１－２北側）（南から）
図版８　a　石列２（北から）　b　石列２土層断面（北西から）
　　c　第１郭群平坦面１－４土層断面（南東から）
図版９　a　第１郭群平坦面１－５完掘状況（北東から）　b　第１郭群平坦面１－５完掘状況（南から）

c　第１郭群平坦面１－５土層断面（西から）
図版10　a　第１郭群平坦面１－５遺物出土状況（西から）　b　ＳＢ３（第１郭群平坦面１－５内）（北東から）
c　土塁１（第１郭群平坦面１－５西側）（北東から）
図版11　a　土塁１（南東から）　b　土塁２（第１郭群平坦面１－５東側）（北東から）
c　土塁２（北西から）
図版12　a　ＳＢ１（第１郭群平坦面１－７内）（西から）　b　ＳＢ１（南から）
c　石列３・４（第１郭群平坦面１－７東側）（西から）
図版13　a　石列３・４（北から）　b　石列３（東から）　c　石列３土層断面（北西から）
図版14　a　石列４（北から）　b　石列４土層断面（北西から）
c　第１郭群平坦面１-19～１-21完掘状況（北から）
図版15　a　ＳＢ４（第１郭群平坦面１-20内）（北西から）　b　ＳＢ４（北東から）
c　第１郭群巨石群（平坦面１-22北側）（南西から）
図版16　a　第１郭群平坦面１-24・１-25完掘状況（北から）
b　ＳＲ１（第１郭群平坦面１-20南側）検出状況（南から）　c　ＳＲ１土層断面（西から）
図版17　a　ＳＲ１完掘状況（南から）　b　第１郭群平坦面１－５調査風景（北から）
c　第２郭群・堀切調査風景（北から）
図版18　a　第２郭群・堀切調査前近景（北から）　b　第２郭群西半部完掘状況（北から）
c　第２郭群平坦面２－１完掘状況（南から）
図版19　a　第２郭群平坦面２－２・２－４・２－５完掘状況（西から）
b　第２郭群平坦面２－２完掘状況（東から）　c　第２郭群平坦面２－４完掘状況（西から）
図版20　a　土塁３（第２郭群平坦面２－４北側）（南東から）
b　第２郭群平坦面２－５～２-10完掘状況（東から）　c　第２郭群平坦面２－５土層断面（南西から）
図版21　a　第２郭群平坦面２－８～２-11完掘状況（西から）
b　第２郭群平坦面２-10・２-11完掘状況（西から）　c　第２郭群平坦面２-10土層断面（南から）
図版22　a　第３郭群調査前近景（南から）　b　第３郭群完掘状況（南東から）
c　第３郭群平坦面３－１・３－２完掘状況（北から）
図版23　a　ＳＢ５（第３郭群平坦面３－３内）（北東から）　b　ＳＢ５（南東から）
c　第３郭群平坦面３－４～３－８完掘状況（南東から）
図版24　a　堀切完掘状況（南から）　b　堀切完掘状況（東から）　c　堀切土層断面（北東から）
図版25　出土遺物（１）
図版26　出土遺物（２）
図版27　出土遺物（３）

Ⅰ はじめに

頼藤城跡の発掘調査は，中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴うものである。中国横断自動車道尾道松江線は，中国地方を南北に貫き，瀬戸内海側の広島県尾道市から世羅郡世羅町・三次市・庄原市を経て日本海側の島根県松江市に至る総延長約137kmの高速自動車国道である。本事業は，山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道を接続するだけではなく，西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって，中四国地域連携軸構想の推進，経済圏・商業圏の拡大，山陽・山陰間の交流促進，広域観光ネットワークの創造を図ろうとするもので，広島県内の路線は約86kmである。

当該事業地内の世羅I.C.から吉舎I.C.（仮称）までの区間の文化財等の有無及び取扱いについては，当該事業を推進する日本道路公団中国支社尾道工事事務所と広島県教育委員会（以下「県教委」という。）との間で，平成13（2001）年２月７日から協議を始めた。県教委は現地踏査を行い，平成17（2005）年11月25日に，事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所（以下「西日本高速」という。）に回答した。この間，日本道路公団は解散し，中国横断自動車道尾道松江線建設事業は平成17（2005）年10月１日に西日本高速に引き継がれた。

その後，中国横断自動車道尾道松江線建設事業は平成18（2006）年度から国土交通省の直轄事業となったため，西日本高速に替わり国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所（以下「国土交通省」という。）が事業者となった。県教委はこの間も継続的に試掘調査を実施し，平成19（2007）年２月14日に，事業地内に頼藤城跡の存在を確認した旨を国土交通省に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と国土交通省は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。

国土交通省は，平成19（2007）年２月23日付けで三次市教育委員会（以下「三次市教委」という。）宛て文化財保護法第94条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し，三次市教委は同年２月26日付けで国土交通省宛てに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。

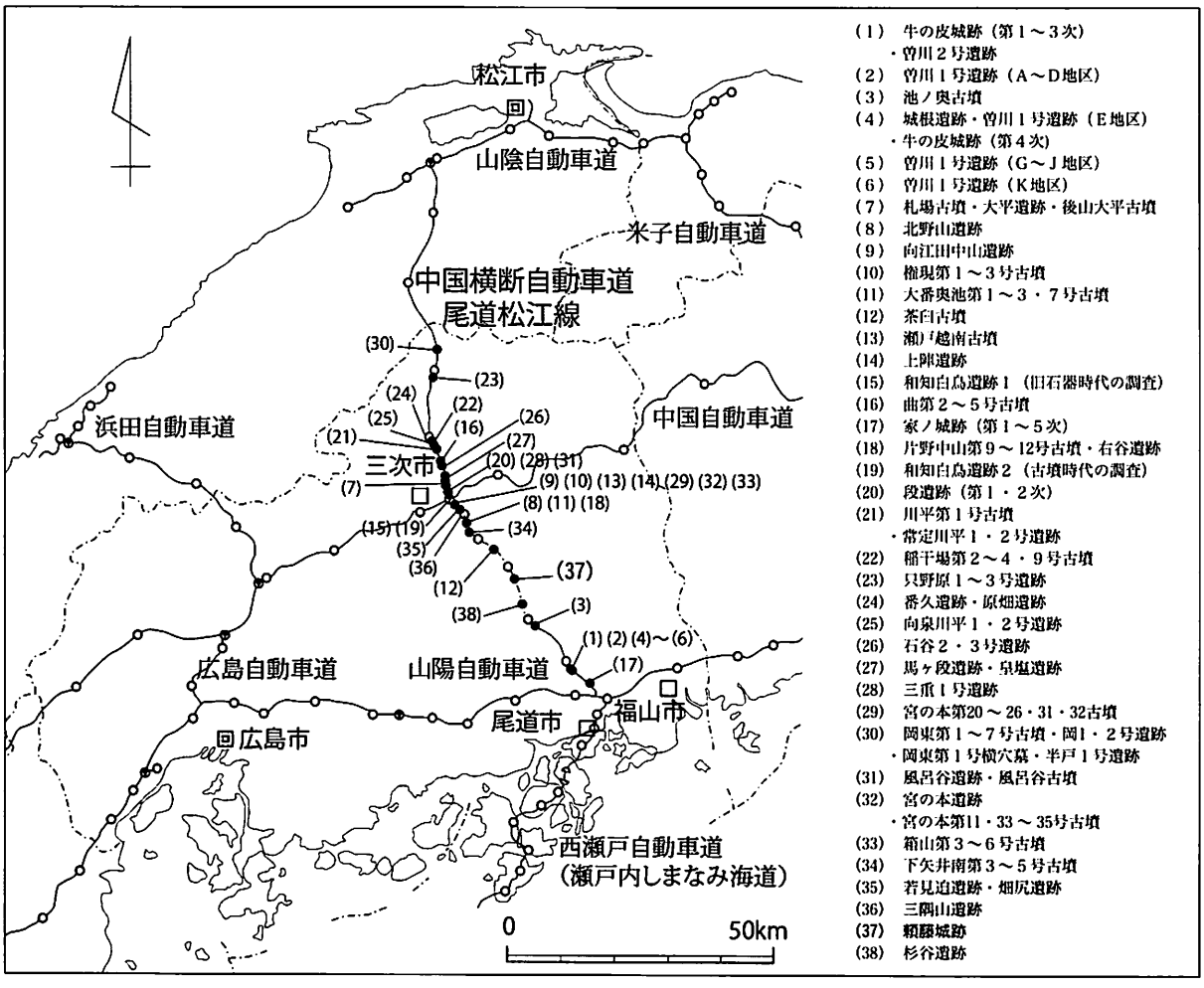
国土交通省は，平成20（2008）年３月４日付けで財団法人広島県教育事業団（以下「教育事業団」という。）に本遺跡の調査を依頼し，国土交通省と教育事業団は同年４月１日付けで委託契約を締結した。教育事業団は平成20（2008）年３月13日付けで文化財保護法第92条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を三次市教委に提出し，同年３月14日付けで報告書を作成すること等を条件に，慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けたことから，同年４月21日から７月31日までの約３か月，発掘調査を実施した。

発掘調査中の７月４日に三次市立小童小学校（17名），７月28日に三次市立宇賀小学校（11名），７月30日に甲奴郷土史研究会小童支部（12名）の現地見学があった。また，発掘調査終了後の９月27日に三次市甲奴コミュニティセンターにおいて茶臼古墳（三次市甲奴町宇賀所在）と合同で発掘調査報告会を行い，85名の参加があった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，また，この地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所，西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所，三次市教育委員会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。また，次の各氏から発掘調査方法や遺物の整理方法等に関する指導・助言等をいただいた。記して感謝の意を表します。(氏名は五十音順，敬称略，所属等は当時のもの。)

加藤光臣（広島県立三次高等学校），新祖隆太郎（三次市文化財保護委員），鈴木康之（広島県立歴史博物館主任学芸員），藤原一三（三次市文化財保護委員），古瀬清秀（財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員・広島大学大学院文学研究科教授），松下正司（財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員・比治山大学名誉教授）



第1図　中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図((1)～(38)は報告書番号)

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧（１）

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
（１）	牛の皮城跡（北郭群）	第１次	畝状竪堀群	平成15年１月20日～３月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中　世	城　跡
		第２次	１～４郭	平成15年７月７日～10月31日			
		第３次	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曽川２号遺跡			平成15年１月20日～３月７日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
（２）	曽川１号遺跡	Ａ地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年１月17日	尾道市御調町大町字曽川	弥生時代～中世	集落跡
		Ｂ地区	旧・Ｐ２第一調査区	平成15年４月７日～５月23日			
		Ｃ地区	旧・Ｐ２第二調査区				
		Ｄ地区	旧・Ｐ１	平成16年１月６日～２月５日			
（３）	池ノ奥古墳			平成16年８月23日～10月28日	世羅郡世羅町宇津戸字天神	古墳時代後期	古　墳
（４）	城根遺跡			平成15年１月27日～３月７日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡（北郭群）	第４次	５郭	平成18年１月30日～２月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中　世	城　跡
	曽川１号遺跡	Ｅ地区	旧・Ｐ４	平成15年12月１日～12月19日	尾道市御調町大町字米田	縄文時代後期～中世	遺物包含層
（５）	曽川１号遺跡	Ｇ地区	旧・Ｐ３	平成16年６月７日～８月６日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		Ｈ地区	旧・Ｐ３側道				
		Ｉ地区	旧・Ｐ４側道				
		Ｊ地区	旧・Ｐ２	平成17年１月11日～３月４日			
（６）	曽川１号遺跡	Ｋ地区		平成17年４月11日～７月１日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
（７）	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年１月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古　墳
	大平遺跡			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古　墳
（８）	北野山遺跡			平成18年７月３日～８月４日	三次市吉舎町敷地字北野山	平安時代	仏教関連の施設跡
（９）	向江田中山遺跡			平成18年４月17日～６月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～古代	集落跡
(10)	権現第１～３号古墳			平成17年７月11日～11月11日	三次市向江田町字権現	古墳時代中期	古　墳
(11)	大番奥池第１～３・７号古墳			平成18年４月17日～８月４日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期	古　墳
(12)	茶臼古墳			平成20年７月７日～９月５日	三次市甲奴町宇賀字茶臼	古墳時代中期	古　墳
(13)	瀬戸越南古墳			平成19年６月25日～８月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古　墳
(14)	上陣遺跡			平成19年７月９日～８月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代中期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡（第２次）			平成19年９月25日～12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧（２）

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(16)	曲第２～５号古墳			平成19年７月２日～９月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古　墳
				平成19年12月３日～12月７日		縄文時代前期・晩期	石器製作跡包含地
(17)	家ノ城跡	第１次	南東郭群	平成15年９月16日～10月31日	尾道市木ノ庄町木梨字家城東平	中　世	城　跡
		第２次	南東郭群	平成16年５月17日～６月11日			
		第３次	１郭周辺	平成17年10月17日～11月11日			
		第４次	１郭・北尾根	平成18年４月17日～７月21日			
		第５次	１郭･北西尾根	平成19年４月16日～６月15日			
(18)	片野中山第９～12号古墳			平成19年４月16日～８月８日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代中期	古　墳
	右谷遺跡			平成19年４月16日～８月８日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期～古代	集落跡
(19)	和知白鳥遺跡（第１次）			平成18年４月17日～12月22日	三次市和知町字白鳥・四拾貫町字三重	古墳時代中期～古代	集落跡 古　墳
(20)	段遺跡	第１次		平成18年９月19日～12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期～後期	集落跡
		第２次		平成19年９月25日～12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第１号古墳			平成20年４月21日～６月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古　墳
	常定川平１号遺跡					古墳時代中期	集落跡
	常定川平２号遺跡					縄文時代	陥　穴
(22)	稲干場第２～４・９号古墳			平成19年10月９日～12月23日	庄原市口和町大月字稲干場	古墳時代後期	古　墳
(23)	只野原１号遺跡			平成20年９月８日～９月26日	庄原市高野町下門田字只野原	古墳時代	箱式石棺
	只野原２号遺跡			平成22年４月19日～11月19日	庄原市高野町下門田字登立	―	自然流路
	只野原３号遺跡	第１次		平成21年５月18日～８月28日		旧石器時代～古墳時代	包含層 集落跡
		第２次		平成22年４月19日～11月19日			
(24)	番久遺跡			平成20年７月28日～12月25日	庄原市口和町大月字番久	縄文時代～古墳時代	集落跡 陥　穴
	原畑遺跡				庄原市口和町大月字原畑	弥生時代～古墳時代	集落跡
(25)	向泉川平１号遺跡			平成20年４月21日～７月11日	庄原市口和町向泉字川平	旧石器時代～縄文時代	包含地
	向泉川平２号遺跡					弥生時代～古墳時代	集落跡
(26)	石谷２号遺跡	第１次		平成21年４月13日～６月12日	庄原市口和町金田字塩谷	縄文時代	陥　穴
		第２次		平成22年４月12日～６月23日			
	石谷３号遺跡			平成21年４月13日～６月12日	庄原市口和町金田字塩谷	古墳時代後期	集落跡
(27)	馬ヶ段遺跡 馬ヶ段第１号横穴墓 馬ヶ段第２号横穴墓			平成20年４月21日～７月11日	庄原市水越町字馬ヶ段	古墳時代後期～奈良時代前期	集落跡 横穴墓
	皇塩遺跡				庄原市水越町字皇塩	古墳時代後期	炭窯跡

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧（３）

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(28)	三重１号遺跡	第１次		平成20年11月４日～12月19日	三次市四拾貫町字三重	古墳時代～古代	集落跡
		第２次		平成21年４月13日～９月25日		古墳時代中期	集落跡
(29)	宮の本第20～26・31・32号古墳			平成19年４月16日～12月21日	三次市向江田町字宮本・天神	古墳時代前期～後期	古　墳
(30)	岡東第１～７号古墳			平成20年５月７日～９月26日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代中期	古　墳
	岡１号遺跡					時代不詳	陥　穴
	岡２号遺跡			平成21年４月13日～５月15日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	集落跡
	岡東第１号横穴墓			平成24年９月３日～９月21日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	横穴墓
	半戸１号遺跡			平成22年４月12日～５月14日	庄原市高野町岡大内字半戸	縄文時代	陥　穴
(31)	風呂谷遺跡			平成21年４月13日～11月20日	三次市四拾貫町	後期旧石器時代 縄文時代早期 古墳時代後期 古代	包含地 集落跡
	風呂谷古墳					古墳時代後期	古　墳
(32)	宮の本遺跡			平成20年４月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古　代	集落跡
	宮の本第11・33～35号古墳					古墳時代後期～古代	古　墳
(33)	箱山第３～６号古墳			平成18年８月21日～12月８日	三次市向江田町字箱山	古墳時代前期～後期	古　墳
(34)	下矢井第３～５号古墳			平成19年10月９日～12月21日	三次市吉舎町矢井字西見山・敷地字北野山	古墳時代前期～中期	古　墳
(35)	若見迫遺跡			平成19年４月16日～５月25日 平成19年10月18日～10月19日	三次市三良坂町岡田字若見迫	古　代	集落跡
	畑尻遺跡			平成21年４月13日～６月５日	三次市三良坂町岡田字畑尻	旧石器時代 縄文時代 近世	集落跡
(36)	三隅山遺跡			平成24年４月９日～８月10日	三次市三良坂町長田字三隅山・堂面	中世～近世	墳　墓
(37) (本書)	頼藤城跡			平成20年４月21日～７月31日	三次市甲奴町小童字塚ケ迫・小豆山	中　世	城　跡
(38)	杉谷遺跡			平成21年９月７日～10月16日	世羅郡世羅町東上原字杉谷	古墳時代 中世～近世	集落跡

第１表の報告書一覧

（１）　財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』 2005年

（２）　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』 2006年

（３）　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（３）池ノ奥古墳』 2007年

（４）　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（４）

城根遺跡・曽川１号遺跡(Ｅ地区)・牛の皮城跡(第４次)』 2008年
（５） 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（５）曽川１号遺跡（Ｇ～Ｊ地区)』 2008年
（６） 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（６）曽川１号遺跡（Ｋ地区)』 2008年
（７） 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（７）札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
（８） 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（８）北野山遺跡』 2009年
（９） 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（９）向江田中山遺跡』 2010年
(10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）権現第１～３号古墳』 2010年
(11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）大番奥池第１～３・７号古墳』 2010年
(12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（12）茶臼古墳』 2011年
(13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（13）瀬戸越南古墳』 2011年
(14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（14）上陣遺跡』 2011年
(15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡１』 2011年
(16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第２～５号古墳』 2011年
(17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（17）家ノ城跡』 2012年
(18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（18）片野中山第９～12号古墳・右谷遺跡』 2012年
(19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡２』 2012年
(20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡』 2012年
(21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）川平第１号古墳・常定川平１・２号遺跡』 2012年

(22)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稲干場第２～４・９号古墳』 2012年

(23)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）只野原１号遺跡・只野原２号遺跡・只野原３号遺跡』 2013年

(24)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡・原畑遺跡』 2013年

(25)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（25）向泉川平１号遺跡・向泉川平２号遺跡』 2013年

(26)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（26）石谷２号遺跡・石谷３号遺跡』 2013年

(27)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（27）馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』 2013年

(28)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（28）三重１号遺跡』 2013年

(29)　財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳』 2013年

(30)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（30）岡東第１～７号古墳・岡１号遺跡・岡２号遺跡・岡東第１号横穴墓・半戸１号遺跡』 2014年

(31)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（31）風呂谷遺跡・風呂谷古墳』 2014年

(32)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32）宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳』 2014年

(33)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33）箱山第３～６号古墳』 2014年

(34)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（34）下矢井第３～５号古墳』 2014年

(35)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（35）若見迫遺跡・畑尻遺跡』 2014年

(36)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（36）三隅山遺跡』 2014年

(37)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（37）頼藤城跡』 2014年

(38)　公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38）杉谷遺跡』 2014年

Ⅱ　位置と環境

頼藤城跡は三次市甲奴町小童(ひち)に所在し，上下川の支流である小童川南岸の丘陵上に立地する。

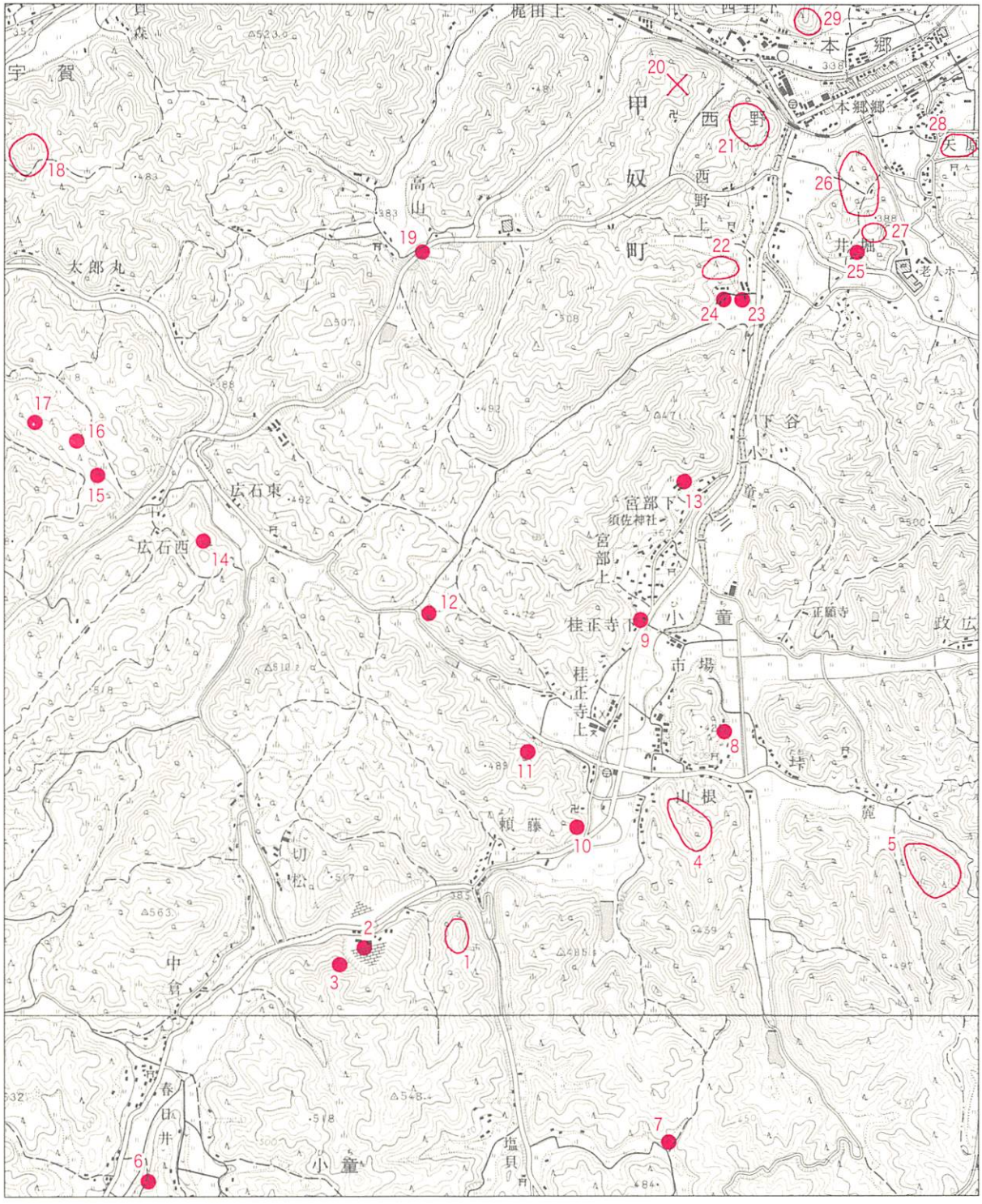
三次市は中国地方のほぼ中央部に位置し，陰陽を結ぶ交通の要衝であり，県北の中核都市である。本城跡の所在する甲奴町は，平成16（2004）年４月１日に旧三次市及び双三郡全町村と新設合併し，新たに誕生した三次市の南東端部を占めている。基幹産業は，水稲耕作を中心とした農業で，古くはコンニャクイモ・葉タバコの主要産地であったが，ピーマン・白菜・アスパラガスなどの野菜栽培に代わっており，酪農も見られるようになっている。また，まつたけの産地としても著名である。甲奴町は周囲を標高600m前後の山地に囲まれ，400～500mの高原状の地形である。この地形面は，中国脊梁山地の南面に広がる吉備高原面の一角を占め，東の神石高原から続く甲奴高原と呼ばれている。この高原面を開析して，町の中央を江の川の支流である上下川が貫流し，その支流である小童川・宇賀川・友森川・抜湯川が，その河川沿いに谷底平野を形成している。この狭小な平地部に集落が点在するが，上下川沿いには石見路が通っており，町の中心である本郷の集落が街道沿いに成立している。本城跡のある小童地区は，本郷の南に位置し，中世においては京都祇園社（八坂神社）の荘園であり，「小童の祇園さん」の名で親しまれて，備後三大祇園の一つである須佐神社が鎮座している。神社の祭礼である，的弓祭は市無形文化財に指定されており，祇園祭で使用された神輿は永正14（1517）年創建の墨書名と宝暦13（1763）年の改修銘があり，県重要文化財に指定されている。

次に周辺の主な遺跡について甲奴町内の発掘調査された遺跡を中心に概観する。

旧石器時代の遺跡については未発見であるが，縄文時代については，宇賀川上流の東谷と西野地区で磨製石斧が採集されており，当該期のものと考えられている。

弥生時代の遺跡としては，平成２（1990）年に圃場整備に伴い発掘調査の実施された小童地区の垰川西遺跡[1]がある。住居跡は確認されていないが杭列等の柱穴が検出されており，中期後半の土器が出土している。中でも赤色顔料の塗られた脚付き長頸壺と高坏の杯部は，乳幼児の土器棺に使用されたものと想定され注目される。このほか，西野地区の平原尻遺跡[2]からは，道路工事中に抉入片刃石斧が出土している。

甲奴町内では120基を超える古墳の存在が知られている[3]が，発掘調査が実施されたものは，本城跡西方の塚ヶ迫第１号古墳[4]と本城跡と同事業に伴う茶臼古墳[5]の２基である。塚ヶ迫第１号古墳は墳丘の直径が10m以下の小規模な古墳で，片袖の横穴式石室を埋葬施設とし，６世紀後半の築造と考えられている。遺物は石室内外から，須恵器（杯身・杯蓋・壷・瓶(はそう)・提瓶），鉄器（刀・鍔・鏃），玉類（管玉・臼玉）が出土した。宇賀地区の茶臼古墳は，墳丘が南北12m，東西10mの隅丸長方形で，３基の箱式石棺を埋葬施設とし，５世紀後半の築造と考えられている。石棺のうち1基は小型で蓋石が１枚移動していたが，他の２基は蓋石に粘土で目張りが施されており，人骨が遺存し，棺内面にベンガラが塗布されていた。中央の石棺からは男女２体の人骨が確認され，ガラス小玉が出土している。そのほかの古墳については不明な点が多いが，小規模な円



第２図　周辺遺跡分布図（１:25,000）

1	頼藤城跡	2	塚ケ迫第１号古墳	3	塚ケ迫第２号古墳	4	小童山根城跡	5	麓山城跡
6	捻木遺跡	7	大原第１号古墳	8	埓川西遺跡	9	宮部窯跡	10	頼藤古墳
11	桂正寺古墳	12	宮部古墳	13	祇園社北方古墳	14	向田古墳	15	善正平古墳
16	善正平１号遺跡	17	善正平２号遺跡	18	上野山城跡	19	高山１～３号古墓	20	寺谷山城跡
21	大垣内古墳群	22	曹洞寺跡古墳群	23	平原尻遺跡	24	長者ケ原遺跡	25	中世館跡
26	天神山古墳群	27	二の宮古墳群	28	矢原遺跡	29	西野山根城跡		

墳が多い。集落遺跡の発掘調査は行われていないが本郷地区の矢原遺跡[6]は，圃場整備に伴う試掘調査で竪穴住居跡の存在が確認され，須恵器・土師器が出土している。小童地区の捻木遺跡[7]では，畑の造成中に土師器の甑が発見され，竪穴住居跡の存在が確認されている。古墳の数に比して集落遺跡の確認例は少なく，今後，確認の増加が予想される。

古代には,「続日本紀」に芦田郡からの分郡の記事があり,甲奴の地名が見られる。「倭名抄」では,甲奴郡内の郷として，矢野・甲奴・田総を挙げており，甲奴郷が甲奴町域（太郎丸・抜湯を除く）に当たるものと見られている。また，「三代実録」の記事では，周辺の郡とともに甲奴郡でも鉄を生産していたことが記載されている[8]。このころの遺跡としては，本城跡と同事業に伴って発掘調査された宇賀地区の善正平１・２号遺跡がある[9]。いずれも丘陵斜面に立地しており，善正平１号遺跡では，竪穴住居跡１軒，段状遺構５基，溝状遺構１条，土坑18基などが検出され，善正平２号遺跡では，竪穴住居跡10軒，掘立柱建物跡７棟，段状遺構14基，溝状遺構１条，土坑11基などを検出している。このうち，善正平２号遺跡では，２基の鍛冶炉をもつ竪穴住居跡が確認されており，鉄床石や羽口，多量の鉄滓が出土したことから，鉄製品生産が行われたものと考えられている。

平安時代末期の承徳年間（1097～1099）には，先に述べたように小童地区は，小童保と呼ばれる京都祇園社の荘園となっている。小童保の南には高野山領として著名な大田荘があり，宇賀地区は大田荘の荘域であった。その後，小童保では保司職をめぐる紛争が続いたが，やがて地頭として田総氏が支配を強めていった。応仁の乱以降，田総氏は備後守護代山内氏に帰属し，小童保は山内氏の知行地となったが，山内氏は天文22（1553）年に毛利氏の軍門に下り，毛利氏の支配するところとなった。文禄３（1594）年には，須佐神社の社殿が毛利輝元によって，再建されたことが知られている。このころの遺跡としては，山城跡や古墓，窯跡などがあるが，山城跡は本城跡を含め甲奴町内で16か所[10]が知られている。このうちの２城跡は，遺構の状況が不明である。本城跡の東方に所在する小童山根城跡[11]は，尾根筋の北西方向に郭が並び，一部に石垣が遺存し，背後の南東に大規模な堀切をもつ。田総氏の代官土屋氏の居城と伝えられており，周辺には市場などの地名が残っており，小童保支配の拠点となっていた可能性が考えられている。さらに東方には,麓山城跡[12]がある。「芸藩通志」では,長右衛門大夫元則拠るとの記載があるが,最高所の郭は三つの段からなり，尾根筋を北西へ６段の郭が連なり，最高所郭の背後に大堀切がある。また，本城跡の北西の宇賀地区には，上野山城跡[13]があるが,「芸藩通志」には矢田新助所拠と記されている。最高所の郭を囲んで帯郭が廻り，西方に小郭が続いている。このほか，中世の館跡と考えられる平坦面と堀の遺構が，本郷地区の井堀に残されている。古墓としては，本城跡の北方にある高山１～３号古墓[14]が知られており，いずれも方形の石積基壇をもち，１号墓には五輪塔がたっている。宮部窯跡[15]は，昭和43（1968）年に宅地の拡張中に発見されたもので，窯体内から糸切底の土師質土器が出土している。この窯跡の南南東５ｍの地点からもう１基の窯跡が見つかっており，窯体内から土師質土器の小片が出土している。中世の集落遺跡は未発見であるが，前述の平原尻遺跡付近で土師質土器・青磁の破片が採集されている。

参考文献

広島県『広島県史　地誌編』 1977年

甲奴町『甲奴町誌』 1994年

平凡社『日本歴史地名大系第35巻　広島県の地名』 1982年

竹内理三編『角川日本地名大辞典34　広島県』角川書店　1987年

中國新聞社『広島県大百科事典　上』中国新聞社　1982年

広島県教育委員会『広島県遺跡地図』電子版

註

(1) 甲奴町教育委員会『垰川西遺跡発掘調査報告書』 1991年

(2) 甲奴町『甲奴町誌』 1994年

(3) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図』電子版

(4) 甲奴町教育委員会『塚ケ迫第１号古墳発掘調査報告書』 1983年

(5) 財団法人広島県埋教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う発掘調査報告（12）茶臼古墳』2011年

(6) 註(2)に同じ。

(7) 註(2)に同じ。

(8) 註(2)に同じ。

(9) 財団法人広島県埋教育事業団『年報７　平成21年度』 2012年

(10) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書　第４集』 1996年

(11) 註(2)・(10)に同じ。

(12) 註(2)・(10)に同じ。

(13) 註(2)・(10)に同じ。

(14) 註(2)に同じ。

(15) 註(2)に同じ。

Ⅲ　調査の概要

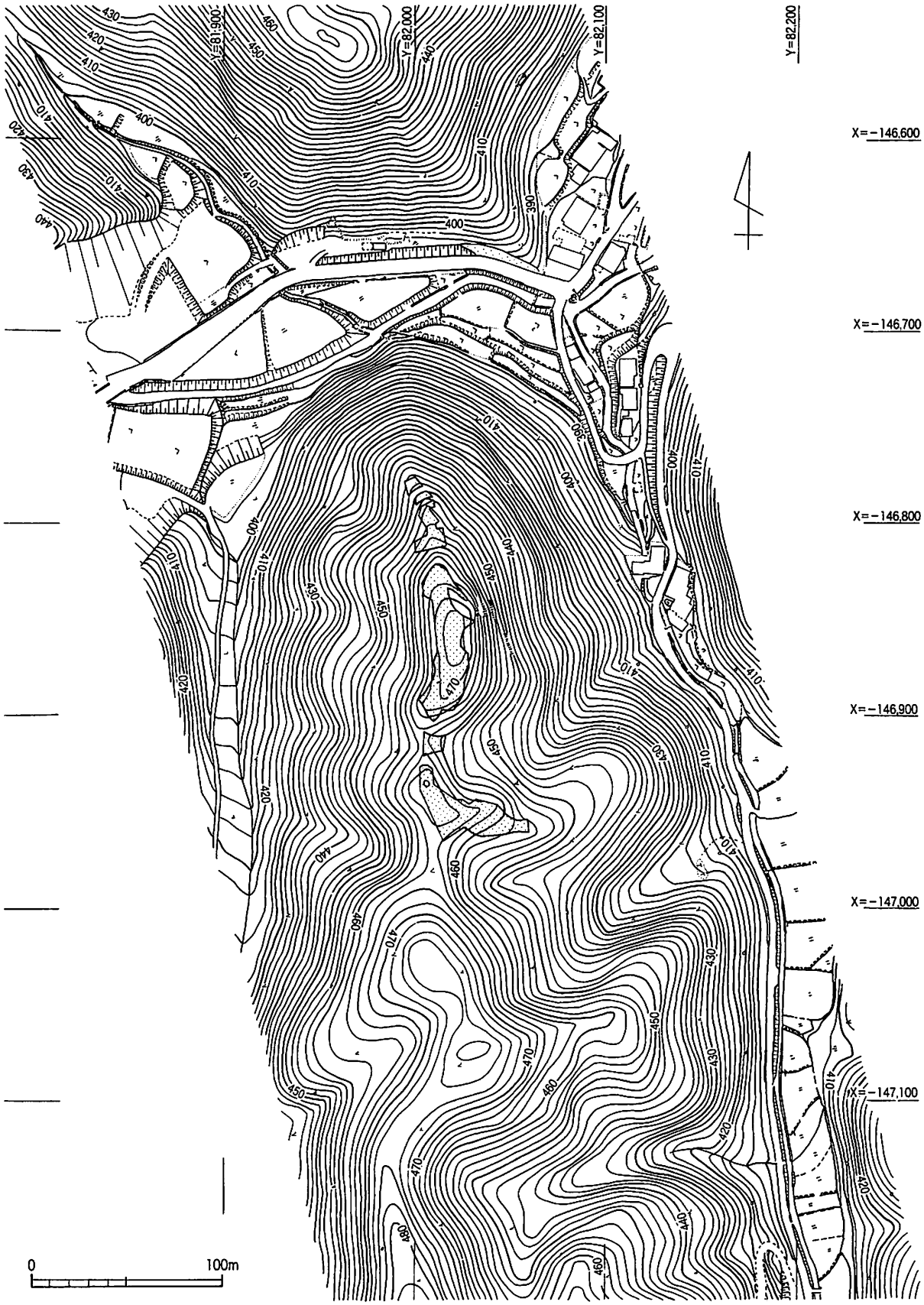
頼藤城跡が所在する三次市甲奴町小童は，甲奴町の南東部にあたり，南は世羅郡世羅町（旧甲山町），東は府中市上下町に接する。上下川支流の小童川が中央部を北流しており，標高300～450mの台地が広がっている。現在も数本の県道が交差しており，早くから交通の要衝であったと考えられる。

頼藤城跡は小童川南岸の丘陵上に立地する。南から北に延びる尾根の北端に築かれており，全長約200mでＬ字形を呈している。最高所の標高は473.3mで，周囲との標高差は約80mである。尾根幅は狭く，両側は急峻な地形になっている（第３図）。郭のまとまりは中央の第１郭群，南の第２郭群，北の第３郭群に大きく分けることができる（第４図）。また，第１郭群と第２郭群の境には大規模な堀切があるが，もともと鞍部であった部分をさらに掘り込んで，広く深い堀切にしたものと思われる。堀切については路線内である東半分を調査した。なお，今回の調査範囲ではないが，第１郭群はその北端から西に支尾根が延びており，いくつかの平坦面が確認できる。

発掘調査は，試掘調査の結果を基に，第１・２郭群については重機を使用して表土の除去作業を行った。その後，人力による遺構検出作業と遺構の掘り下げを行った。第３郭群については重機を搬入することが困難であったため，人力による遺構検出作業と遺構の掘り下げを行った。第１郭群と第２郭群の間には深い堀切があるため，最初から第１郭群に重機を入れることは困難であった。このため，まず第２郭群と堀切の調査を行った。その後，堀切を埋めて第１郭群に重機が入れ，第１郭群の調査を実施した。第１郭群と第３郭群の調査は並行して行った。調査面積は，8,187㎡である。発掘調査においては，基本的に10m四方のグリッドを設定し（第５図），グリッド毎に遺物の取り上げを行った。

第１～３郭群の遺構面までの堆積土は基本的に２層で，表土（腐植土）である黒褐色土と遺構面の間に厚さ約15cmの淡黄色土が堆積している。遺構面は灰黄色の風化礫を多く含む明黄褐色土の地山面である。

第１郭群は，本城跡のなかで最も標高が高く465～473mである。規模も大きく，本城跡の中核となる郭群である。大小26か所の平坦面を確認し，４棟の掘立柱建物跡を検出した。南西端の平坦面１－５は北西側と南東側に土塁を伴い，２間×２間の建物跡（ＳＢ３）を検出した。これらの土塁は平坦面を造成する際，地山を削り残すことによって造り出されている。西側の土塁は長さ7.7m，上部の幅0.4～1.0m，高さ0.25～1.15m，東側の土塁は長さ9.4m，上部の幅0.7～1.2m，高さ0.15～1.2mである。本郭群の最高所北側にある平坦面１－７では，２間×２間の建物跡（ＳＢ１）を確認した。また，東端と北東端の一部に石列が見られる。東端の石列は長さ4.4m，北東端の石列は長さ1.3mで，いずれも郭の外側に面を揃えて石が並べられている。この郭の北に隣接する平坦面１－２も西端と北端に石列を伴い，西端の石列は長さ5.6m，北端の石列は長さ2.6mである。また，１間×２間の建物跡（ＳＢ２）を検出したが，平面形は方形でなく台形である。南部の平坦面１-20でも１間×２間の建物跡（ＳＢ４）を検出し，この建物の南側斜面で炉跡（Ｓ



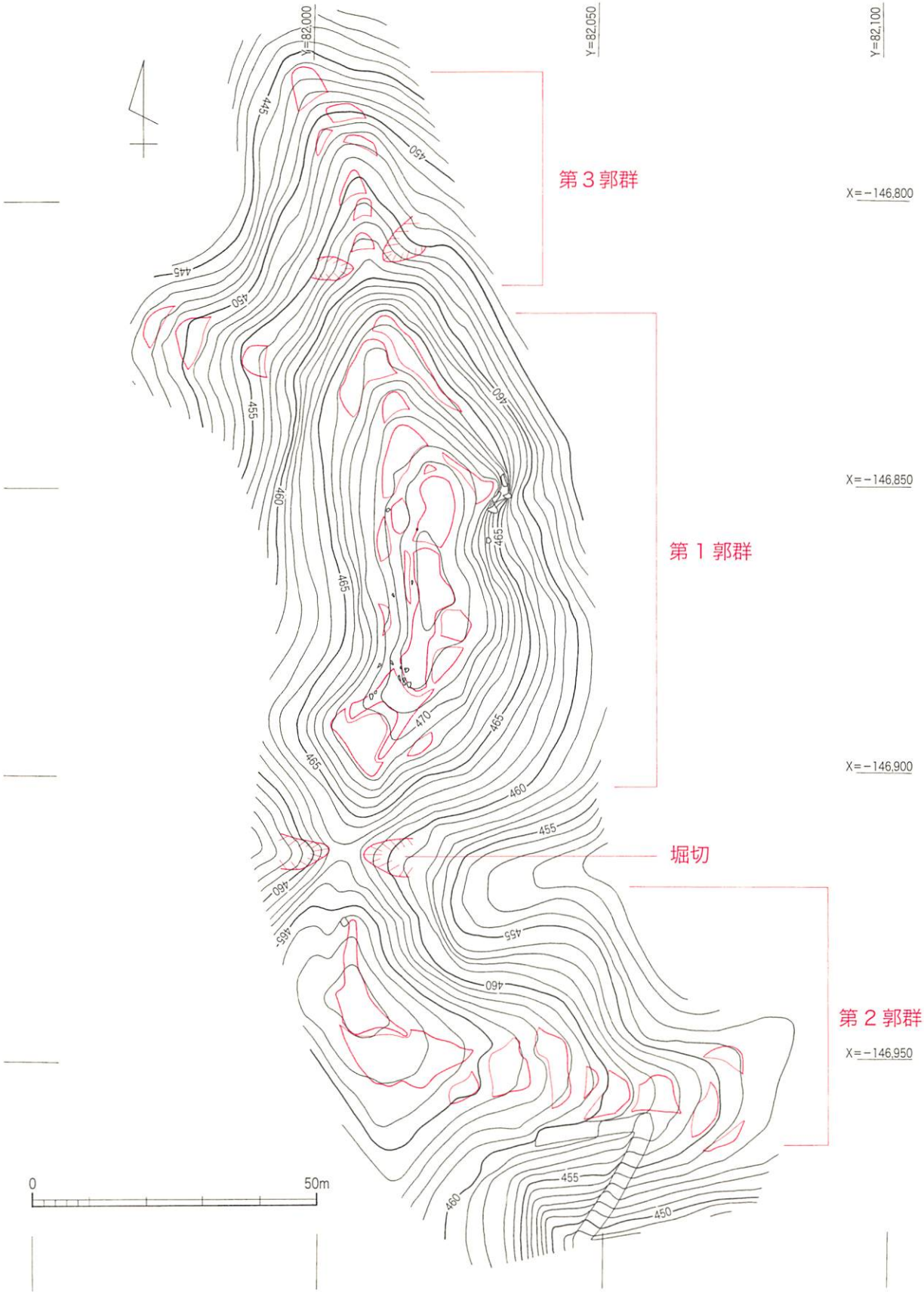
第3図　周辺地形図（1：3,000）

Ｒ１）を確認した。炉跡の下部は不整長円形で，大きさは0.74m×0.59m，深さ0.35mで，焼土や炭化物が充満していた。なお，本郭群の西側に細長い平坦面がいくつかあり，通路として使用されていた可能性が考えられる。また，本郭群がある尾根は岩石が多く，岩盤が露出する部分もあるが，それを利用して西斜面には人為的にやや大きな自然石を残している。さらに郭の先端部に自然石を多く残すという傾向が見受けられる。

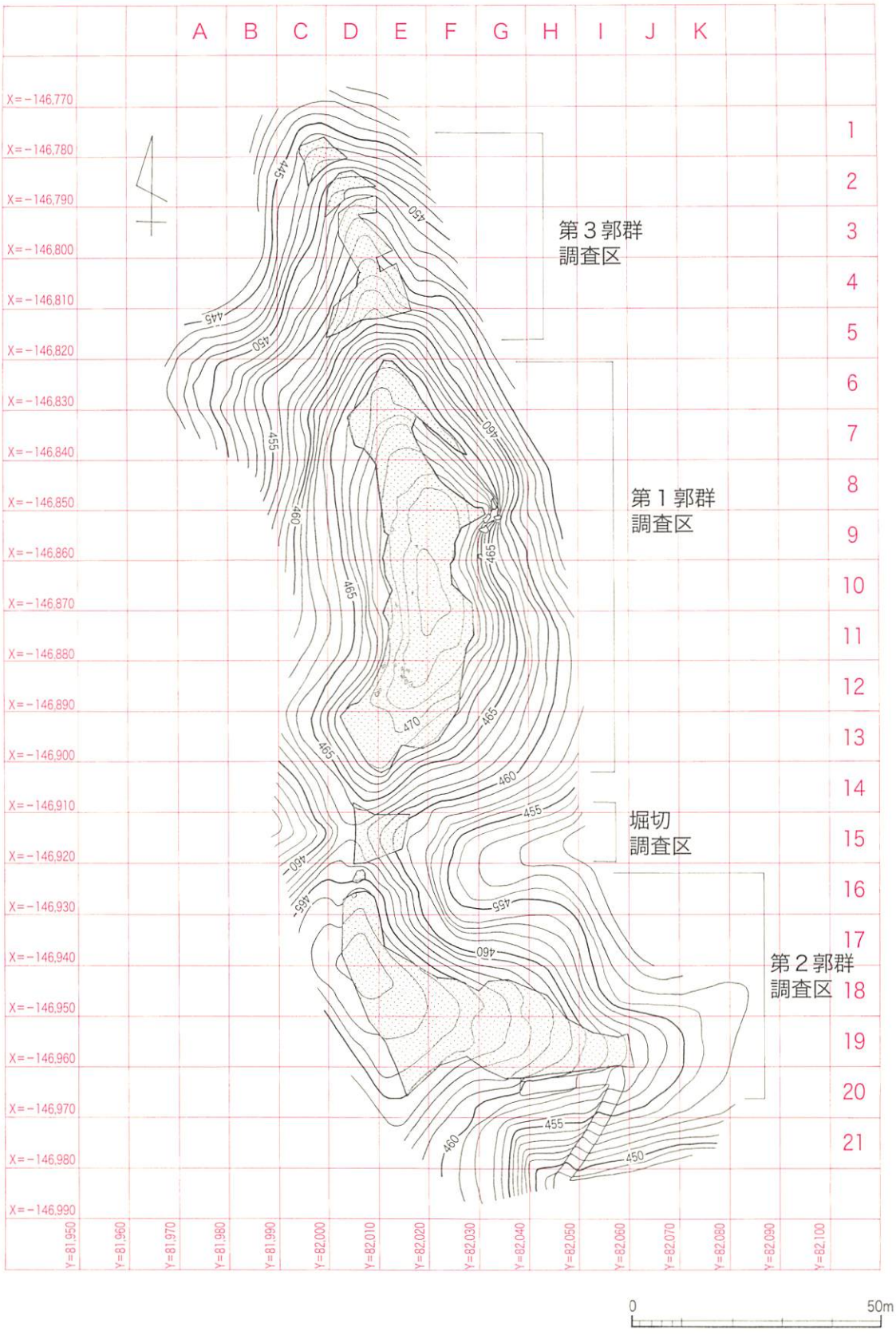
第１郭群の南にある第２郭群は，東に向かって派生する尾根上に造られており，標高は458～468mである。東端は調査区外に延びているが，調査区内で大小11か所の平坦面を確認した。最高所にあたる西側の平坦面２－２が最も広く，東に向かうにつれ平坦面の規模は次第に小さくなる。中央付近には北側に土塁を伴う平坦面２－４が存在する。この土塁は地山を削り残すことによって高まりを造り出したもので，長さ５m，上部の幅0.8～2.6m，高さ0.5～１mである。本郭群からは建物跡等の遺構は検出されず，遺物も出土しなかったが，第１郭群の背後を固める補完的な機能が本郭群にはあったものと思われる。なお，南西部には堀切を設けておらず，尾根続きになっている。

第３郭群は第１郭群の北にあり，標高は446～458mである。第１郭群とは尾根続きになっているが，その間には高低差約８mの急な切岸がある。発掘調査前の地表観察から，この境の部分に堀切があるものと想定されたが，この部分には岩盤が拡がり，堀切は造られていなかった。本郭群は全般的に岩盤が拡がっている部分が多く，８か所の平坦面を確認したが，いずれの平坦面も小さく狭い。中央の平坦面３－３で１間×２間の掘立柱建物跡（ＳＢ５）を確認した。

遺物は，第１郭群と第３郭群から出土した。第１郭群では，土師質土器（皿・鍋）・瓦質土器（擂鉢）が中心である。陶磁器類は青磁（碗）が出土し，陶器は出土していない。青磁（碗）は主に15世紀後半から16世紀前半と推定される。その他，鉄製品（短刀・刀子・鉄釘など）・古銭が出土した。遺物の出土地点は全般的に建物跡周辺である。第３郭群では，土師質土器（皿・鍋）・亀山焼（甕）・青磁（碗）・鉄釘などがＳＢ５付近から出土した。



第４図　郭配置図（１：1,000）



第５図　調査区周辺グリッド図（１：1,200）

Ⅳ　遺構

1　第1郭群（第6～16図，図版1b・2・4～17）

第1郭群は本城跡のなかで，最も標高が高く，規模も大きく，本城跡の中核となる郭群である。大小26か所の平坦面を確認し，4棟の掘立柱建物跡を検出した（第6図）。本郭群の西側に細長い平坦面がいくつかあり，通路として使用されていた可能性が考えられる。また，本郭群がある尾根は岩石が多く，岩盤が露出する部分もあるが，それを利用して西斜面には人為的にやや大きな自然石を残している。さらに郭の先端部に自然石を多く残すという傾向が見受けられる。

（1）平坦面

①平坦面1－1（第6図，図版4c）

第1郭群最高所（標高473.3m）の南に位置する尾根筋に沿って南北に細長い平坦面である。長さ17.8m，幅2.2～5.8mである。最高所との標高差は約0.2mで，高低差はあまりない。

②平坦面1－2（第6・7図，図版5～8b）

第1郭群の北部に位置する。本郭最高所から北に向かって下っており，最高所から北に2番目の平坦面である。北側には平坦面1－3，南側には平坦面1－7がある。南側の平坦面1－7との標高差は約1.7mで，斜面は急である。長さ11.6m，幅7.4mである。本平坦面は1間×2間の掘立柱建物跡ＳＢ２を伴う。建物跡の平面形は，方形でなく台形である。本平坦面は地形に沿って半円形を呈しており，西に長さ5.6mの石列1，北に長さ2.6mの石列2を伴う。いずれも外側に面を揃えて石が並べられている。

③平坦面1－3（第6・7図，図版5a・b）

第1郭群の北部に位置する。本郭最高所から北に向かって下っており，最高所から北に3番目の平坦面である。北側には平坦面1－4，南側には平坦面1－2がある。南側の平坦面1－2との標高差は約1mである。南北方向4m，東西方向4.6mである。南端の平坦面1－2との境には石列2がある。

④平坦面1－4（第6図，図版5a・b）

第1郭群の北端付近に位置する。本郭最高所から北に向かって下っており，最高所から北に4番目の平坦面である。北東側には平坦面1－15，南側には平坦面1－3がある。南側の平坦面1－3との標高差は約1.5mで，その間の斜面は急である。長さ12.1m，幅6.8mである。

⑤平坦面1－5（第6・8図，図版9～11）

第1郭群の南西端に位置する。北東側には平坦面1－22があり，標高差は1.26mである。長さ9m，幅5.2～10.3mで，北東側が狭く，南西側が広くなっている。等高線に沿って北西・南東両方の谷側に土塁がある。平坦面を造成する際，地山を削り残すことによって土塁が造り出されており，平坦面1－22と連続している。南西端に長さ約7.5m，上端幅0.41～1.53m，下端幅0.83～2.12mの土塁状の高まりがある。土塁1の南西端から南方向に延びている。高さ0.21mと低い

ため，土塁ではなく通路として使用されていたものと思われる。本平坦面は２間×２間の建物跡ＳＢ３を伴う。青磁碗などの遺物が出土した。本平坦面は第１郭群の南端で，両側に土塁が造られ，第２郭群との間の堀切に面していることを考えても重要な平坦面であったことが考えられる。

⑥平坦面１－６（第６図，図版４c）

平坦面１－１の北に位置し，第１郭群最高所を中心とする平坦面である。長さ5.8m，長さ2.2mである。北側の平坦面１－７との間には岩盤が広がっている。

⑦平坦面１－７（第６・９図，図版12～14b）

平坦面１－６の北に位置する。平坦面１－６からやや下っているが，高低差は約0.3mである。長さ13.1m，幅7.2mで，本郭群のなかでは最も広い平坦面で，２間×２間の建物跡ＳＢ１を伴う。また，東端と北東端の一部に石列が見られ，東端の石列３は長さ4.4m，北東端の石列４は長さ1.3mで，いずれも外側に面を揃えて石が並べられている。南側の平坦面１－６との間には岩盤が露出している。

⑧平坦面１－８（第６図，図版４c）

第１郭群の中央部，平坦面１－６・１－７の西に位置する。尾根筋からはずれており，平坦面１－６との標高差は約0.8mである。長さ７m，幅0.6～1.3mの細長い平坦面である。

⑨平坦面１－９（第６図，図版４c）

平坦面１－８の西に位置する。尾根筋からはずれており，平坦面１－８との標高差は約１mである。長さ9.4m，幅３mである。平坦面の南側に直径約1.5mの円形状のかく乱坑がある。

⑩平坦面１-10（第６図，図版５a）

平坦面１－７の西に位置する。尾根筋からはずれており，平坦面１－７との標高差は約１mである。長さ６m，幅3.5mである。

⑪平坦面１-11（第６図，図版12c）

平坦面１－７の北東に位置する。尾根筋からはずれており，平坦面１－７との標高差は約１mである。平坦面１－７との間に石列４がある。長さ９m，幅1.5mの細長い平坦面である。

⑫平坦面１-12（第６図，図版12c）

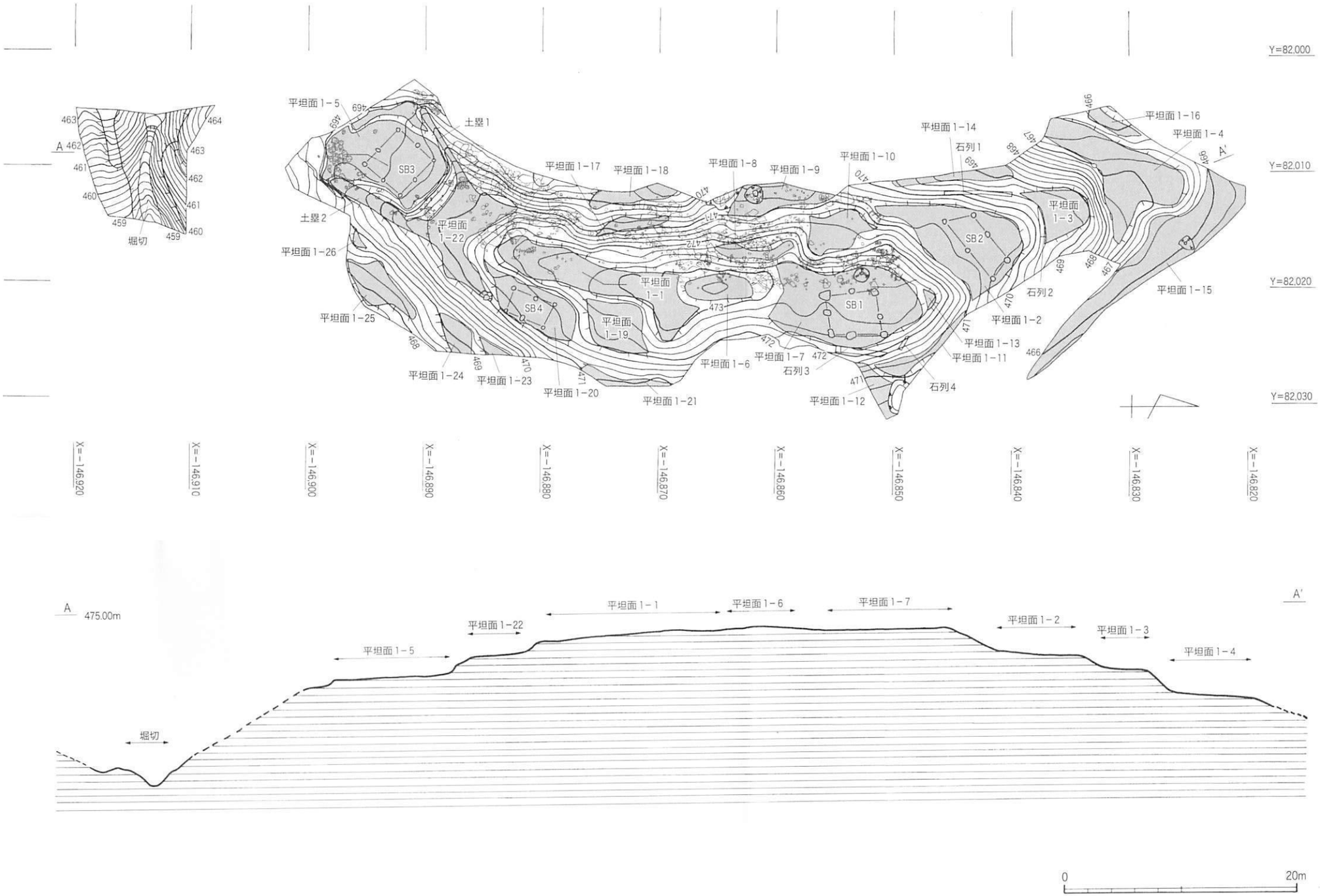
平坦面１－７の東に位置する。尾根筋からはずれており，東に突出した平坦面である。本平坦面の下には，巨石が露出している。城の麓からもこの岩壁はよく見えたことと思われる。平坦面１-11との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。平坦面１－７との間に石列３がある。長さ5.5m，幅３mである。北端は新しい時期の土坑によって壊されている。

⑬平坦面１-13（第６図）

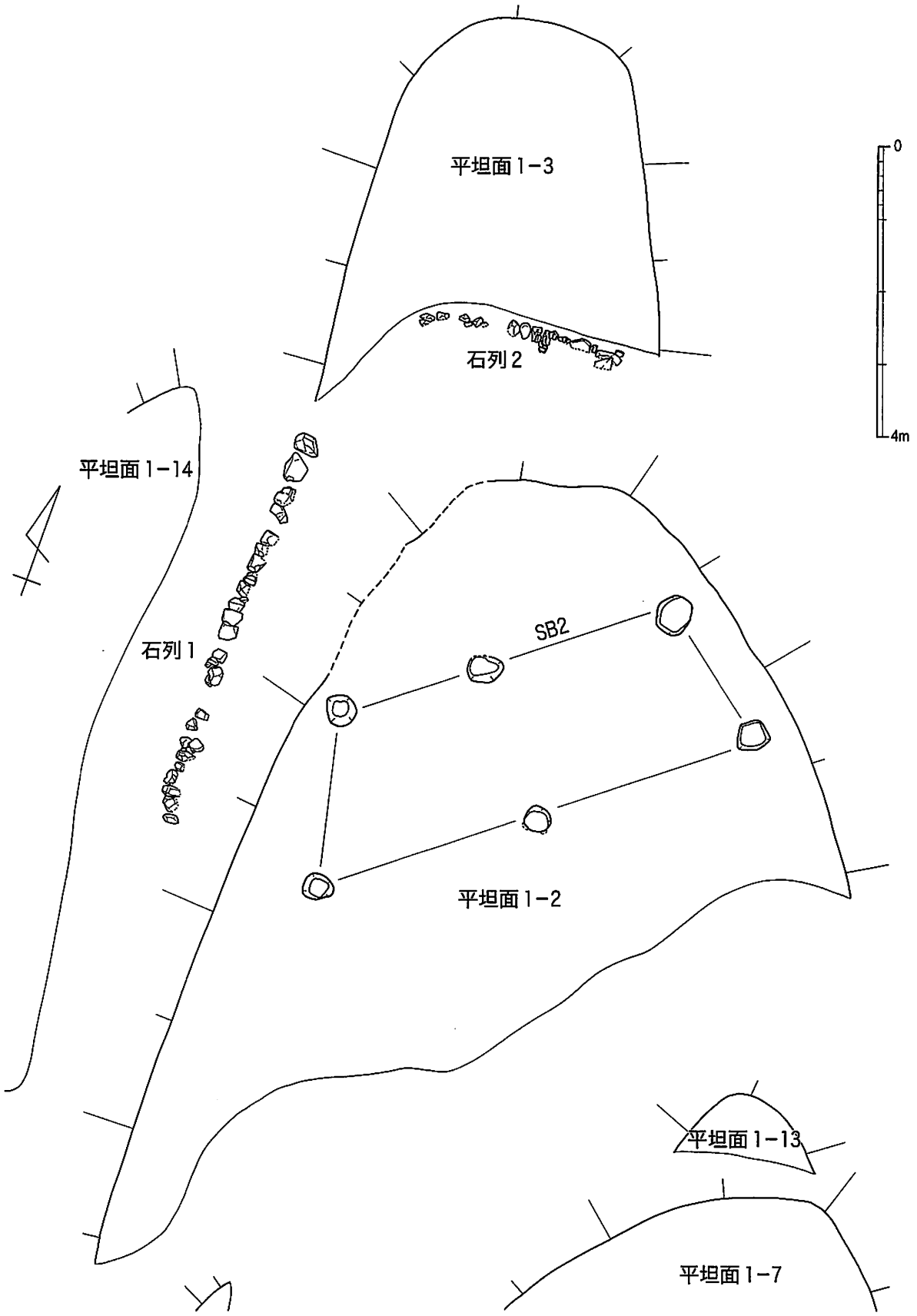
第１郭群の北寄り，平坦面１－２と１－７の間に位置する。尾根筋に造られている。平坦面１－７とは0.4mしか離れておらず，標高差は約0.2mで，高低差もあまりない。長さ1.9m，幅0.8mの小規模な平坦面である。

⑭平坦面１-14（第６図，図版５b・６b）

第１郭群の北部，平坦面１－２の西側に位置する。尾根筋からはずれており，平坦面１－２との



第6図　第1郭群遺構配置図（1：400）



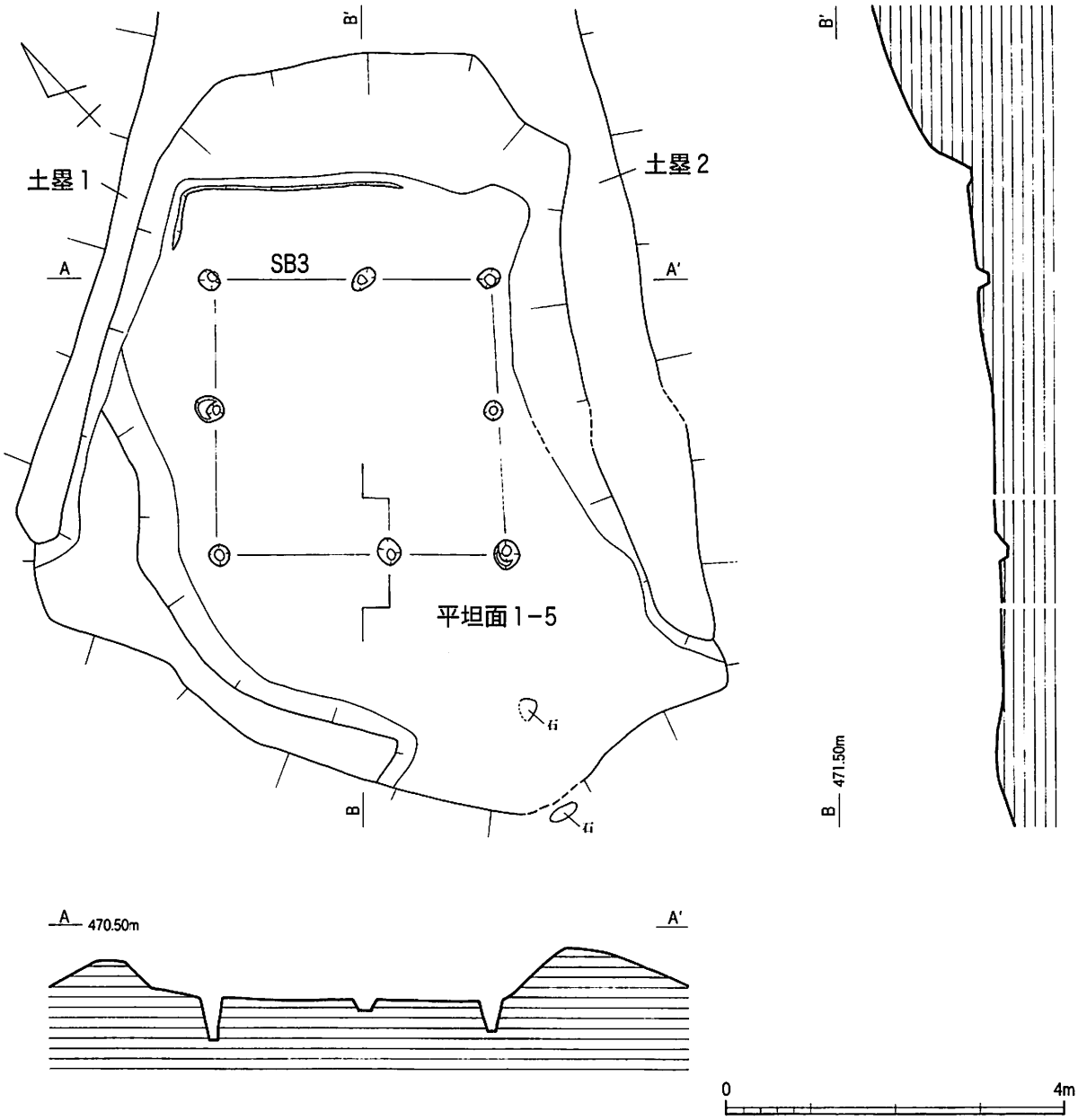
第7図　平坦面1−2・1−3実測図（1：80）

標高差は約1～1.5mで，その間には石列1がある。長さ10.1m，幅0.3～1.1mの細長い平坦面である。

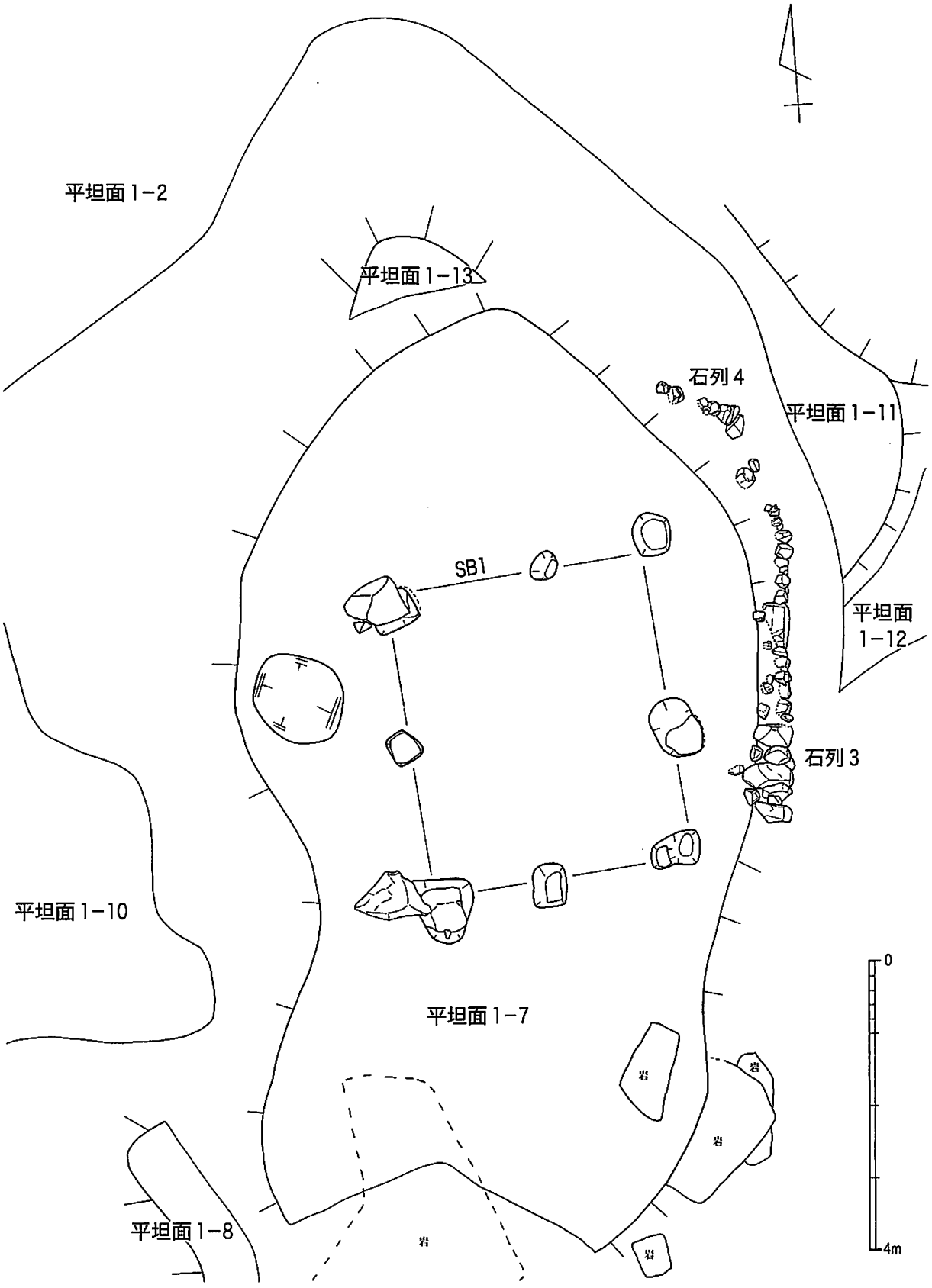
⑮平坦面1-15（第6図，図版5b）

第1郭群の最北端に位置する。平坦面1-4の北東側にあり，標高差は約0.7mである。等高線に沿って尾根の東側を帯状に延びており，長さ24.9m，幅4.2mである。

⑯平坦面1-16（第6図，図版5b）



第8図　平坦面1-5実測図（1：80）



第9図　平坦面1-7実測図（1：80）

第１郭群の北西端に位置する。平坦面１－４の西側にあり，標高差は約0.3mで，高低差はあまりない。尾根筋からはずれており，長さ4.4m，幅1.2mである。

⑰平坦面１-17（第６図）

第１郭群の南寄り，平坦面１－１の西側に位置する。平坦面１－１との標高差は１～２mである。尾根筋からはずれており，長さ6.7m，幅1.2mの細長い平坦面である。

⑱平坦面１-18（第６図）

第１郭群の南寄り，平坦面１-17の西側に位置する。平坦面１-17との標高差は約１mである。尾根筋からはずれおり，長さ7.9m，幅1.4mの細長い平坦面である。

⑲平坦面１-19（第６図，図版14c）

第１郭群の南寄り，平坦面１－１の南東側に位置する。平坦面１－１との標高差は約0.3mで，高低差はあまりない。尾根筋からはずれており，長さ4.7m，幅4.2mの方形に近い平坦面である。

⑳平坦面１-20（第６図，図版14c，15a・b）

第１郭群の南部に位置する。平坦面１－１の南東，平坦面１-19の南にある。平坦面１－１との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。尾根筋からはずれており，長さ10.1m，幅3.5mである。１間×２間の建物跡ＳＢ４を伴い，本平坦面の南側斜面で炉跡ＳＲ１を確認した。

㉑平坦面１-21（第６図，図版14c）

第１郭群の南寄り，平坦面１-19の東側に位置する。平坦面１-19との標高差は約0.8mである。尾根筋からはずれおり，長さ8.3m，幅0.9mの細長い平坦面である。

㉒平坦面１-22（第６図，図版15c）

第１郭群の南部，平坦面１－１の南西，平坦面１－５の北東に位置する。平坦面１－１との標高差は約0.8mである。尾根筋にあり，西端から土塁１，南端から土塁２が延びている。平坦面１－５・１-22，土塁１・２は同時に造られたものと思われる。長さ・幅とも8.5mである。本平坦面の北端に自然石を巧みに残した石の固まりが見られる。これは石垣状に石が積み重なっているように見えるもので，視覚的効果を持つものであったと考えられる。

㉓平坦面１-23（第６図）

第１郭群の南部，平坦面１-20の南東に位置する。平坦面１-20との標高差は約1.7mである。尾根筋からはずれおり，長さ3.4m，幅１mの小規模な平坦面である。

㉔平坦面１-24（第６図，図版16a）

第１郭群の南部，平坦面１-23の南に位置する。平坦面１-23との標高差は約0.3mで，あまり高低差はない。尾根筋からはずれおり，長さ3.5m，幅2.3mである。

㉕平坦面１-25（第６図，図版16a）

第１郭群の南端，平坦面１-22の南東に位置する。平坦面１-22との標高差は約２mである。尾根筋からはずれており，長さ7.8m，幅2.8mである。

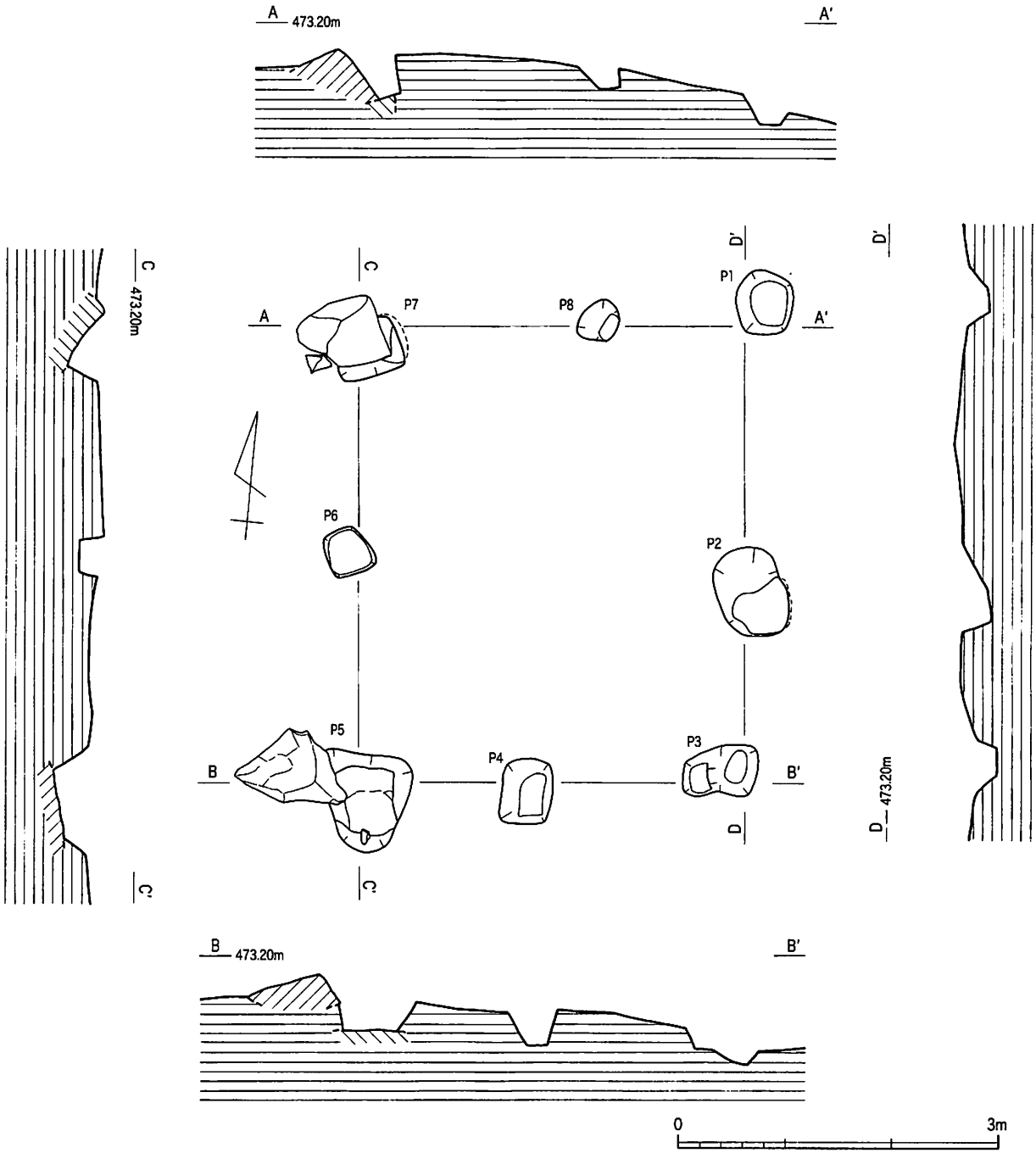
㉖平坦面１-26（第６図）

第１郭群の南端，平坦面１－５と平坦面１-25の間にある。平坦面１－５南東側の土塁２との標

高差は約１ｍである。尾根筋からはずれており，平面形は三角形に近く，長さ２ｍ，幅0.7ｍの小さな平坦面である。

（２）建物跡

①ＳＢ１（第10図，図版12a・b）



第10図　ＳＢ１実測図（１：60）

第１郭群中央北寄りの平坦面１－７に伴う２間×２間の掘立柱建物跡である。主軸は南北方向で，主軸方位はＮ５°Ｗである。桁行方向の規模は4.3m，梁行方向の規模は3.8mである。桁行方向の柱間距離は南側のＰ１－Ｐ２間が2.75m，Ｐ２－Ｐ３間が1.55m，Ｐ５－Ｐ６間が2.15m，Ｐ６－Ｐ７間が2.15mである。最短1.55m，最長2.75mとばらつきがある。梁行方向の柱間距離はＰ３－Ｐ４間が２m，Ｐ４－Ｐ５間が1.8m，Ｐ７－Ｐ８間が2.2m，Ｐ８－Ｐ１間が1.6mである。概ね桁行方向の柱間距離より短く，最短1.6m，最長2.2mとばらつきがある。

柱穴は礫を多く含む地山を掘り込んでおり，岩盤が露出する部分もある。柱穴の平面形は円形のものと方形に近いものが見られ，大きさも一定ではない。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径0.61m×短径0.53m，深さ0.27m，Ｐ２が長径0.85m×短径0.63m，深さ0.3mである。Ｐ３は柱が抜き取られたためか２つのピットが重なったように細長くなっており，底部も二段落ちになっている。長径0.7m×短径0.48m，深さ0.39mである。Ｐ４は方形で長さ0.61m，幅0.47m，深さ0.34m，Ｐ５は長径0.9m×短径0.8m，深さ0.4mで，底面及び西側には地山の岩が露出している。Ｐ６は方形で一辺0.44m，深さ0.27m，Ｐ７は長径0.64m×短径0.52m，深さ0.34mで，底面及び西側にかけて地山の岩が露出している。Ｐ８は長径0.42m×短径0.53m，深さ0.2mの小規模な柱穴である。柱穴の埋土はいずれも単層で，Ｐ１・２が黄褐色砂質土，Ｐ３・６が褐色砂質土，Ｐ４が灰黄色砂質土，Ｐ５が褐色土，Ｐ７が赤褐色土，Ｐ８が黄褐色土である。

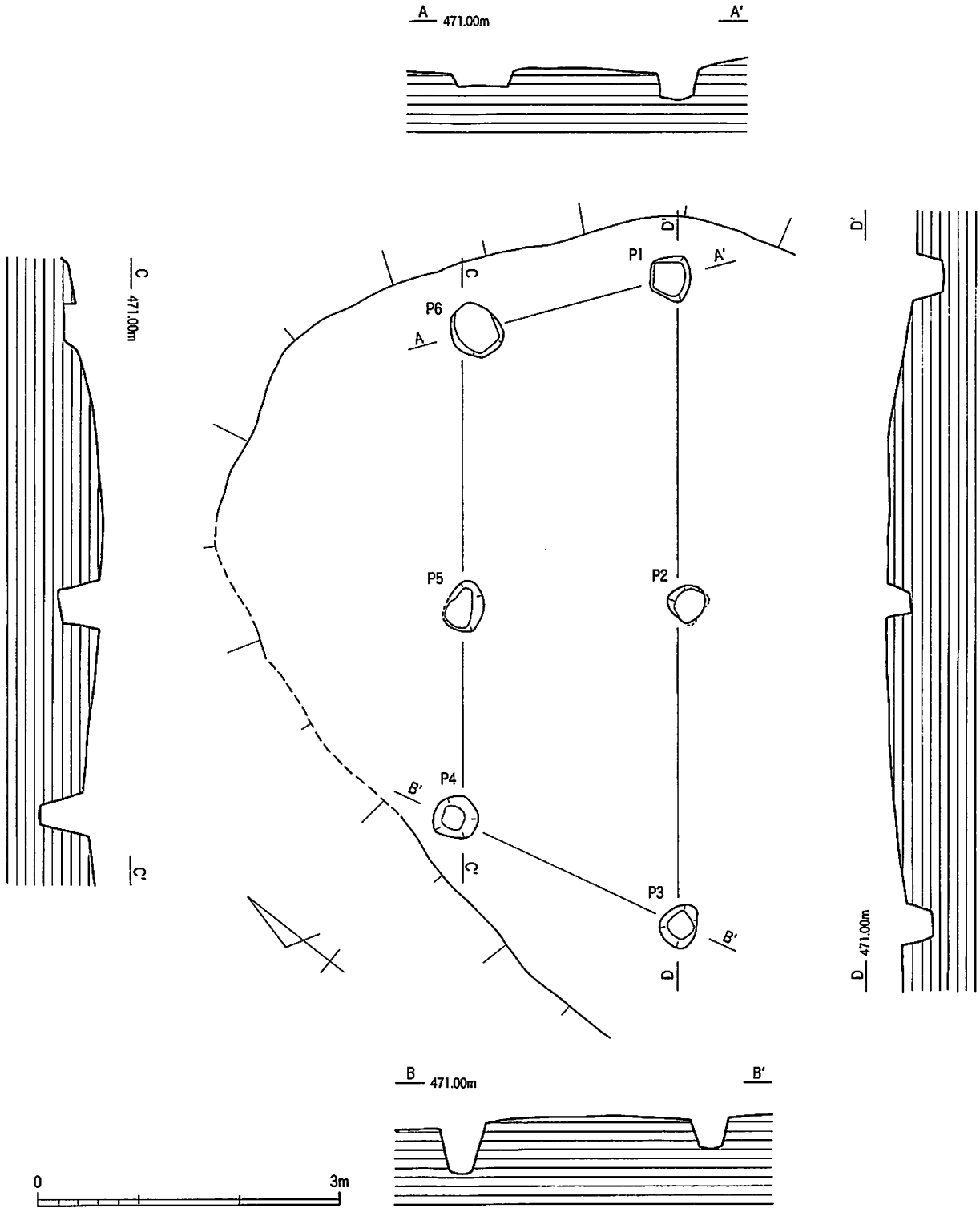
②ＳＢ２（第11図，図版５c，６a）

第１郭群北部の平坦面１－２に伴う１間×２間の掘立柱建物跡である。平面形は方形でなく台形である。主軸は北東-南西方向で，主軸方位はN52°Ｅである。桁行方向の規模は南東側が長く6.35m，北西側が短く4.8mである。梁行方向の規模は2.1mである。桁行方向の柱間距離はＰ１－Ｐ２間が3.2m，Ｐ２－Ｐ３間が3.15m，Ｐ４－Ｐ５間が2.1m，Ｐ５－Ｐ６間が2.7m，である。一般的な建物と比べるとかなり桁行方向が長い。梁行方向の柱間距離はＰ３－Ｐ４間が2.5m，Ｐ６－Ｐ１間が2.3mである。

柱穴は地山を掘り込んでおり，直径0.4～0.5mの円形のものが多い。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径0.45m×短径0.39cm，深さ0.31m，Ｐ２が長径0.39m×短径0.35m，深さ0.28m，Ｐ３が長径0.43m×短径0.36m，深さ0.29m，Ｐ４が長径0.44m×短径0.41m，深さ0.47m，Ｐ５が長径0.5m×短径0.37m，深さ0.42m，Ｐ６が長径0.55m×短径0.49m，深さ0.13mである。Ｐ６は浅く，この周辺は平坦面１－２のなかでも低くなっていることから，削平を受けているものと思われる。柱穴の埋土はいずれも単層で，Ｐ１が褐色砂質土，Ｐ２が褐色土，Ｐ３が灰黄褐色砂質土，Ｐ４・５が黄褐色砂質土，Ｐ６が黄褐色土である。

③ＳＢ３（第12図，図版10b）

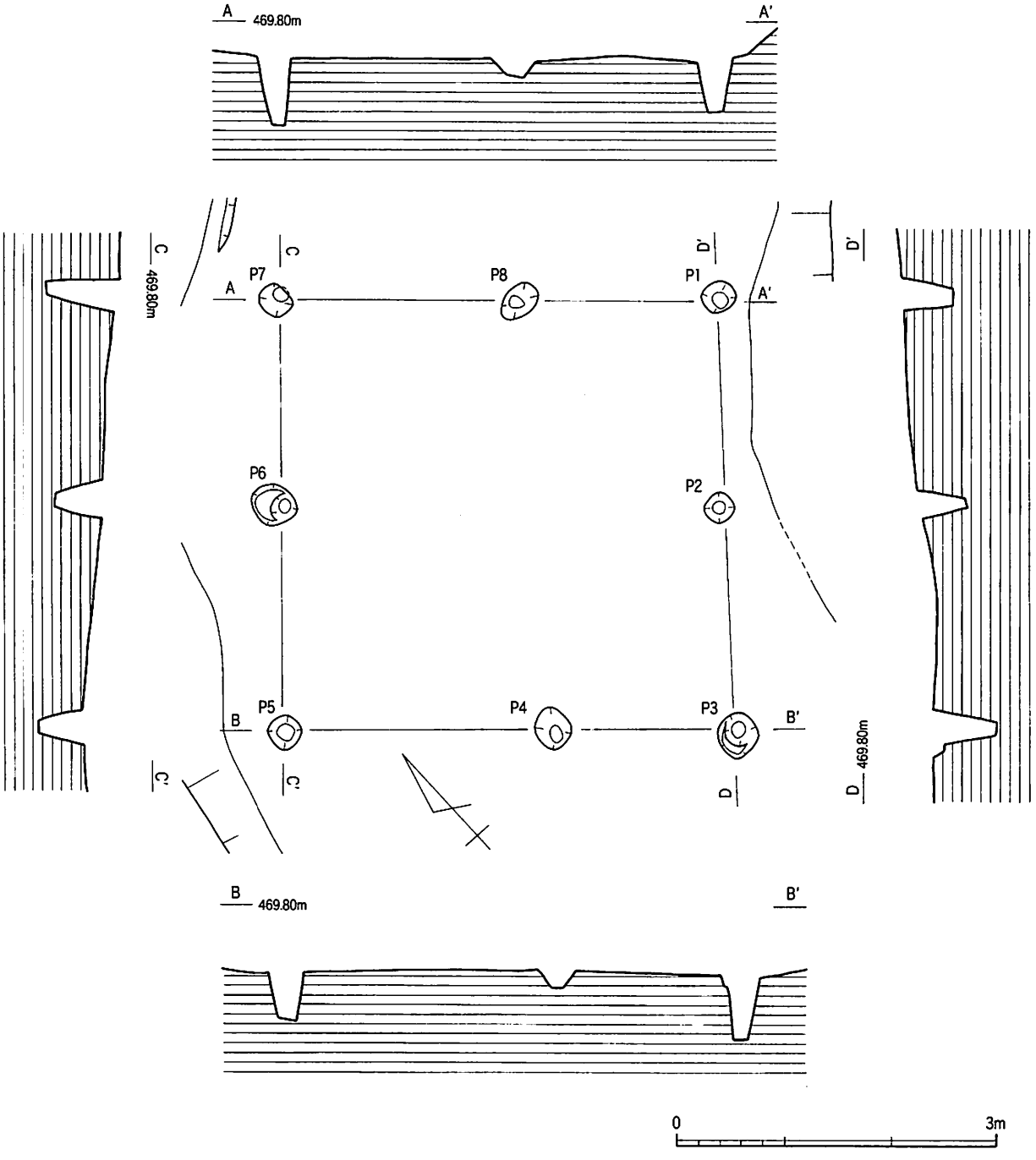
第１郭群南西端の平坦面１－５に伴う２間×２間の掘立柱建物跡である。平坦面１－５は両側に土塁を伴い，南側の第２郭群との境には堀切がある。主軸方向は北東-南西方向で，主軸方位はN40°Ｅである。桁行方向の規模は４m，梁行方向の規模は４～4.2mで，北東側に比べ南西側がやや広くなっている。桁行方向の柱間距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.95m，Ｐ２－Ｐ３間が2.05m，Ｐ



第11図　ＳＢ２実測図（１：60）

5－Ｐ６間が2.05m，Ｐ６－Ｐ７間が1.95mである。梁行方向の柱間距離は，Ｐ３－Ｐ４間が1.65m，Ｐ４－Ｐ５間が2.55m，Ｐ７－Ｐ８間が2.15m，Ｐ８－Ｐ１間が1.85mである。最短1.65m，最長2.55mとばらつきがある。

柱穴は地山を掘り込んでおり，円形で直径0.3～0.4mのものが多い。柱穴の規模は，Ｐ１が長径0.33m×短径0.3m，深さ0.47m，Ｐ２が直径0.28m，深さ0.45m，Ｐ３が長径0.43m×短径0.38



第12図　ＳＢ３実測図（１：60）

m，深さ0.61mで，二段落ちになっている。Ｐ４が長径0.39m×短径0.34m，深さ0.18m，Ｐ５が直径0.32m，深さ0.44m，Ｐ６が長径0.45m×短径0.38m，深さ0.46mで，二段落ちになっている。Ｐ７が長径0.31m×短径0.25m，深さ0.66m，Ｐ８が長径0.4m×短径0.27m，深さ0.16mである。梁行方向の中間にあるＰ４・８が他に比べ浅い。また，各柱穴の底径が比較的揃っており，Ｐ１が0.13m，Ｐ２が0.12m，Ｐ３が0.13m，Ｐ４が0.12m，Ｐ５が0.14m，Ｐ６が0.12m，Ｐ７が0.14m，Ｐ８が0.12mである。底径の平均は0.128mで，この程度の直径の柱材が使用されていたのかもしれない。柱穴の埋土はＰ７を除いて単層で，Ｐ１・３～６・８が黄褐色砂質土，Ｐ２が褐色砂質土である。Ｐ７は３層からなり，上層が黄褐色砂質土，中層が暗灰黄色砂質土，下層が暗灰黄色土である。

④ＳＢ４（第13図，図版15a・b）

第１郭群南部に位置する平坦面１-20に伴う１間×２間の掘立柱建物跡である。主軸方向は北北東-南南西方向で，主軸方位はN24°Ｅである。桁行方向の規模は3.7m，梁行方向の規模は2.1mである。桁行方向の柱間距離はＰ１-Ｐ２間が２m，Ｐ２-Ｐ３間が1.6m，Ｐ４-Ｐ５間が２m，Ｐ５-Ｐ６間が1.7mである。Ｐ４とＰ６の中間にあるＰ５は，Ｐ４とＰ６を結んだ中心線から0.15m内側に入っている。

柱穴は地山を掘り込んでおり，平面形が円形で，直径0.3m程度の小規模なものが多い。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径0.26m×短径0.23m，深さ0.61m，Ｐ２が長径0.45m×短径0.37m，深さ0.48mで一部深くなったところがある。Ｐ３が長径0.32m×短径0.26m，深さ0.37m，Ｐ４が長径0.33m×短径0.28m，深さ0.63mで，南東側の形が崩れているが，木の根による攪乱である。Ｐ５が長径0.35m×短径0.3m，深さ0.21m，Ｐ６が長径0.31m×短径0.27m，深さ0.19mである。柱穴の埋土はいずれも単層で，Ｐ１が暗灰黄褐色砂質土，Ｐ２～４が黄褐色砂質土，Ｐ５が黄色砂質土，Ｐ６が灰黄色砂質土である。

（３）土塁

①土塁１（第６・８図，図版10c・11a）

第１郭群平坦面１-５北西側の東北東-西南西方向の土塁である。長さ7.7m，上部の幅0.4～1m，高さ0.25～1.15mである。平坦面１-５・１-22を造成する際，平坦面１-５の両側の地山を削り残すことによって高まりを造り出したもので，平坦面１-22と連続している。北西側は急な切岸を形成している。南西端に長さ約7.5m，上端幅0.41～1.53m，下端幅0.83～2.12mの土塁状の高まりがある。土塁１の南西端から南方向に延びている。高さ0.21mと低いため，土塁ではなく通路として使用されていたものと思われる。土塁１もこの高まりの延長と捉えることができ，平坦面１-22や北側の平坦面をつなぐ通路として使用されたものと思われる。

②土塁２（第６・８図，図版11b・c）

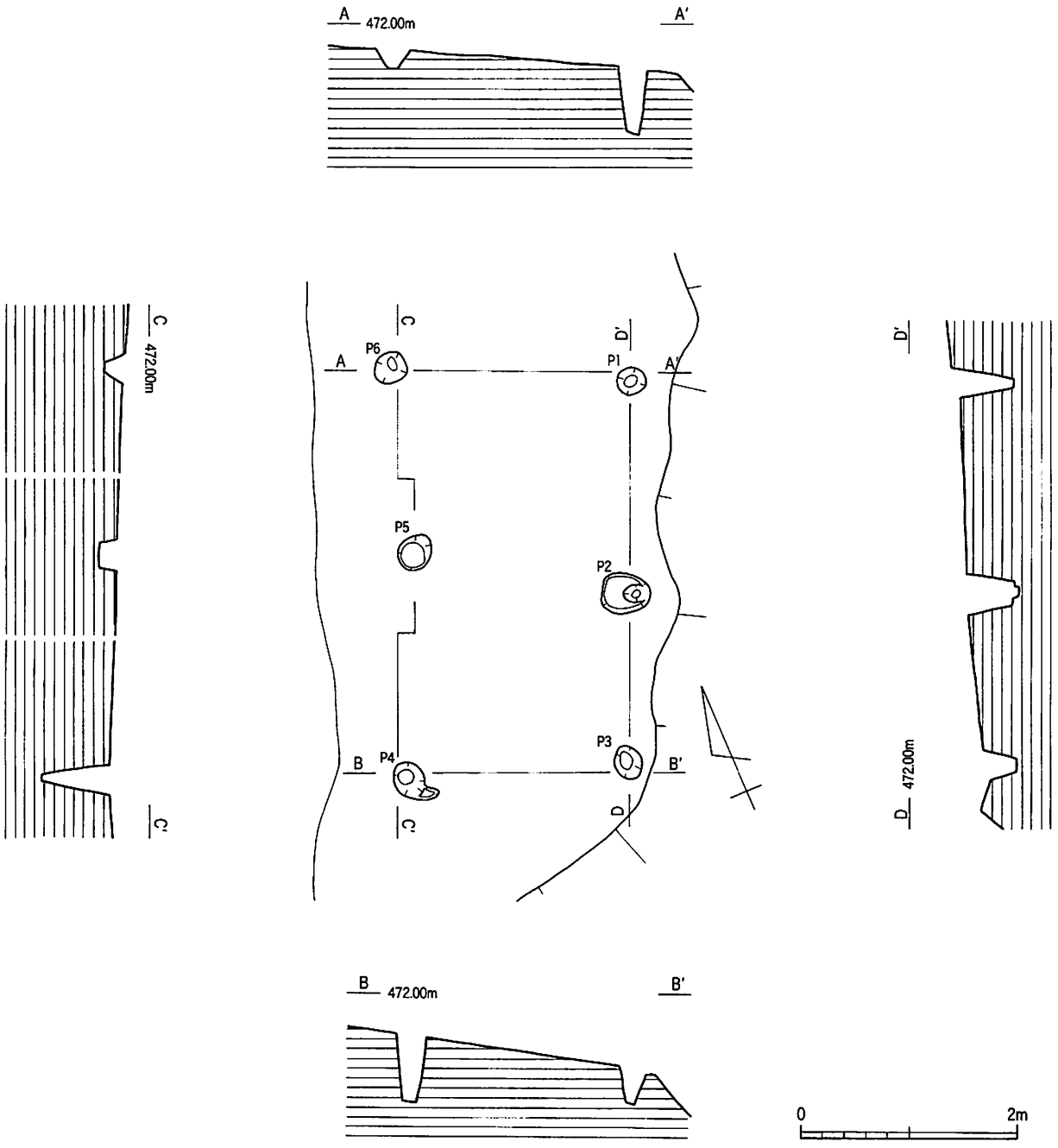
第１郭群平坦面１-５南東側の北東-南西方向の土塁である。長さ9.4m，上部の幅0.7～1.2m，高さ0.15～1.2mである。土塁１と同じく平坦面１-５・１-22を造成する際，平坦面１-５の両側

の地山を削り残すことによって高まりを造り出したもので，平坦面１-22と連続している。南東側には小規模な平坦面もあるが，切岸をなしている。

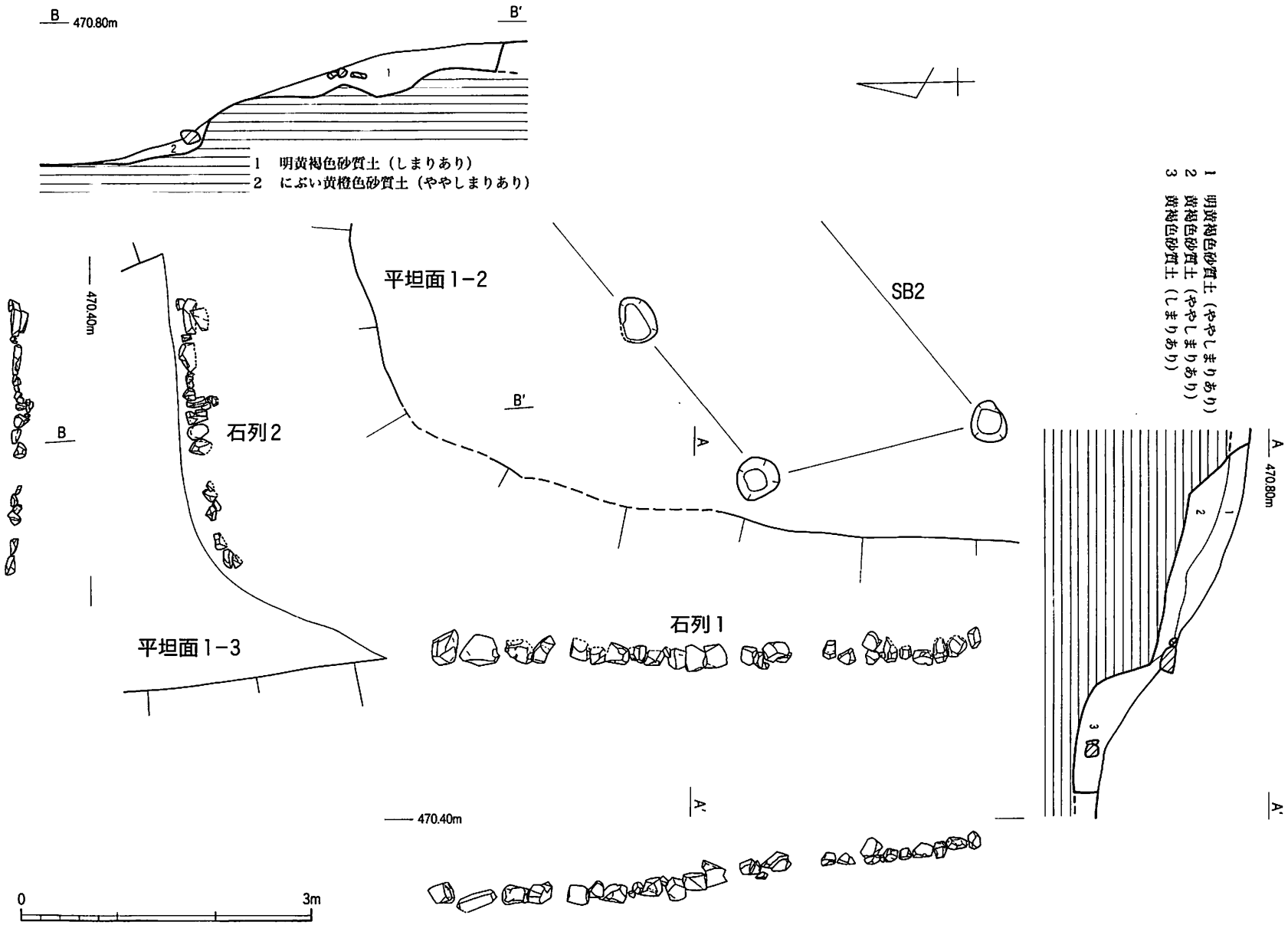
（４）石列

①石列１（第14図，図版６b・c，７a・b）

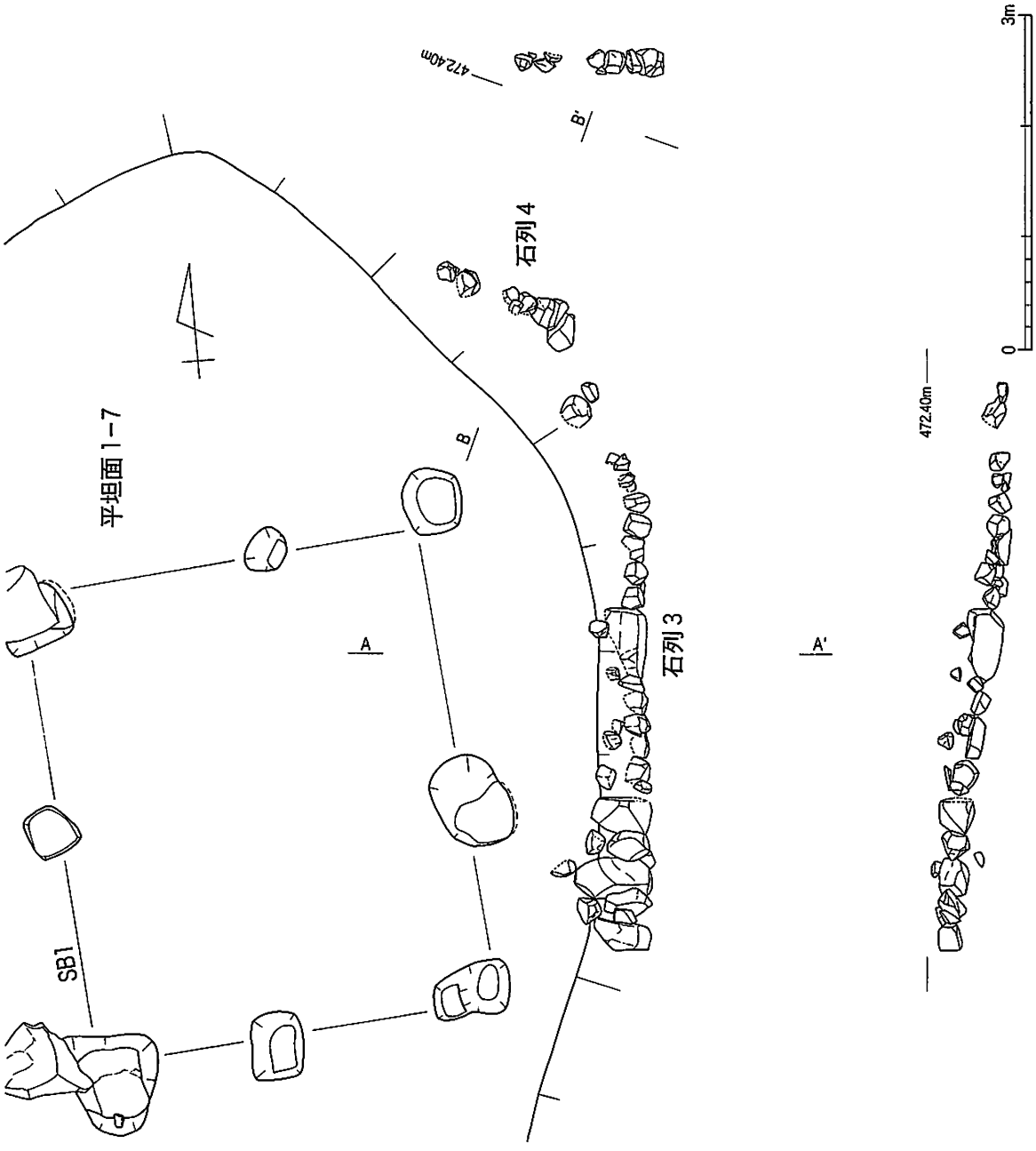
平坦面１-２西側の石列である。南北方向の石列で，外側に面を揃えて石が並べられている。



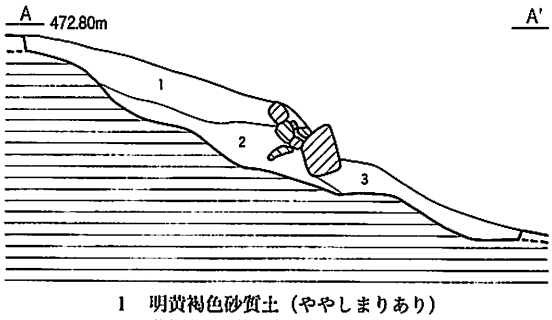
第13図　ＳＢ４実測図（１：60）



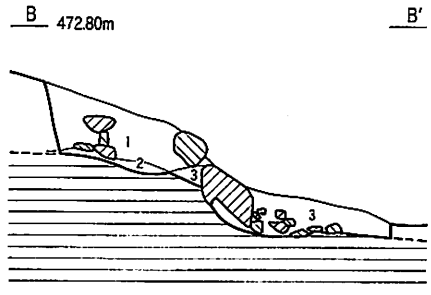
第14図　石列1・2実測図（1：60）



第15図　石列3・4実測図（1：60）



1　明黄褐色砂質土（ややしまりあり）
2　黄褐色砂質土（ややしまりあり）
3　黄褐色砂質土（しまりあり）



1　明黄褐色砂質土（ややしまりあり）
2　黄褐色砂質土（しまり弱い）
3　黄褐色砂質土（ややしまりあり）

平坦面１－２の西端から約0.8m下がったところにある。石は１段のみで，地形に応じて基底面が北側に下がっている。長さ5.6mで，部分的に石が抜けている。６～42cm大の石を使用しているが，15～25cm大の石が多い。

②石列２（第14図，図版７c，８a・b）

平坦面１－２北側の石列である。東西方向の石列で，外側に面を揃えて石が並べられている。平坦面１－２の北端から約0.86～0.37m下がった北側の平坦面１－３の南端付近にある。石は１段のみで，基底面はほぼ水平である。長さ2.6mで，部分的に石が抜けている。５～37cm大の石を使用しているが，15cm程度の石が多い。

③石列３（第15図，図版12c，13）

平坦面１－７の東端の石列である。南北方向に面を揃えて石が並べられている。石は基本的には１段で，部分的に石が積み重なったところもある。地形に応じて基底面が北側に下がっている。長さ4.4mで，５～65cm大の石を使用しているが，15～30cm大の石が多い。

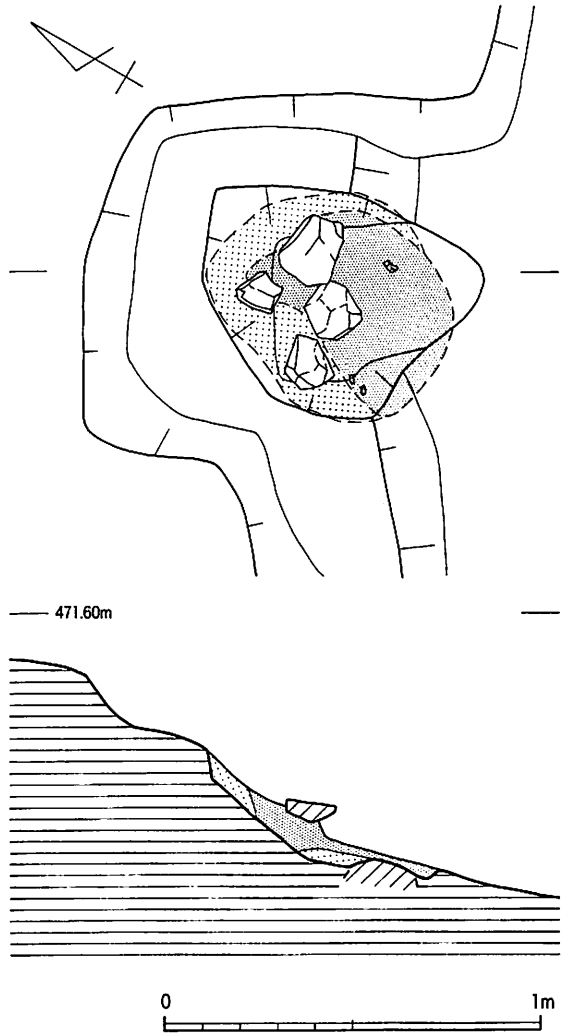
④石列４（第15図，図版12c，13a，14a・b）

平坦面１－７の北東端の石列である。平坦面１－７の北端は直線ではなく，中央が張り出しており，本石列もそれに沿って，北西-南東方向に延びている。外側に面を揃えて石が並べられている。石は基本的には１段で，部分的に石が積み重なったところもある。基底面は南東側に下がっている。長さ1.3mで，中央部の石が抜けている。他の石列に比べると短い。7～35cm大の石を使用しているが，15～20cm大の石が多い。

（５）炉跡

①ＳＲ１（第16図，図版16b・c，17a）

ＳＢ４がある平坦面１-20の南側斜面で検出した。平坦面１-20からの距離は約0.4mである。緩やかな斜面を一辺0.95mの方形状に掘り込み，底面の中央部をさらに不整長円形に掘り込んでいる。底面の掘り込みは，長径0.74m×短径0.59m，深さ0.35mである。内部に焼土や炭化物が充満し，上部付近に12～18cm大の石が４個入っている。



第16図　ＳＲ１実測図（１：20）
（濃いアミ目は炭化物，薄いアミ目は焼土）

2　第２郭群（第17図，図版３a，18a・b）

第１郭群の南にある第２郭群は，東に向かって派生する支尾根上に造られており，標高は453～468mである。東端は調査区外に延びており，平坦面もいくつか見られる。調査区内で大小11か所の平坦面を確認し，平坦面２－４では土塁を検出した。西側の平坦面が広く，東に向かうにつれ平坦面の規模は次第に小さくなる。本郭群からは建物跡などの遺構は検出されず，遺物も出土しなかった。本城跡が存在する丘陵尾根は南方面に続いており，堀切は設けられていない。

（１）平坦面

①平坦面２－１（第17図，図版18c）

第２郭群北西端の平坦面である。本郭群最高所で，標高468.25mである。南側が広く，北側は尾根筋に沿って細長く延びている。西側は調査区外に続いており，長さ22.4m，現状で幅6.7mである。最高所を中心として，かなり広い平坦面である。

②平坦面２－２（第17図，図版19a・b）

第２郭群西端の平坦面で，平坦面２－１の南に位置する。西側は調査区外に続いており，長さ18.2m，現状で幅12.6mである。平坦面２－１との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。本郭群のなかで最も広い平坦面である。

③平坦面２－３（第17図，図版18c）

平坦面２－１の東に位置する。尾根筋からはずれ，等高線に沿って細長く延びる。長さ9m，幅0.8mである。平坦面２－１との標高差は0.5～１mである。

④平坦面２－４（第17図，図版19a・c，20a）

平坦面２－２の東に位置する。北端に東西方向の土塁３を伴う。長さ10.5m，幅8.7mである。平坦面２－２との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。

⑤平坦面２－５（第17図，図版19a，20b・c）

平坦面２－４の東に位置する。長さ9.9m，幅9.6mである。平坦面２－４との標高差は約１mである。

⑥平坦面２－６（第17図，図版20b）

平坦面２－５の北に位置する。尾根筋からはずれており，長さ3.5m，幅1.9mの小規模な平坦面である。平坦面２－５との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。

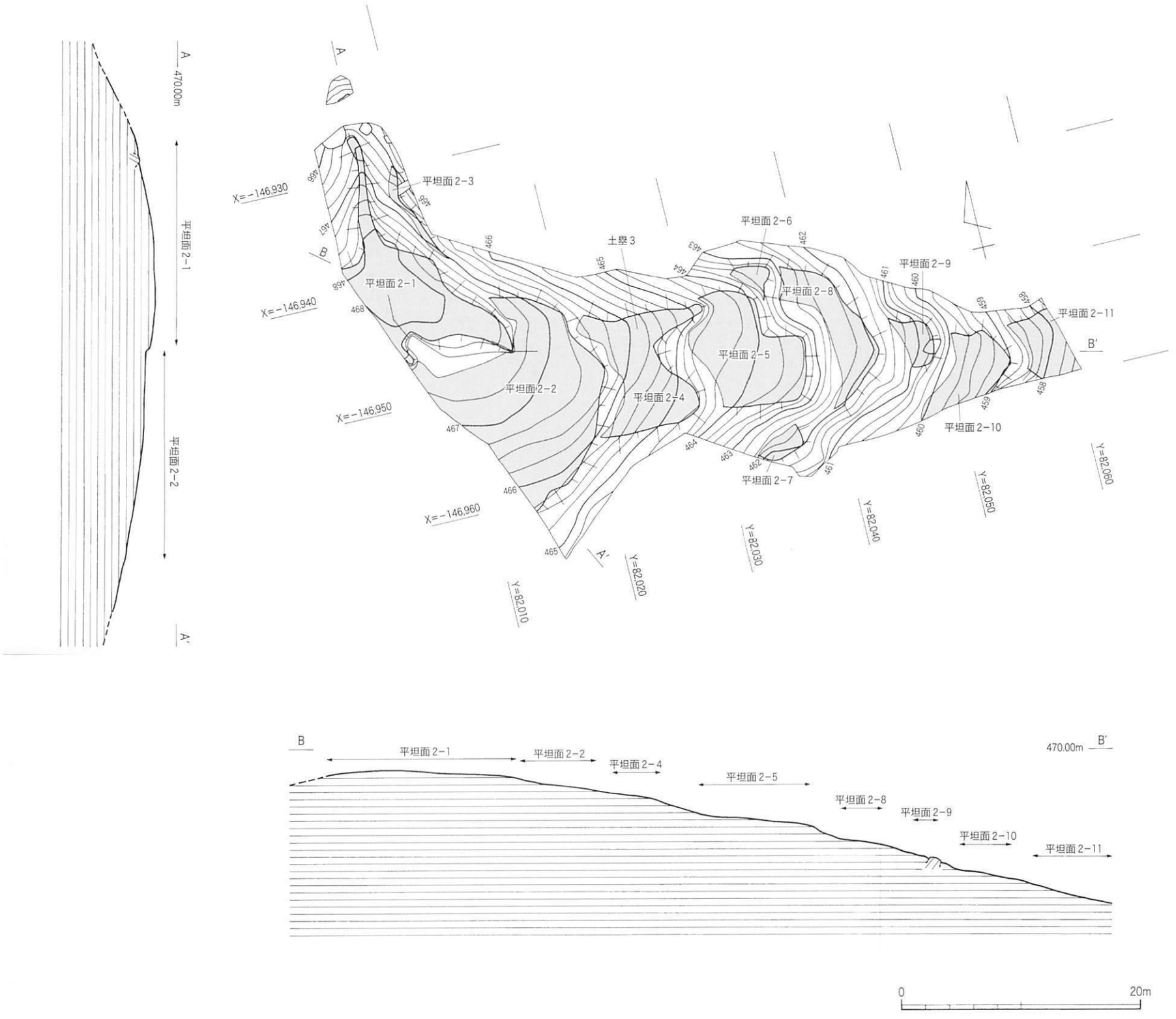
⑦平坦面２－７（第17図，図版20b）

平坦面２－５の南に位置する。尾根筋からはずれており，長さ４m，幅1.7mの小規模な平坦面である。平坦面２－５との標高差は約１mである。

⑧平坦面２－８（第17図，図版20b，21a）

平坦面２－５の東に位置する。長さ12.7m，幅3.6mである。平坦面２－５との標高差は約１mである。

⑨平坦面２－９（第17図，図版20b，21a）



第17図　第２郭群遺構配置図（１：400）

平坦面２－８の東に位置する。長さ4.7m，幅2.4mの小規模な平坦面である。平坦面２－８との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。

⑩平坦面２-10（第17図，図版20b，21a～c）

平坦面２－９の東に位置する。長さ7.8m，幅4.6mである。平坦面２－９との標高差は0.5～１mである。

⑪平坦面２-11（第17図，図版21a・b）

平坦面２-10の東に位置する。東端は調査区外に続いており，現状で長さ5.6m，幅3.8mである。平坦面２-10との標高差は0.5mで，高低差はあまりない。

（２）土塁

①土塁３（第17図，図版20a）

平坦面２－４の北端にある東西方向の土塁である。地山を削り残すことによって高まりを造り出したもので，長さ５m，上部の幅0.8～2.6m，高さ0.5～１mである。

３　第３郭群（第18・19図，図版３b，22a・b）

第１郭群の北にある郭群で，平坦面を８か所，掘立柱建物跡を１棟検出した（第18図）。標高は第１郭群との境である南側が最も高く，458.89mである。北に向かって下っている。第１郭群との間には高低差約８mの急な切岸があるが，堀切は造られていない。本郭群は全般的に岩盤が露出している部分が多いこともあり，いずれの平坦面も小さく狭い。

（１）平坦面

①平坦面３－１（第18図，図版22c）

第３郭群の最も南側の平坦面である。平面形は三角形で，長さ3.7m，幅1.2mの小さな平坦面である。南側には岩盤が露出している。本郭群最高所との標高差は約１mである。

②平坦面３－２（第18図，図版22c）

第３郭群の南から２番目の平坦面である。平面形は方形に近く，長さ3.9m，幅3.5mで，中央は岩盤である。平坦面３－１との標高差は約１mである。

③平坦面３－３（第18図，図版23a・b）

第３郭群の南から３番目の平坦面である。平面形は半円形に近く，長さ6.1m，幅3.3mで，南側及び北部中央に岩盤がある。平坦面３－２との標高差は約１mである。本郭群の中では最も広い平坦面で，掘立柱建物跡ＳＢ５を伴う。

④平坦面３－４（第18図，図版23c）

平坦面３－３の北側に位置する。尾根筋からはややはずれている。長さ5.3m，幅1.7mで，南側及び北部中央に岩盤がある。平坦面３－３との標高差は約２mである。

⑤平坦面３－５（第18図，図版23c）

平坦面３－４の北西に位置する。南北方向が長く，長さ3.7m，幅2.4mである。平坦面３－４との標高差は約１ｍである。

⑥平坦面３－６（第18図，図版23c）

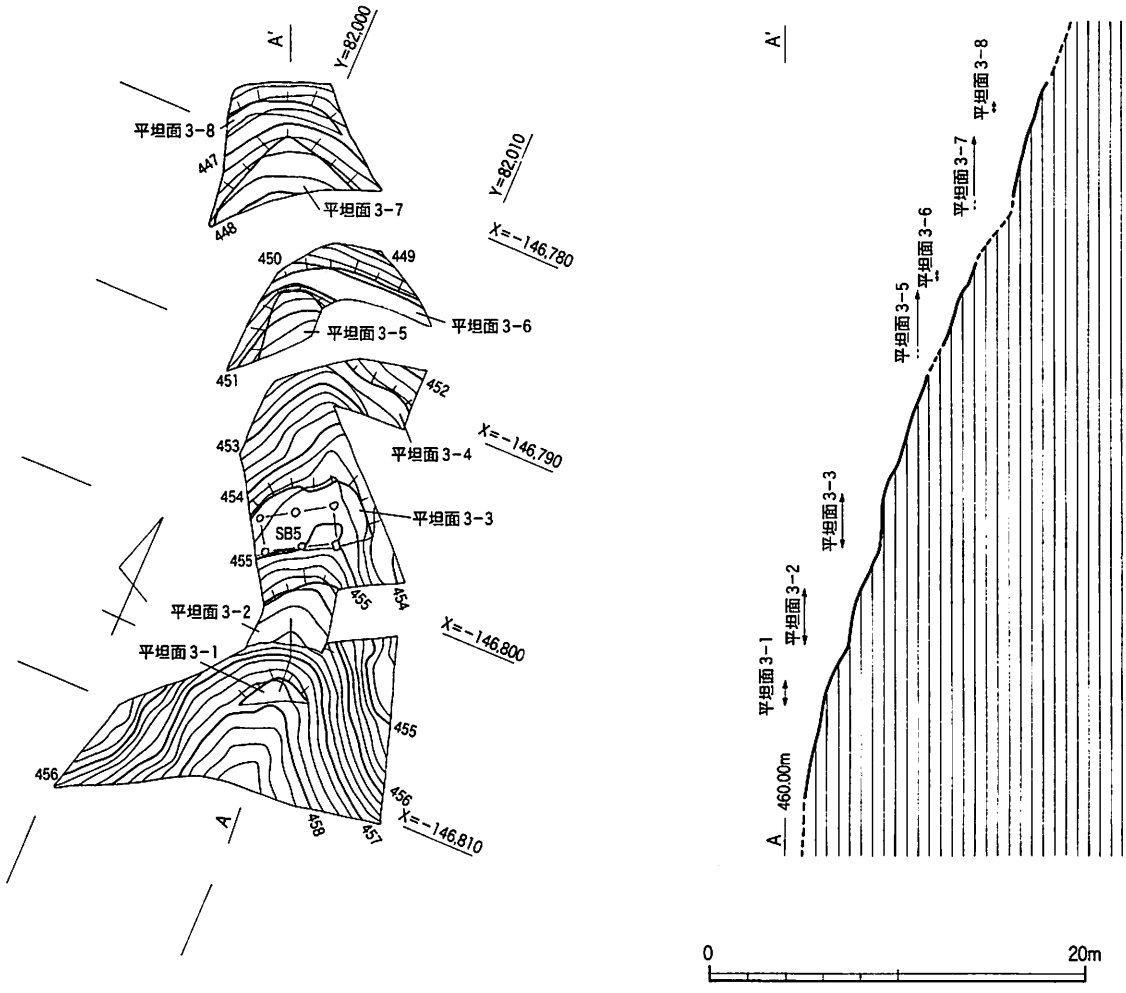
平坦面３－５の北に位置する。等高線に沿って細長く，長さ8.9m，幅1.6mである。平坦面３－５との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。

⑦平坦面３－７（第18図，図版23c）

平坦面３－６の北西に位置する。平面形は三角形で，長さ7.4m，幅３ｍである。本郭群の中では２番目に広い平坦面である。平坦面３－６との標高差は約３ｍで，その間の傾斜は他の部分より急角度である。

⑧平坦面３－８（第18図，図版23c）

平坦面３－７の北西に位置し，本郭群北端の平坦面である。等高線に沿って細長く，長さ６ｍ，幅0.8mである。平坦面３－７との標高差は約0.5mで，高低差はあまりない。



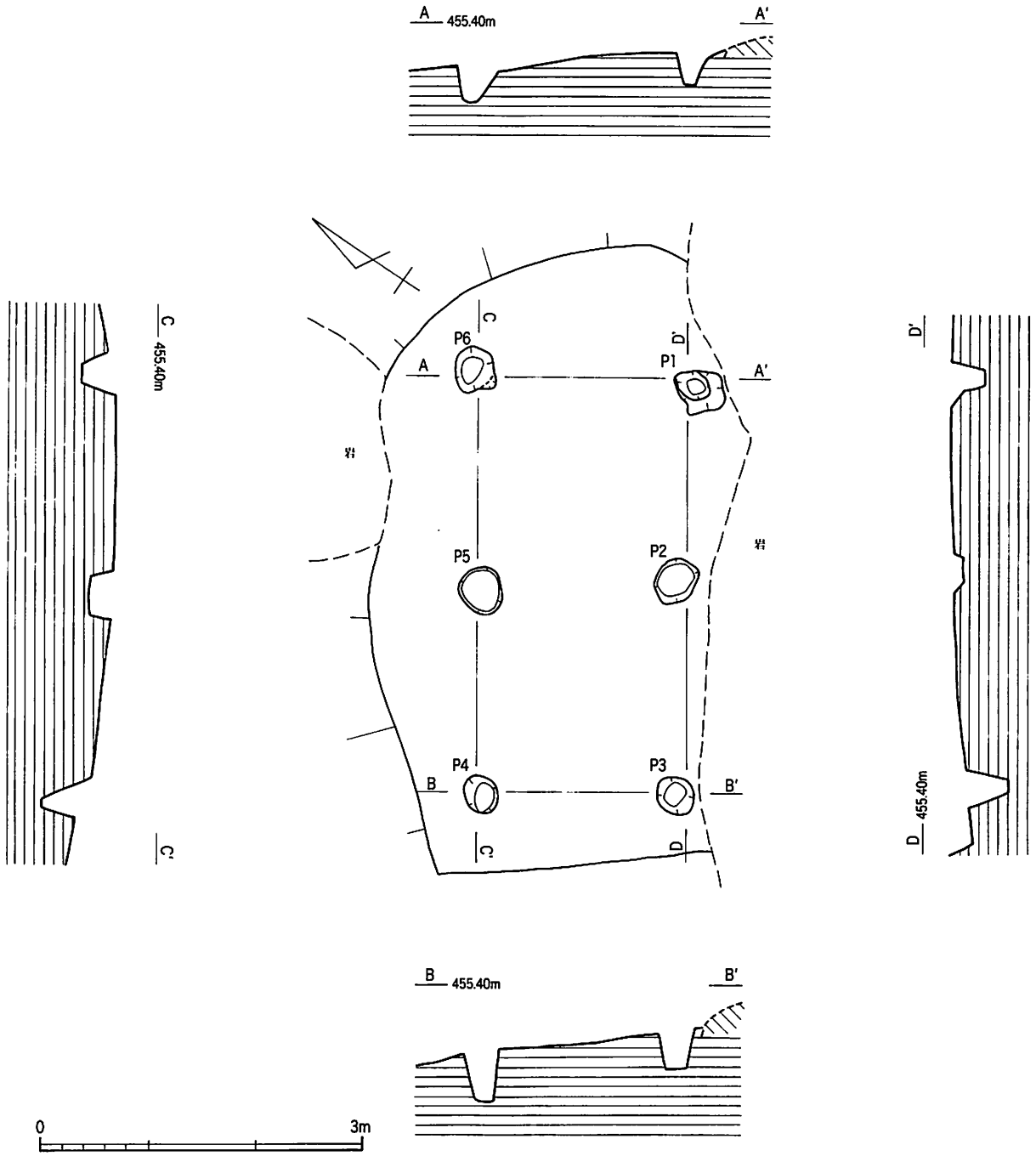
第18図　第３郭群遺構配置図（１：400）

（2）建物跡

①ＳＢ５（第19図，図版23a・b）

平坦面３－３に位置する１間×２間の掘立柱建物跡である。主軸は北東-南西方向で，主軸方位はN59° Eである。桁行方向の規模は3.85m，梁行方向の規模は1.95mである。桁行方向の柱間距離はＰ１－Ｐ２間が1.85m，Ｐ２－Ｐ３間が2m，Ｐ４－Ｐ５間が1.85m，Ｐ５－Ｐ６間が２mである。

柱穴の平面形は円形のものが多い。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径0.52m×短径0.47m，深さ0.39

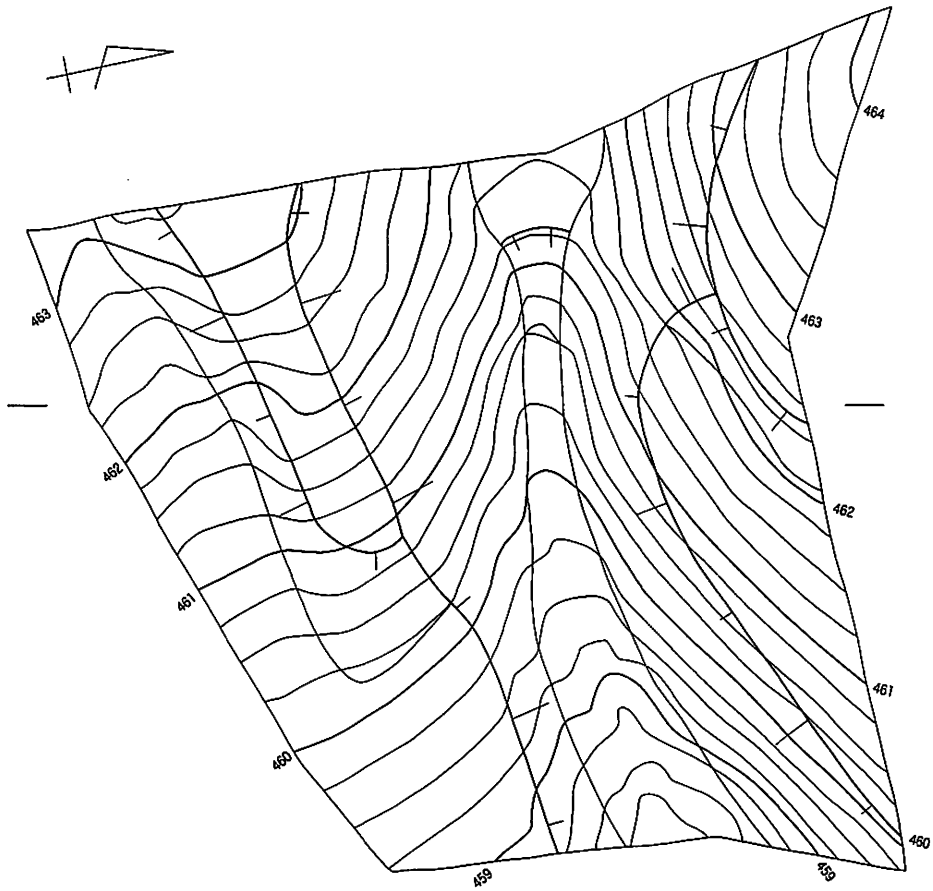


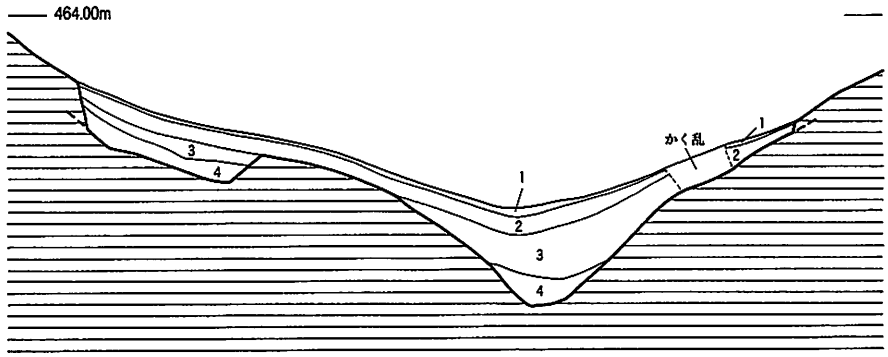
第19図　ＳＢ５実測図（１：60）

m，Ｐ２は長径0.44m×短径0.35m，深さ0.1m，Ｐ３は径0.35m，深さ0.38m，Ｐ４は長径0.38m×短径0.3m，深さ0.51m，Ｐ５は長径0.45m×短径0.39m，深さ0.24m，Ｐ６は長径0.44m×短径0.36m，深さ0.36mである。柱穴の埋土はいずれも単層で，Ｐ１・２・４・５が黄褐色砂質土，Ｐ３が暗灰黄色砂質土，Ｐ６が灰基褐色砂質土である。

４　堀切（第20図，図版24）

堀切は第１郭群と第２郭群の間にある。この部分はもともと鞍部であったものをさらに掘り込んで，広く深い堀切にしたものと思われる。西半分は調査区外となり，東半分を調査した。覆土は明黄褐色土であるが，上層は角礫を含まないが，下層は角礫を少量含む。調査した部分は，長さ10.6m，幅3～6.3m，深さ約1.5mである。底面は0.5～1.9m幅で，平坦に近くなっている。堀切自体の深さはそれほど深くないが，第１郭群との標高差は約８mで，急な切岸となっており，十分な防御機能をもっている。第２郭群との標高差は約5mで，斜面はそれほど急ではない。





1　表土
2　黄褐色土（しまりなし）
3　明黄褐色土（やや砂質，ややしまりあり）
4　明黄褐色土（やや砂質，ややしまりあり，角礫少含）

0　5m

第20図　堀切実測図（1：100）

V　遺物

1　土器類（第21～23図，図版25・26）

土師質土器（皿・鍋），瓦質土器（擂鉢），亀山焼（甕），青磁（碗・皿か）がある（第２表）。

１～９は土師質土器の皿である。法量により次のように大きく４つに分けられる。１は復元口径4.9cm，底径4.0cm，器高0.8cmである（a類）。２は口径9.6cm，底径5.3cm，器高2.3cmである（b類）。３～８は口径12.7～13.9cm，底径6.0～6.7cm，器高2.6～3.2cmである（c類）。９は底径8.4cmで，口径・器高は不明である（d類）。いずれも平底で，体部は直線的である。底部の切り離しはいずれも回転糸切りとみられる。１～９は第１郭群（１－E12区，２－E９区，３～５－D７区，６－E13区，７－E10区，８－F10区，９－E６区）から出土した。

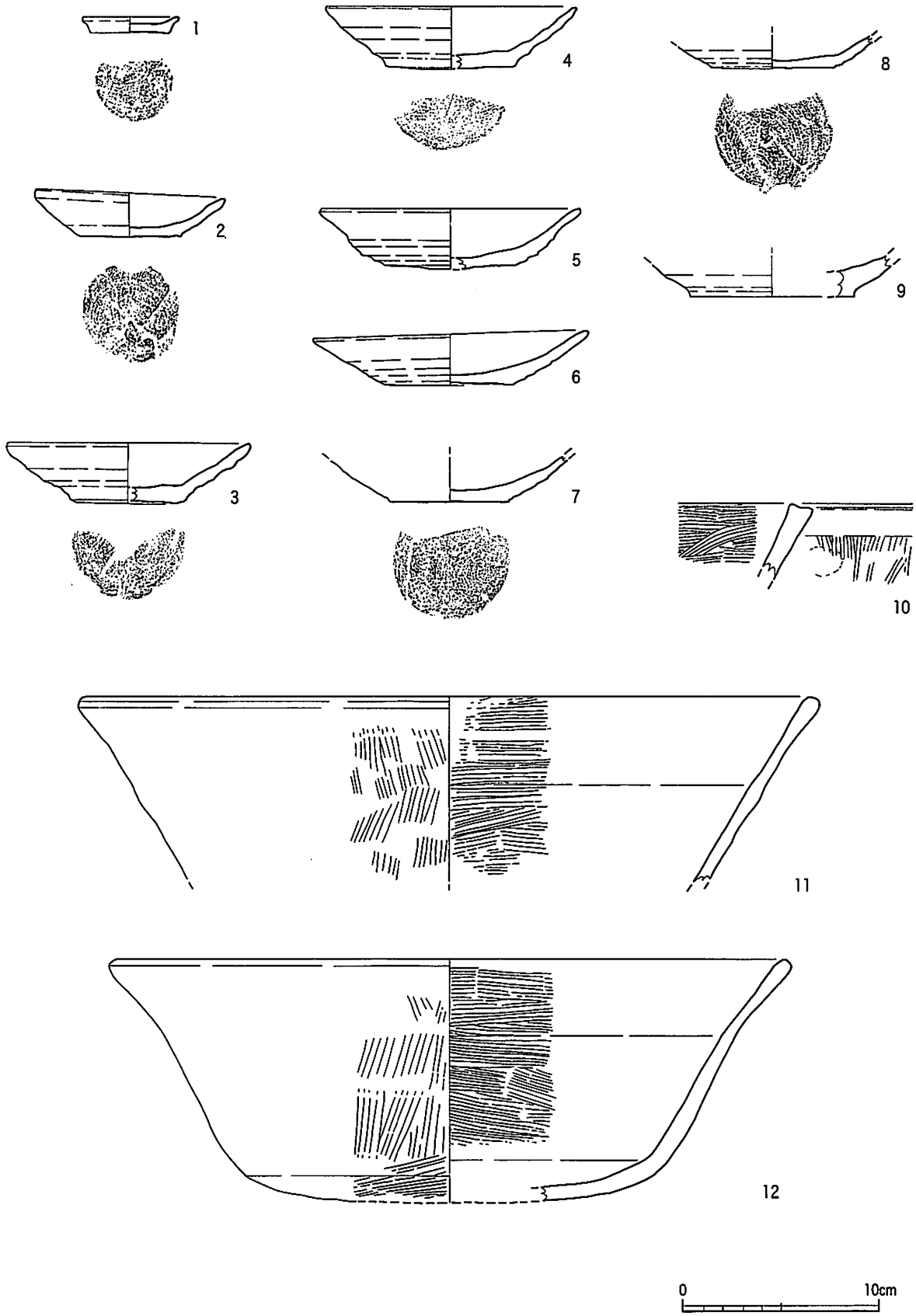
10～12は土師質土器の鍋である。10は口縁部片，11・12は体部～口縁部の破片である。10は口縁端部が外側に拡張し，端部上面が浅い凹みのある平坦面となっている。11・12の口縁端部は拡張せず，丸めに収めている。11・12の体部は斜めに直線的に立ち上がり，口縁部との境で若干外反している。12の底部はやや丸みがあり，11も同形態と考えられる。11・12とも外面全面に煤が付着している。10は第１郭群（D12区），11・12は第３郭群（D２区）から出土した。

13～18は瓦質土器の擂鉢である。13～16は体部～口縁部の破片，17・18は底部片である。13～16はいずれも直線的に斜めに立ち上がる。13～15は口縁端部が外側に拡張し，端部上面が浅い凹みがある平坦面となっている。15は浅い片口が付いている。16の口縁端部は内側に突起状に若干拡張し，端部上面が平坦気味である。内面の擂り目は，13・14が７条単位，15・16が４条単位である。17・18はいずれも丸底で，内面の擂り目は，17が４条単位，18が６条単位とみられる。18は13～17に比べて薄手であり，色調も異質である。13～18は第１郭群（13・15・17－E８区，14・16・18－E11区）から出土した。なお，擂鉢の口縁部の小片が第１郭群E13区でも出土している。

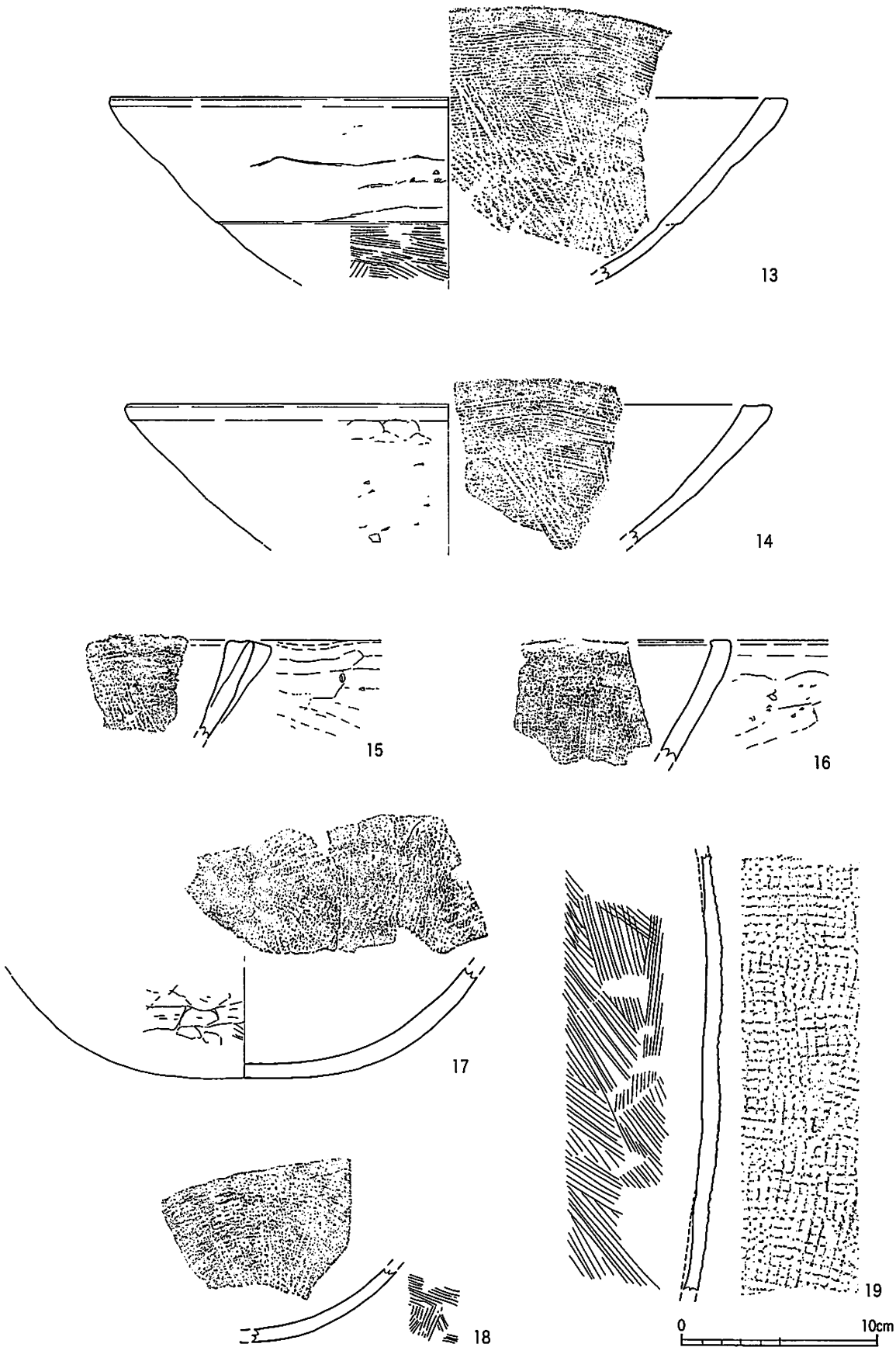
19は亀山焼の甕の胴部片である。外面に格子目タタキを施し，格子目の単位は約５㎜四方である。内面は粗いハケ目調整である。19は第３郭群（D３区）から出土した。

20～23は青磁の碗である。20は完形に復元できたほか，21・22は体部～口縁部の破片である。20・21は体部外面に蓮弁文を施し，22は内外面に文様は施していない。釉は淡緑色で，20は高台部以外にかかり，21・22は全体にかかっている。23は高台部片である。23は内外面に文様は施していない。釉は淡緑色で，高台部の中央部以外の全体にかかっている。20～23は第１郭群（20－D13区，21－E13区，22・23－F７区）から出土した。なお，20と同一個体とみられる小片が第１郭群D12区・E13区，第３郭群F２区？から出土している。また，21と同一個体とみられる小片が第１郭群D12区・E10区・F13区から出土している。

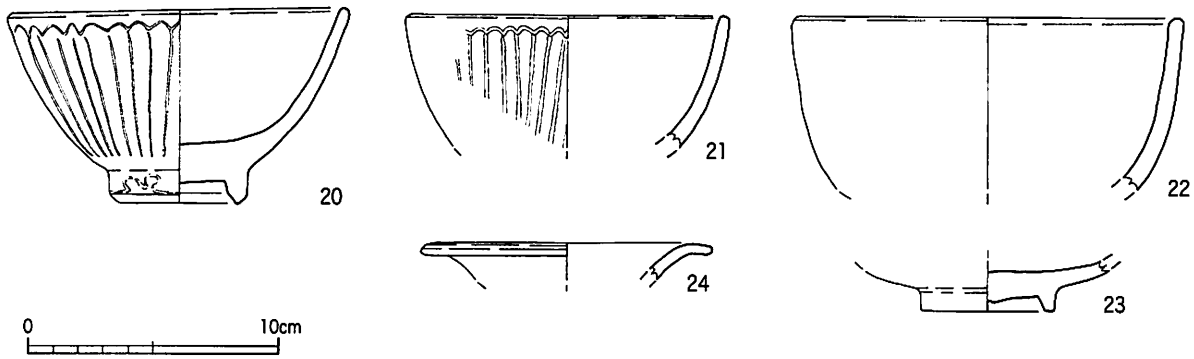
24は青磁の皿の口縁部片とみられる。内外面に文様は施していない。釉は淡緑色で，全体にかかっている。24は第１郭群（F７区）から出土した。



第21図　出土遺物実測図（1）（1：3）



第22図　出土遺物実測図（2）（1：3）



第23図　出土遺物実測図（3）（1：3）

2　鉄製品（第24・25図，図版27）

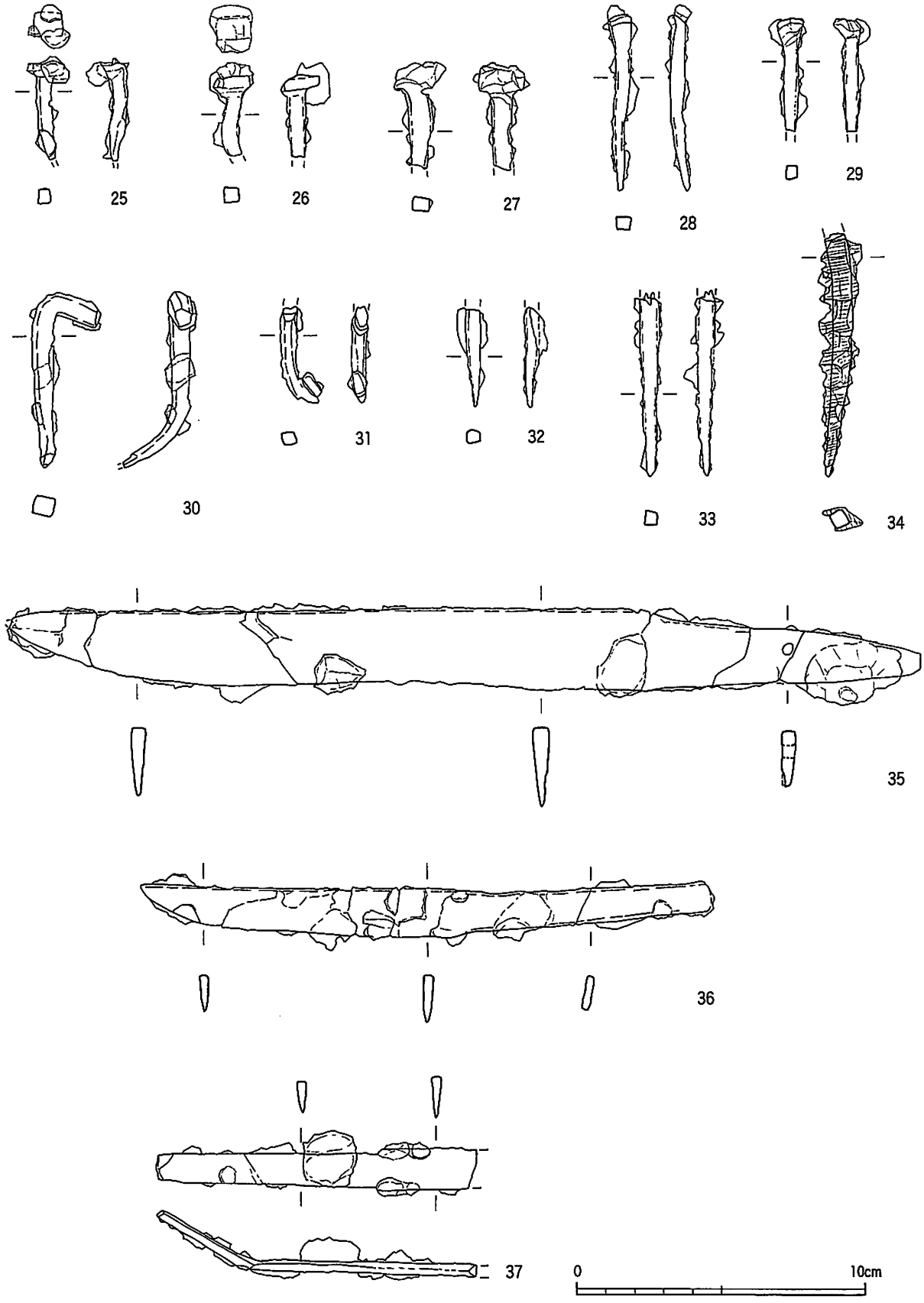
鉄釘・短刀・刀子・不明鉄製品がある（第3表）。

25～34は鉄釘である。28は完形であるが，25～27・29・30は先端を欠損し，31～34は頭部を欠損しており，全体の形状が不明のものが多い。現状の長さは25～33は2.8～6.3cm，34は8.3cmで，34が他に比べて長い。断面はいずれも長方形または方形で，厚さ0.4～0.7cmのものが多い。25・26は頭部を「L」字状に折り曲げ，正面から見ると「T」字状，上から見ると方形状を呈している。27は錆が著しいため不明確であるが，25・26と同形になると思われる。28・29は頭部を斜めに折り曲げ，正面から見ると撥形を呈している。30は頭部を成形しておらず，頭部の下約1.5cm付近で大きく折り曲げている。なお，34は全面に木質が良好に残存している。25～33は第1郭群（25-E6・7区，26・27・33-E10区，30-E13区，28・29・31・32-F13区），34は第3郭群（D3区）から出土した。

35は短刀である。ほぼ完形で，刀身部の先端がわずかに欠損している。刀身部と茎部の境が不明確だが，刀身部の長さは22.4cm，茎部の長さは9.3cmと推定される。茎部の中央に直径約4mmの目釘孔が1か所確認された。第1郭群（E8区）から出土した。

36・37は刀子である。36は完形である。刀身部と茎部の境にわずかに段が見られるが不明確である。刀身部の長さは11.1cm，茎部の長さは8.9cmと推定される。茎部の目釘孔は確認されていない。37は刀身部の先端部を欠損し，茎部の中央部が大きく折れ曲がっている。刀身部と茎部の境にわずかに段が見られるが不明確である。刀身部の長さは3.4cm以上，茎部の長さは7.7cmと推定される。茎部の目釘孔は確認されていない。36・37は第1郭群（36-E13区，37-F7区）から出土した。

38～41は不明鉄製品である。38は断面の厚さが薄い板状で細長い棒状のものである。一方の先端部は丸く終わっており，他方の先端部は欠損しているため形状は不明である。2か所で大きく緩やかに曲がっている。保存状況は不良で，表面の剥落が著しい。39は断面の厚さが薄い板状の鉄片で，断面がやや湾曲している。40は全体を環状に湾曲するもので，断面は円形状である。断面の直径は1cm前後で，太さは一定している。両端を欠損しているため，全体の形は不明であ

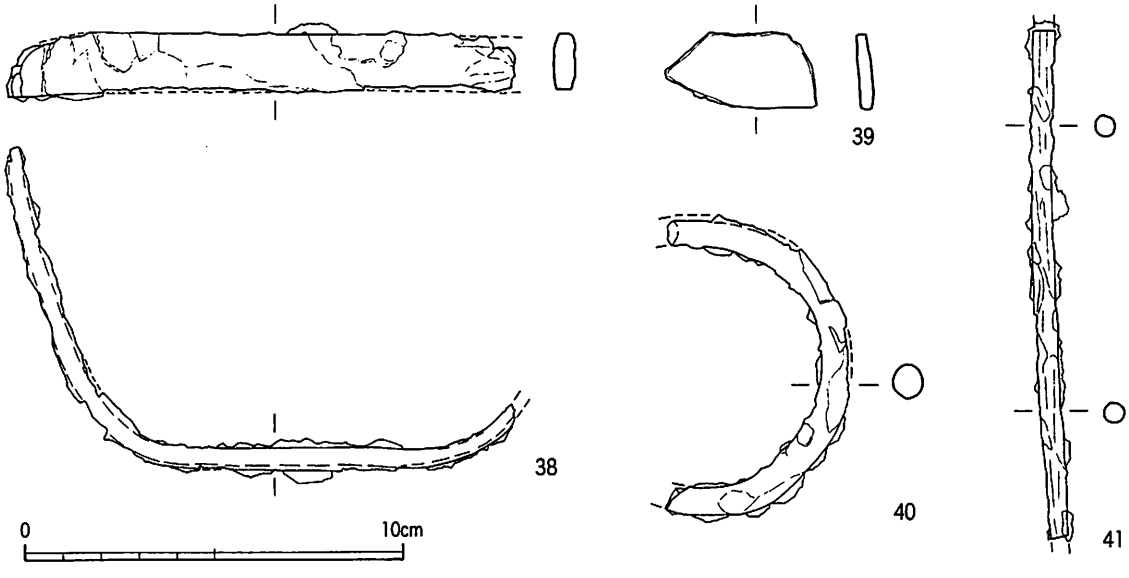


第24図　出土遺物実測図（4）（1：2）

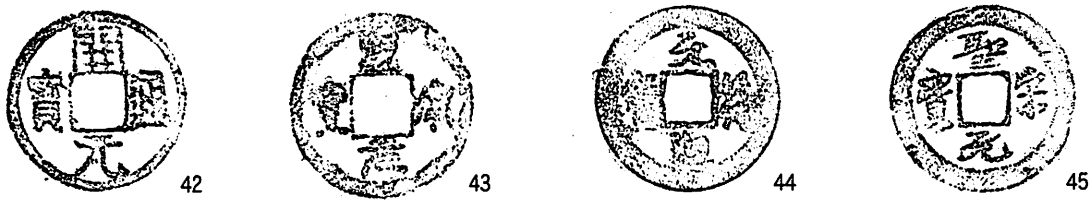
るが，鉄蓋に付く吊手の鉄輪の可能性がある[1]。41は断面が円形で細長い棒状のものである。断面の直径は0.6cm前後で，太さは一定している。直線状であるが，若干ゆるやかに曲がっている。両端を欠損しているため，全体の形は不明である。38～41は第１郭群(38・41－E13区，39－F10区，40－E８区）から出土した。

3　古銭（第26図，図版27）

古銭は４枚出土した（第４表）[2]。42は開元通寶（初鋳621年）である。43は銭文が不鮮明であるが，熙寧元寶（初鋳1068年）と思われる。書体は篆書である。44は元符通寶（初鋳1098年）で，書体は行書である。45は聖宋元寶（初鋳1101年）で，書体は行書である。42～45は第１郭群（E６区）の平坦面１－４から出土した。



第25図　出土遺物実測図（５）（１：２）



第26図　出土古銭拓影（原寸）

註

(1) 三次市三良坂町萩原城跡で鉄蓋が出土している。その吊手の鉄輪の直径は約6㎝で，本例より小さい。

(財)広島県埋蔵文化財調査センター「萩原城跡」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（V）2003年

(2) 古銭の分類については，次の文献を参考にした。

兵庫県埋蔵銭調査会『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』 1994年

第2表　土器類観察表

＊計測値の（　）は復元値

遺物番号	出土地点	種別 器種	計測値 (㎝)	調整	色調	胎土	備考
1	第1郭群 E12区③検出面	土師質土器 皿	口径：(4.9) 底径：4.0 器高：0.8	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切り 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄灰色	砂粒を含む	
2	第1郭群 E9区⑲表土中	土師質土器 皿	口径：9.6 底径：5.3 器高：2.3	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切り 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	
3	第1郭群平坦面1-4 D7区検出面	土師質土器 皿	口径：(13.2) 底径：(5.9) 器高：3.1	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切り 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄灰色 (一部淡黄褐色) 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	
4	第1郭群平坦面1-4 D7区検出面	土師質土器 皿	口径：(12.7) 底径：(6.5) 器高：3.2	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切り 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄灰色 (一部淡褐色)	砂粒を含む	
5	第1郭群平坦面1-4 D7区検出面	土師質土器 皿	口径：(13.2) 底径：(6.7) 器高：3.1	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切り 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	
6	第1郭群平坦面1-5 E13区③P14表土	土師質土器 皿	口径：13.9 底径：6.6 器高：2.6	外面：体部：回転ナデ，底部-ナデ（回転糸切痕かすかに残る） 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄灰色	砂粒を含む	
7	第1郭群 E10区③表土	土師質土器 皿・底部	底径：6.0 現存器高：2.3	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切り 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	
8	第1郭群 F10区①表土	土師質土器 皿・底部	底径：6.2㎝ 現存器高：1.7	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切り 内面：回転ナデ，中央部-ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	
9	第1郭群平坦面1-4 E6区検出面	土師質土器 皿・底部	底径：(8.4) 現存器高：2.1	外面：体部-回転ナデ，底部-回転糸切りか？ 内面：回転ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	
10	第1郭群 D12区検出面	土師質土器 鍋・口縁部	現存器高：3.7	外面：体部-縦方向のハケ目，口縁部-ヨコナデ 内面：横方向のハケ目	外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色	砂粒を含む	
11	第3郭群 D2区⑭検出面・D2区⑮検出面上層ほか	土師質土器 鍋・口縁部	口径：(38.8) 現存器高：9.3	外面：体部-縦方向のハケ目，口縁部-ヨコナデ 内面：体部-横方向のハケ目，口縁部-ヨコナデ	外面：暗茶褐色 内面：暗茶褐色	砂粒を含む	外面全面に煤付着
12	第3郭群 D2区-14検出面ほか	土師質土器 鍋	口径：(34.2) 底径：(20.8) 現存器高：12.3	外面：体部-縦方向のハケ目，口縁部-ヨコナデ 内面：体部-横方向のハケ目，口縁部-ヨコナデ	外面：暗茶褐色 内面：暗茶褐色	砂粒を含む	外面の全面及び内面の一部に煤付着
13	第1郭群平坦面1-2 E8区⑱検出面P9	瓦質土器 擂鉢・口縁部	口径：(34.6) 現存器高：9.3	外面：体部-上部は粗いナデ，下部は横方向のハケ目，口縁部-ヨコナデ 内面：体部-横方向のハケ目，口縁部-ヨコナデ	外面：暗灰色 内面：暗灰色	砂粒を含む	内面に擂り目あり，7条単位
14	第1郭群 E11区⑩表土	瓦質土器 擂鉢・口縁部	口径：(33.0) 現存器高：7.1	外面：体部-粗いナデ，口縁部-ヨコナデ 内面：体部-ナデ，口縁部-ヨコナデ	外面：暗灰色 内面：暗灰色	砂粒を含む	内面に擂り目あり，7条単位
15	第1郭群平坦面1-2 E8区⑱検出面	瓦質土器 擂鉢・口縁部	現存器高：5.0	外面：体部-粗いナデ，口縁部-ヨコナデ 内面：体部-ナデ，口縁部-ヨコナデ	外面：淡灰色 内面：淡灰色	砂粒を含む	内面に擂り目あり，4条単位
16	第1郭群 E11区検出面上層	瓦質土器 擂鉢・口縁部	現存器高：6.2	外面：体部-粗いナデ，口縁部-ヨコナデ 内面：体部-ナデ，口縁部-ヨコナデ	外面：淡灰色 内面：淡灰色	砂粒を含む	内面に擂り目あり，4条単位か？
17	第1郭群平坦面1-2 E8区（23）検出面	瓦質土器 擂鉢・底部	底径：(8.6) 現存器高：5.7	外面：体部-粗いナデ，底部-ナデ 内面：ナデ	外面：淡灰色 内面：淡灰色	砂粒を含む	内面に擂り目あり，4条単位か？
18	第1郭群 E11区⑧表土	瓦質土器 擂鉢・底部	現存器高：3.8	外面：体部-粗いナデ，底部-ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄灰色	砂粒を含む	内面に擂り目あり，6条単位か？
19	第3郭群 D3区⑤検出面ほか	亀山焼 壺・体部	現存器高：23.1	外面：格子目叩き 内面：縦方向・斜め方向の粗いハケ目	外面：暗茶灰色 内面：暗茶褐色	細砂を含む	
20	第1郭群平坦面1-5 D13区⑲表土ほか	青磁 碗	口径：13.4 高台径：4.8 器高：7.8	外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰色	精緻	高台部以外の全体に釉がかかる 外面体部に蓮弁文。
21	第1郭群 E13区（23）表土ほか	青磁 碗・口縁部	口径：(12.3) 現存器高：5.2	外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰色	精緻	全体に釉がかかる 外面体部に蓮弁文。
22	第1郭群 F7区表土	青磁 碗・口縁部	口径：(15.0) 現存器高：6.8	外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰色	精緻	全体に釉がかかる
23	第1郭群平坦面1-3 F7区検出面	青磁 碗・高台部	高台径：5.4 現存器高：2.0	外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰色	精緻	高台部中央以外の全体に釉がかかる
24	第1郭群平坦面1-4 F7区表土	青磁 皿か？・口縁部	口径：(11.6) 現存器高：1.5	外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：暗緑色 素地：淡灰色	精緻	全体に釉がかかる

第３表　鉄製品計測表

＊（　）内の数値は現状値

遺物番号	出土地点	種　別	長　さ (cm)	最大幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　量 (g)	備　考
25	第１郭群 Ｅ６・７区北トレンチ盛土	鉄釘	(3.6)	1.0 ×0.9	0.5 ×0.4	(2.45)	先端部欠損
26	第１郭群 Ｅ10区⑨検出面Ｐ12	鉄釘	(2.8)	1.3 ×1.3	0.5 ×0.5	(3.41)	先端部欠損
27	第１郭群 Ｅ10区⑨検出面Ｐ12	鉄釘	(3.3)	1.5 ×1.8	0.6 ×0.5	(6.34)	先端部欠損
28	第１郭群 Ｆ13区⑪検出面	鉄釘	6.1	0.8 ×0.5	0.5 ×0.4	3.97	ほぼ完形
29	第１郭群 Ｆ13区⑪検出面	鉄釘	(3.9)	0.8 ×1.0	0.5 ×0.4	(2.85)	先端部欠損
30	第1郭群 Ｅ13区⑮検出面Ｐ13	鉄釘	(6.0)	(2.4) ×(2.5)	0.7 ×0.6	(11.08)	先端部欠損 上部と下部の２か所が曲がる
31	第１郭群 Ｆ13区②表土Ｐ15	鉄釘	(3.3)	1.3 ×0.5	0.5 ×0.4	(1.92)	頭部欠損 下部が少し曲がる
32	第１郭群 F13区⑪検出面	鉄釘	(3.4)	0.5 ×0.5	0.5 ×0.5	(1.18)	頭部欠損
33	第１郭群 Ｅ10区⑨検出面Ｐ12	鉄釘	(6.3)	0.7 ×0.7	0.7 ×0.7	(4.04)	頭部欠損
34	第３郭群平坦面３－３ Ｄ３区ＳＢ５Ｐ４埋土	鉄釘	(8.3)	1.4 ×0.8	0.6 ×0.6	(7.69)	頭部欠損全面に木質残存
35	第１郭群平坦面１－２ Ｅ８区⑱検出面Ｐ７・Ｐ10	短刀	(31.7)	2.8	0.6	(100.51)	ほぼ完形茎部に目釘穴１か所あり
36	第１郭群 Ｅ13区⑮	刀子	20.0	1.2	0.4	31.78	完形
37	第１郭群 Ｆ７区検出面Ｐ２	刀子	(11.1)	1.5	0.4	(15.15)	先端部欠損 茎部中央部が折れ曲がる
38	第１郭群 Ｅ13区⑭表土	不明鉄製品	(13.6)	8.5	1.7 ×0.5	(51.85)	細長い棒状,断面は薄い長方形状,片側欠損，２か所で大きく曲がる
39	第１郭群 Ｆ10区①表土	不明鉄製品	(4.0)	2.0	0.3	(9.72)	薄い板状
40	第１郭群平坦面１－２ Ｅ８区⑱検出面Ｐ８	不明鉄製品	(8.1)	4.9	1.0	(23.84)	全体を環状に湾曲，断面は円形状
41	第１郭群 Ｅ13区⑮	不明鉄製品	(13.4)	0.6	0.6	(15.90)	棒状，断面は円形状，全体は直線状だが，中央部が若干曲がる

第４表　古銭計測表

遺物番号	出土地点	銭　種	直　径 (cm)	重　量 (g)	備　考
42	第１郭群平坦面１－４ Ｅ６区検出面Ｐ４	開元通寶	2.4	3.69	初鋳621年。
43	第１郭群平坦面１－４ Ｅ６区検出面Ｐ１	熙寧元寶	2.4	2.04	初鋳1068年。篆書
44	第１郭群平坦面１－４ Ｅ６区検出面Ｐ５	元符通寶	2.4	3.09	初鋳1098年。行書
45	第１郭群平坦面１－４ Ｅ６区検出面Ｐ３	聖宋元寶	2.4	3.02	初鋳1101年。行書

Ⅵ　まとめ

1　遺構について

本城跡は大きく３つの郭群（第１～３郭群）に分かれる。第１郭群と第３郭群は同一尾根上で連続しており，第１郭群と第２郭群の間は堀切によって分断されている。このことから，ここでは，第１・３郭群と第２郭群に分けてみていきたい。

（1）第1・３郭群の遺構について

第１郭群では平坦面26か所・建物跡４棟・土塁２か所・石列４か所・炉跡１基，第３郭群では平坦面８か所・建物跡１棟を検出した。

平坦面は第１・３郭群合わせて34か所あり，面積は２～74㎡で，平均は約19㎡である（第５表）。第１郭群では，平坦面の面積は２～74㎡で，26か所の平均は約22㎡である。第27図ａのとおり，20㎡以下が３分の２程度（18か所）で，狭い平坦面が多い。一方，第３郭群では，平坦面の面積は５～19㎡で，８か所の平均は約10㎡であり，第１郭群での平均の半分以下である。第27図ｂのとおり，20㎡以上の平坦面がなく，狭い平坦面だけである。第1・３郭群のなかでは，平坦面１－７が約74㎡で最も広く，中心的な場所であったと思われる。建物を伴う平坦面は５か所あり，そのうち石列や土塁を伴う３か所（平坦面１－２・１－５・１－７）は約51～74㎡で規模が大きく，建物のみの２か所（平坦面１－

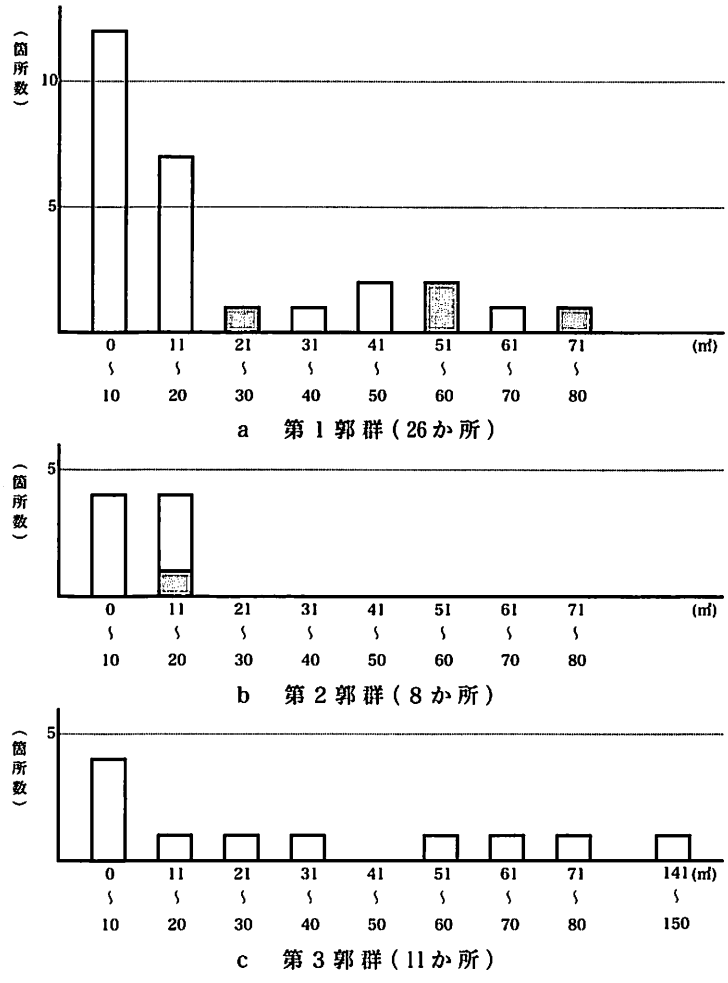
第５表　平坦面一覧表

＊長さ・幅は現状の最大値

	平坦面番号	規模 長さ*（m）	規模 幅*（m）	規模 面積（㎡）	備考
第１郭群	１－１	17.8	5.8	48	
	１－２	11.6	7.4	51	ＳＢ２・石列１・２を伴う。
	１－３	4.6	4.0	16	
	１－４	12.1	6.8	47	
	１－５	9.0	10.3	59	ＳＢ３・土塁１・２を伴う。
	１－６	5.8	2.2	11	
	１－７	13.1	7.2	74	ＳＢ１・石列３・４を伴う。
	１－８	7.0	1.3	7	
	１－９	9.4	3.0	15	
	１－10	6.0	3.5	13	
	１－11	9.0	1.5	8	
	１－12	5.5	3.0	6	
	１－13	1.9	0.8	2	
	１－14	10.1	1.1	8	
	１－15	24.9	4.2	64	
	１－16	4.4	1.2	4	
	１－17	6.7	1.2	5	
	１－18	7.9	1.4	8	
	１－19	4.7	4.2	19	
	１－20	10.1	3.5	25	ＳＢ４を伴う。 南側斜面にＳＲ１がある。
	１－21	8.3	0.9	5	
	１－22	8.5	8.5	36	
	１－23	3.4	1.0	3	
	１－24	3.5	2.3	7	
	１－25	7.8	2.8	13	
	１－26	2.0	0.7	3	
	第１郭群（26か所）の合計			557	（第１郭群の平均約22㎡）
第３郭群	３－１	3.7	1.2	4	
	３－２	3.9	3.5	12	
	３－３	6.1	3.3	19	ＳＢ５を伴う。
	３－４	5.3	1.7	8	
	３－５	3.7	2.4	8	
	３－６	8.9	1.6	11	
	３－７	7.4	3.0	14	
	３－８	6.0	0.8	5	
	第３郭群（８か所）の合計			81	（第３郭群の平均約10㎡）
第１・３郭群（34か所）の合計				638	（第１・３郭群の平均約19㎡）
第２郭群	２－１	22.4	6.7	75	
	２－２	18.2	12.6	142	
	２－３	9.0	0.8	5	
	２－４	10.5	8.7	58	土塁３を伴う。
	２－５	9.9	9.6	63	
	２－６	3.5	1.9	5	
	２－７	4.0	1.7	6	
	２－８	12.7	3.6	37	
	２－９	4.7	2.4	9	
	２－10	7.8	4.6	27	
	２－11	5.6	3.8	18	東端は調査区外に延びる。
	第２郭群（11か所）の合計			427	（第２郭群の平均約39㎡）

20・3−3）は19～25㎡で規模が小さい。

掘立柱建物跡は第1・3郭群で合わせて5棟（SB1～5）検出している（第6表）。主軸方向は一定せず，尾根の方向に左右されているようである。規模はSB1・3が2間×2間（面積16.3～16.8㎡），SB2・4・5が2間×1間（面積7.5～11.7㎡）である。各建物の柱間寸法の平均は，梁行が1.84～2.1m，SB2の桁行が2.79m，SB2以外の桁行が1.83～2.14mであり，SB2の桁行以外の建物の柱間寸法の平均は総じて2m前後である。SB2は台形を呈しており，粗雑な造作が窺える。なお，SB4については，直近で検出された炉跡（SR1）との関連が考えられる。



第27図 平坦面面積別箇所数（アミ目は建物を伴う平坦面）

土塁は，平坦面1−5の北西側で土塁1を，南東側で土塁2を検出した。土塁1は平坦面1−22から西南西方向に，土塁2も平坦面1−22から南西方向に延びており，いずれも平坦面1−5と平坦面1−22をつなぐ通路的な役割も果たしたと思われる。

石列は，平坦面1−2の北側と西側でそれぞれ1か所（石列1・2），平坦面1−7の東側で2か所(石列3・4)，合わせて4か所検出された。いずれも建物が所在する平坦面に伴うことから，建物とセットで設けられたようである。いずれの石列も基本的に1段であり，部分的に数段積み重ねている。機能は不明確だが，平坦面の土留めのために築かれたと思われる。

第6表 掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	規模 桁行×梁行	規模 面積（㎡）	主軸方位	備考
SB1	4.3m× 3.8m（2間×2間）	16.3	N5°W（南北）	第1郭群平坦面1−7（石列3・4を伴う）
SB2	4.8～6.35m× 2.1m（2間×1間）	11.7	N52°E（北東−南西）	台形（南東辺が長く，北西辺が短い）第1郭群平坦面1−2（石列1・2を伴う）
SB3	4.0m× 4.2m（2間×2間）	16.8	N40°E（北東−南西）	第1郭群平坦面1−5（土塁1・2を伴う）
SB4	3.7m× 2.1m（2間×1間）	7.8	N24°W（北北東−南南西）	第1郭群平坦面1−20
SB5	3.85m×1.95m（2間×1間）	7.5	N59°E（北東−南西）	第3郭群平坦面3−3

炉跡（ＳＲ１）はＳＢ４が所在する平坦面１-20の南側斜面で検出された。一辺0.95mの方形状の掘方で，その底部の中央をさらに0.74m×0.59mの長円形状に掘り込んでいる。内部に焼土や炭化物が充満していた。機能は不明確だが，狼煙に伴う施設の可能性がある。狼煙に伴う施設と考えられている例は，広島市佐伯区今市城跡[1]・広島市安芸区三ツ城跡[2]・東広島市福富町福原城跡[3]などがある。なお，ＳＲ１の直近にあるＳＢ４も狼煙に関係する施設の可能性がある。

（２）第２郭群の遺構について

第２郭群では，平坦面11か所・土塁１か所を検出したが，建物跡は確認できなかった。
平坦面の面積は５～142㎡，11か所の平均は約39㎡である（第５表，第27図ｃ）。第２郭群での面積の平均は第１・３郭群の２倍近くあり，これは尾根の広さが影響していると思われる。第２郭群のなかで平坦面２-２が約124㎡で最も広く，中心的な場所であったと考えられる。

土塁は平坦面２-４の北側で１か所（土塁３）検出された。平坦面２-５に向けて東方向に延びており，平坦面２-５と平坦面２-４をつなぐ通路的な役割も果たしたと思われる。

第２郭群は，比較的広い平坦面を有しているが，建物跡は確認されず，遺物も出土しないことから，日常生活を営む場ではなく，平坦面１-７を中心とする第１・３郭群に付属する施設と考えられる。

（３）堀切について

第１郭群と第２郭群の間で堀切を確認した。規模は長さ10.6m以上，幅３～6.3m，深さ約1.5mで，第１郭群との標高差が約８m・第２郭群との標高差が約５mである。花本哲志氏の分類[4]によると，堀切の構築状況は，「１　曲輪の背後を切るもの」に該当し，県内で多くみられる。また，堀底の形態は，「箱形のもの（箱堀）」に該当し，この形態も県内で多いようである。堀切の規模は，「長さについては，10mから15m前後のものが多い」，「上面幅については，３mから５m未満のものが多い」，「深さは２mに満たないものが多い」とされ，本城跡例も概ねこれらの規模に近い。なお，深さに関連して「曲輪との比高差を利用することで効果をあげているものもある」例として，広島市恵下城跡（１郭との比高差12m）などを挙げており，本城跡例も類似している。

２　遺物について

（１）遺物出土状況について

遺物は，土器類・鉄製品・古銭が第１・３郭群から出土した（第７表）。

第１郭群での遺物の出土状況は，次のとおりである。土師質土器の皿は全体で少量ずつ出土し，このなかでＦ10・Ｅ12・Ｄ13区では比較的多い。土師質土器の皿以外の土器類は全体的に少なく，土師質土器の鍋はＤ12・Ｅ12区で，瓦質土器の擂鉢はＥ８・Ｅ11・Ｅ13区で出土した。青磁の碗はＦ７・Ｅ10・Ｄ12・Ｄ13・Ｅ13・Ｆ13区で出土し，Ｄ13・Ｅ13区でやや目立つ。鉄製品も少な

く，鉄釘はＥ10・Ｆ13区で，短刀と環状の不明鉄製品はＥ８区で出土した。古銭はＥ６区で４枚出土した。第１郭群では主に建物跡周辺で遺物が出土している。

第３郭群では，土師質土器（皿・鍋）・亀山焼（甕）・青磁（碗）・鉄釘が出土した。土師質土器の鍋がＤ２区で，亀山焼の甕がＤ３区でまとまって出土している。

建物跡と遺物出土状況との関係は次のとおりである。２間×２間で比較的規模が大きいＳＢ１・３のうち，ＳＢ１付近のＥ９・Ｆ９区では，土師質土器の皿の破片が30片足らずで，建物の大きさの割に遺物は少ない。このことから，ＳＢ１は土器類をあまり使用しないか，日常的に片づけられている場所と考えられる。一方，ＳＢ３付近のＤ13・Ｅ13区では土師質土器の皿・瓦質土器の擂鉢・青磁の碗・刀子・不明鉄製品が出土した。このうち，青磁の碗の破片が他のグリッドに比べて多く，土師質土器の皿の破片も比較的多い。このように日用道具のほか，青磁などの奢侈品があることから，ＳＢ３周辺は本城跡の統括者クラスの居住空間であった可能性がある。

２間×１間で規模が小さいＳＢ２・４・５のうち，ＳＢ２付近のＥ８区では土師質土器の皿・瓦質土器の擂鉢・短刀・不明鉄製品が出土した。このうち，瓦質土器の擂鉢が他のグリッドに比べて多いこと，短刀には包丁の機能も考えられること，環状の不明鉄製品は鉄鍋の吊手の可能性があることなどから，ＳＢ２は調理関係の場であった可能性がある。また，ＳＢ５付近のＤ２・Ｄ３区で土師質土器の鍋・亀山焼の甕が多いことから，ＳＢ５も調理関係の場であった可能性がある。また，亀山焼の甕の出土がＤ３区だけであり，ＳＢ５で貯水していたものと思われる。ＳＢ５は尾根の北端に位置し，尾根の北端周辺の麓からＳＢ５に水を運び上げたと考えられ，尾根北端付近に本城跡への進入路が存在していた可能性がある。ＳＢ４付近のＦ11・Ｆ12区では土師質土器の皿の破片が若干出土したのみである。

第７表　グリッド別出土遺物数量表

＊土器類は破片数

遺物名＼グリッド名		第３郭群				(小計)	第１郭群																	(小計)	(合計)
		D2	F2	D3	E3		E6	D7	F7	E8	E9	F9	E10	F10	E11	F11	D12	E12	F12	D13	E13	F13	不明		
土器類	土師質土器（皿）	1	1	1	1	4	9	10		6	19	9	12	59	29	6	8	34	5	41	4			251	255
	土師質土器（鍋）	29				29											1	3						4	33
	瓦質土器（擂鉢）					0				14					5						1			20	20
	亀山焼（甕）			25		25																		0	25
	青磁（碗）		1			1			2				1				3			8	3	2		19	20
	青磁（皿？）					0			1															1	1
	(小計)	30	2	26	1	59	9	10	3	20	19	9	13	59	34	6	12	37	5	49	8	2	0	295	354
鉄製品	釘			1		1							3									5	1	9	10
	短刀					0				1														1	1
	刀子					0			1												1			2	2
	不明鉄製品					0				1				1							2			4	4
	(小計)	0	0	1	0	1	0	0	1	2	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	3	5	1	16	17
古銭						0	4																	4	4

なお，建物跡が確認されていない部分での遺物出土状況について，ＳＢ１・３の間のＥ11区で土師質土器の皿・瓦質土器の擂鉢が出土し，D12・Ｅ12区で土師質土器の皿・鍋が出土しており，これらの周辺においても調理関係の施設が想定される。また，土師質土器の皿が多い本城跡の最高所付近であるＦ10区周辺や，古銭４枚が出土した第１郭群の北端に位置するＥ６区周辺においては，儀礼的な行為が行われた可能性がある。

（２）出土遺物の時期について

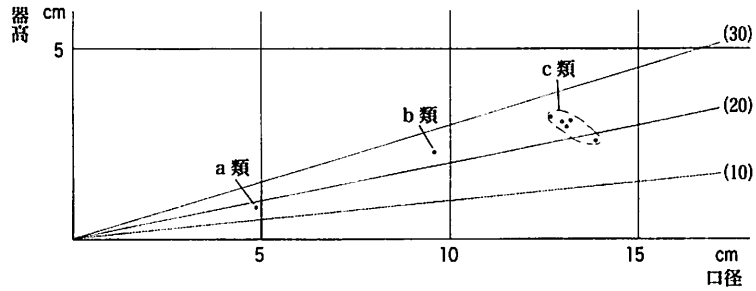
青磁の碗（20・21）は体部外面に蓮弁文を施すもので，上田秀夫氏の分類[5]の青磁碗Ｂ-Ⅳ類に相当し，15世紀後半から16世紀頃と考えられており，また，小野正敏氏の分類[6]の青磁蓮弁碗Ｃ群に相当し，15世紀後半から16世紀前半と考えられている。青磁の碗（22）は文様を施しておらず，上田氏の分類の青磁碗Ｅ類に相当するが，時期は明確ではない。

瓦質土器の擂鉢は口縁端部が外側に拡張するもの（13～15）と内側に若干拡張するもの（16）がある。前者の類例は東広島市河内町薬師城跡ＳＥ２出土例[7]があり，後者の類例は三次市粟屋町加井妻城跡出土例[8]・東広島市福富町福原城跡出土例[9]がある。

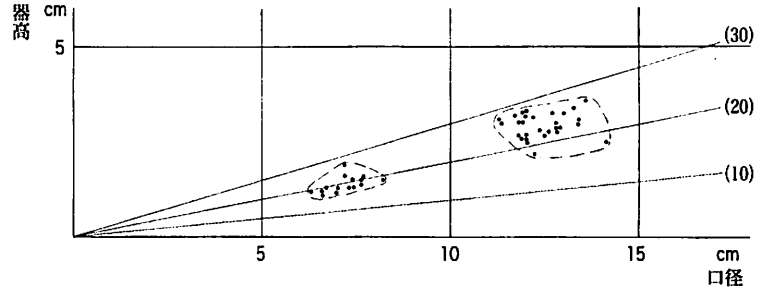
亀山焼の甕（19）は体部外面に格子目タタキ，体部内面に縦方向のハケ目を施すもので，福山市草戸千軒町遺跡のⅡ期後半[10]以降にみられる調整のようである[11]。

土師質土器の鍋は口縁端部が横に拡張するもの（10）と拡張しないもの（11・12）がある。前者の類例は東広島市河内町薬師城跡ＳＥ２出土例[12]があり，後者の類例は福山市草戸千軒町遺跡のⅣ期前半の土師質土器鍋Ｂ[13]がある。

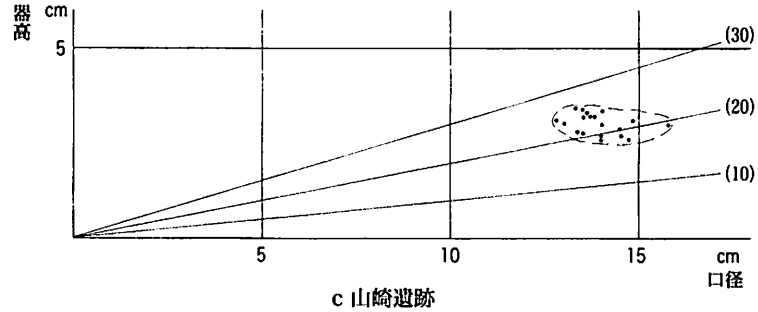
土師質土器の皿は前述のとおり法量により４つに分けられる（第28図ａ）。ａ類（１）は復元



ａ 頼藤城跡（●）・萩原城跡（○）



ｂ 加井妻城跡



ｃ 山崎遺跡

第28図　土師質土器皿法量分布図（グラフ中の（　）の数値は器高指数）

口径4.9cm，器高0.8cm，器高指数（口径に対する器高の比率を百分率で示したもの）16.3である。b類（2）は口径9.6cm，器高2.3cm，器高指数24.0で，草戸千軒町遺跡出土土師質土器の分類[14]（以下，「草戸分類」という。）のⅢＡⅠに相当する。c類（3～8）は口径12.7～13.9cm，器高2.6～3.2cm，器高指数18.7～25.2（平均22.7）で，草戸分類のⅢＡⅡに相当する。d類（9）は口径・器高は不明だが，底径8.4cmと他より大きめであり，草戸分類のⅢＡⅢまたはⅢＡⅣに相当すると思われる。これらのうち，c類は器高指数が平均22.7で，草戸千軒町遺跡のⅢ期の範囲（器高指数22～26程度）からⅣ期前半の範囲（器高指数19～21程度）に入ることから，概ね15世紀代の時期に入る可能性がある[15]。

なお，本城跡c類と比較するため，近在の三次市三良坂町萩原城跡・三次市粟屋町加井妻城跡・三次市大田幸町山崎遺跡ＳＫ９で出土した報告資料の図面を計測してグラフ化した（第28図，第８表）。萩原城跡出土例[16]のうち，報告書第Ⅲ－３－４図203は口径13.1cm，器高2.95cm，器高指数22.5，報告書第Ⅲ－３－９図280は口径13.0cm，器高3.1cm，器高指数23.8である（第28図ａ）。これらは本城跡c類の範囲に入り，草戸分類のⅢＡⅡに相当する。加井妻城跡出土例[17]のうち，報告書第10-23図34～52は口径6.3～8.2cm，器高1.1～1.9cm，器高指数の平均19.3で，草戸分類のⅢＡⅠに相当する（第28図ｂ）。また，報告書第10-22図1～31・33は口径11.3～14.1cm，器高2.2～3.6cm，器高指数の平均23.9で，本城跡c類に近く，草戸分類のⅢＡⅡに相当する。山崎遺跡ＳＫ９出土例[18]のうち，報告書第28図41～60は口径12.8～15.8cm，器高2.6～3.5cm，器高指数の平均21.8である（第28図ｃ）。本城跡c類に近く，草戸分類のⅢＡⅡまたはⅢＡⅢに相当する。

次に，本城跡c類と上記３遺跡出土例の口径・器高・器高指数を比較してみたい（第８表。加井妻城跡出土例については，報告書第10-22図１～31・33の計測値を対象とする。）。

器高指数については，本城跡c類の平均値（22.7）は上記３遺跡出土例の各平均値（21.8～

第８表　土師質土器皿計測表

遺跡名（遺構名または時期）	遺物番号	計測値			備考	文献
		口径（cm）	器高（cm）	器高指数（平均）		
頼藤城跡	3～6（c類）	12.7～13.9	2.6～3.2	18.7～25.2（22.7）		本書
萩原城跡	203・280	13.0～13.1	2.95～3.1	22.5～23.8（23.2）	15世紀後半～16世紀前半	註(15)
加井妻城跡	1～31・33	11.3～14.1	2.2～3.6	17.9～27.9（23.9）	15世紀後半～16世紀代	註(8)
山崎遺跡（ＳＫ９）	41～60	12.8～15.8	2.6～3.5	17.7～25.6（21.8）	1433年以降の室町時代後半	註(18)
（参考）						
草戸千軒町遺跡（Ⅲ期）	ⅢＡⅡ	約11～14	約2～4	22～26	15世紀前半～中葉	註(10)
草戸千軒町遺跡（Ⅳ期前半）	ⅢＡⅡ	約10～12	約2～3	19～21	15世紀後半	
草戸千軒町遺跡（Ⅳ期後半古段階）	ⅢＡⅡ	約10～12	約2～3	16～18	15世紀末～16世紀初頭	
万徳院跡	B類	約9.2～11.9	約1.5～3	20前後か	16世紀後半	註(15)
吉川元春館跡	B類	約10.3～12	約1.8～2.5	20前後か	16世紀後半	

23.9）とあまり変わらないことから，本城跡ｃ類と上記３遺跡出土例との時期差は明確ではないと考えられる。なお，いずれの平均値も概ね草戸千軒町遺跡のⅢ期の範囲（器高指数22～26程度）からⅣ期前半の範囲（器高指数19～21程度）に入っている。

実際の口径・器高についてみると，次のとおりになる。点数が少ない荻原城跡出土例は，本城跡ｃ類の範囲に入っている。加井妻城跡出土例は，本城跡ｃ類に比べて範囲が広く，口径・器高の小さい部分に広がっている。また，山崎遺跡ＳＫ９出土例も本城跡ｃ類に比べて範囲が広く，口径・器高が大きい部分に広がっている。このような遺跡ごとに口径・器高の範囲の違いがあり，その違いは時期差による可能性がある[19]。すなわち，口径・器高が大きい部分に広がる山崎遺跡ＳＫ９出土例がやや古く，口径・器高が小さい部分に広がる加井妻城跡出土例がやや新しくなるかもしれない。萩原城跡出土例及び本城跡ｃ類は，点数が少ないため明確ではないが，山崎遺跡あるいは加井妻城跡出土例の時期に入る可能性がある。

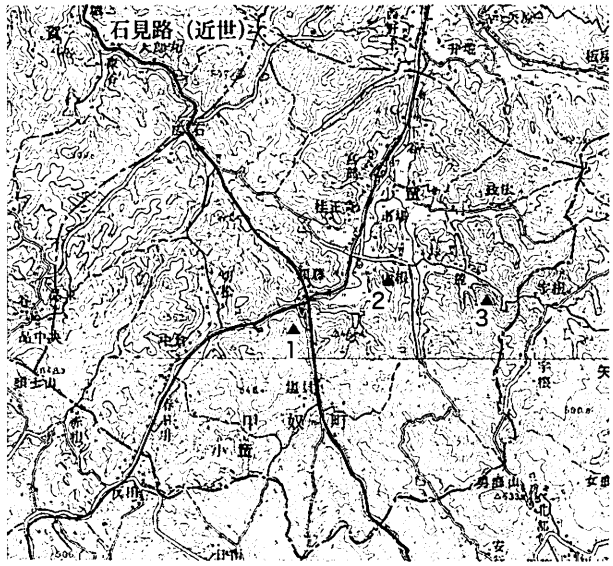
以上，本城跡出土遺物の時期について，青磁（碗）・瓦質土器（擂鉢）・土師質土器（鍋）は概ね15世紀後半から16世紀前半であり，土師質土器（皿）もほぼ同時期と思われる。

３　城跡の内容・機能について

本城跡は小童地区の南西寄りに位置している（第29図）[20]。歴史的な背景については，第Ⅱ章で述べたとおりで，小童地区は，中世において祇園社領備後小童保という京都祇園社の荘園であった。土地をめぐる紛争がしばしば起きたが，やがて，田総氏が地頭として支配を強めていき，応仁の乱以降，田総氏は備後守護代山内氏に帰属し，小童保は山内氏の知行地になった。さらに，天文22（1553）年に山内氏は毛利氏の軍門に下り，小童保は毛利氏の支配地となった。なお，本城跡の東方約１kmに所在する小童山根城跡は田総氏代官土屋氏の居城と伝えられており，小童保支配の拠点と考えられている。

本城跡の立地について，第29図のとおりで，本城跡の東側を近世の石見路が南北方向に通り，本城跡の北側には北東-南西方向に通る道路がある。本城跡はそれらの街道やそれらの街道が交差する頼藤の集落を見渡すことができる場所に立地している。

本城跡の使用時期は，出土遺物から15世紀後半から16世紀前半と考えられ，小童保が山内氏の知行地であった時期である可能性が高い。使用期間については，出土遺物が少量であること，建物の建て替えが行われていないことから，あまり長期間使用していないものと思われる。



第29図　小童地区城跡位置図（１：75,000）
（１　頼藤城跡，２　小童山根城跡，３　麓山城跡）

出土遺物は主に土器類・鉄釘・刀子などの生活道具や青磁などがある。遺物は少量であることや生産道具が出土していないことは留意される。

本城跡の機能について，小都隆氏の分類[21]では，立地（比高）の４分類（ａ～ｄ）・規模の４分類（１～４）・生活度の２分類（Ａ・Ｂ）によって32類に形態分類し，これを機能によって５類（Ⅰ城・Ⅱ砦・Ⅲ陣・Ⅳ屋敷・Ⅴ平城）に型式分類している。この分類を援用すれば，次のとおりとなる。すなわち，本城跡の立地は周囲との標高差80mであり，「ｄ．山地（51m以上）」となる。規模は調査面積が8,187㎡であり，未調査部分も含めても「３．中規模（12,000㎡以下）」となると思われる。生活度は「Ｂ（①生活との関わりが薄い）」となるようである。この結果を註21の文献の第１－１－１表（21頁）に照合すると，「ｄ３Ｂ」となり，機能による型式分類で「陣（Ⅲ類）」に入ると考えられる。「陣」は「生活感のないもので15世紀に出現し16世紀に入ると急激に増える。」とされている。「陣」には「出城」と「陣城」があるとされ，このなかで本城跡は「出城（ⅢＡ類）」[22]に該当する。「出城」は，「交通の要所や見晴らしのよいところに立地し，狼煙の施設を持つものもある。」とされている。本城跡の立地状況などはまさにこの記述のとおりであり，本城跡は「出城」としての性格を有するといえるであろう。

以上をまとめると，

1　本城跡は，「祇園社領備後小童保」といわれていた小童地区のやや南西寄りに位置する。

2　使用時期は15世紀後半から16世紀前半のうちの短い期間と推定され，山内氏が支配した時期かその前後と考えられる。

3　立地・遺構・遺物などからみて，「出城」としての機能が考えられる。小童保の支配は，小童山根城跡が拠点となり，その周辺に配された諸施設と有機的に結ばれて行われたとも考えられる。本城跡はそのネットワークの一部として，街道とその交差点などの交通の要衝の監視や頼藤の集落など小童保南西部の監視を行っていたと思われる。また，狼煙を使った情報伝達を行っていた可能性がある。

このように，今回の調査によって，当該地域の戦国時代の城館研究や歴史的な様相を考えるうえで良好な資料が得られた。

註

(1)　今市城跡では，炭化物を含む黒色土が堆積する土壙を５基検出している。そのうち，第３号土壙は，上端の直径約1.4m・深さ約0.27mの円形状で，「北側を中心に焼土化していたことから，強い火力で使用されたことが考えられる」とされている。また，第５号土壙は，上端の直径約1.1m・深さ約0.42mの楕円形状である。

(財)広島市歴史科学教育事業団『広島市佐伯区五日市町所在　今市城跡発掘調査報告』 1993年　11頁及び15～17頁

(2)　三ツ城跡の第１郭１の段の土壙は，上端の直径約1.8m・深さ約1.2mの円形状で，下層の土層観察から３度にわたって火を扱う行為が繰り返されたようである。上層には角礫が多数流れ込んでおり，この状況は本城跡例の状況に似ている。

広島市教育委員会『広島市安芸区瀬野町・中野町所在　三ツ城跡発掘調査報告』 1987年

(3) 福原城跡の石組遺構は，一辺約1.5mの方形と考えられる石組で，石組内の土層観察から，「かなり強力な火力の使用があったことがうかがえる」とされている。

(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『福原城跡』 2003年　9頁及び39頁

(4) 堀切についての引用は，次の文献による。

花本哲志「広島県の中世山城跡から検出された遺構について（3）」『研究輯録』Ⅷ (財)広島県埋蔵文化財調査センター　1998年　77～86頁

(5) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会　1982年　55～70頁

(6) 小野正敏「15～16世紀の染付碗，Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会　1982年　71～88頁

(7) 次の文献の第37図12に類似する。薬師城跡ＳＥ２の時期は薬師城跡Ⅰ期で，15世紀後半から16世紀前半と考えられている。

(財)広島県埋蔵文化財調査センター『薬師城跡』 1996年

(8) 次の文献の第10-21図２に類似する。加井妻城跡の時期は15世紀後半から16世紀代と考えられている。

広島県教育委員会「10　加井妻城跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）』 1979年

(9) 註(3)の文献の第28図23に類似する。福原城跡の時期は15世紀末から16世紀にかけてと考えられている。

(10) 次の文献によると，草戸千軒町遺跡のⅡ期後半は14世紀中葉頃と考えられている。

鈴木康之「第Ⅲ章　遺物　1　土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ　広島県教育委員会　1996年　156～226頁

(11) 花本哲志「広島県内の亀山焼系甕について―城館遺跡出土の未報告資料の紹介とともに―」『研究輯録』Ⅹ (財)広島県埋蔵文化財調査センター　2000年　1～12頁

(12) 註(7)の文献の第37図13に類似する。薬師城跡ＳＥ２の時期は薬師城跡Ⅰ期で，15世紀後半から16世紀前半と考えられている。

(13) 註(10)の文献によると，草戸千軒町遺跡のⅣ期前半は15世紀後半頃と考えられている。なお，Ⅳ期後半（15世紀末～16世紀初頭）には土師質土器の鍋がほとんど出土しなくなるようである。

(14) 草戸千軒町遺跡出土土師質土器の分類・分析・編年については，註(10)の文献による。

草戸千軒町遺跡では，ⅢＡは口径の大きさにより，「ⅢＡⅠ（６～10cm程度）・ⅢＡⅡ（10～14cm程度）・ⅢＡⅢ（13～16cm程度）・ⅢＡⅣ（16cm以上）」に分類されている。ちなみに，草戸千軒町遺跡出土のⅢは回転ヘラ切りである。

また，草戸千軒町遺跡では，Ⅳ期（15世紀代後半から16世紀初頭）に，Ⅲが大小４種類になるようである。本城跡例は法量がずれているが，Ⅲが数種類に分かれる傾向は共通している。

(15) 註(10)の文献によると，草戸千軒町遺跡では，ⅢＡⅡの器高指数が「Ⅲ期の段階…22～26程度」，Ⅳ期前半には19～21」，「Ⅳ期後半古段階には16～18程度」になるとされ，Ⅳ期の前半から後半にかけてⅢの扁平化が進むようである。

なお，次の文献に掲載されている山県郡北広島町万徳院跡及び吉川元春館跡（いずれも16世紀後半とされる）

出土土師質土器皿法量分布図では，器高指数が20前後に集中している。このことから，広島県北部においては，草戸千軒町遺跡が所在する広島県南東部に比べて器高指数の変化が少ない可能性がある。

平川孝志「万徳院跡出土の土師質土器」『中世遺跡調査研究報告第１集　万徳院跡の研究』広島県教育委員会　2000年　73～79頁

(16) 底部の調整は回転ヘラ切りとされている。萩原城跡の時期は15世紀後半から16世紀前半と考えられている。

(財)広島県埋蔵文化財調査センター「萩原城跡」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅴ）』2003年

(17) 註(8)の文献と同じ。底部の調整は出土例の中に糸切り痕が認められる。なお，報告書では第10-22 図１～33は埦，第10-23 図34～52は皿とされている。

(18) 底部の調整は出土例の中に糸切り痕が認められる。ＳＫ９から和鏡１点・古銭27点・円札２点・土師質土器20数点が出土しており，ＳＫ９の時期は1433年以降の室町時代後半と考えられている。

(財)広島県埋蔵文化財調査センター『山崎遺跡』 1994年

(19) 註(10)の文献によると，草戸千軒町遺跡において，Ⅲ期からⅣ期にかけて皿の扁平化とともに皿の小型化がすすむとされている。

註(15)の文献によると，16世紀後半とされる吉川元春館跡出土例では，Ａ類（口径8.5～9.5cm），Ｂ類（口径10.3～12cm），Ｃ類（口径6.4～8cm）の分布がみられ，口径が最も大きいグループはＢ類に集約されるようである。このＢ類は本城跡ｃ類に比べて口径が小さい。

このことから，草戸千軒町遺跡例と同様に広島県北部においても，口径の大きいグループの皿は，時期の経過につれて口径が小さくなるようである。

(20) 第29図は次の文献を参考して作成した。

甲奴町『甲奴町誌』 1994年

(21) 城館跡の分類についての引用は，次の文献による。

小都隆「第１章西日本の中世城館跡　第１節中世城館跡の分類と編年―広島県を例として―」『中世城館跡の考古学的研究』株式会社渓水社　2005年　13～63頁

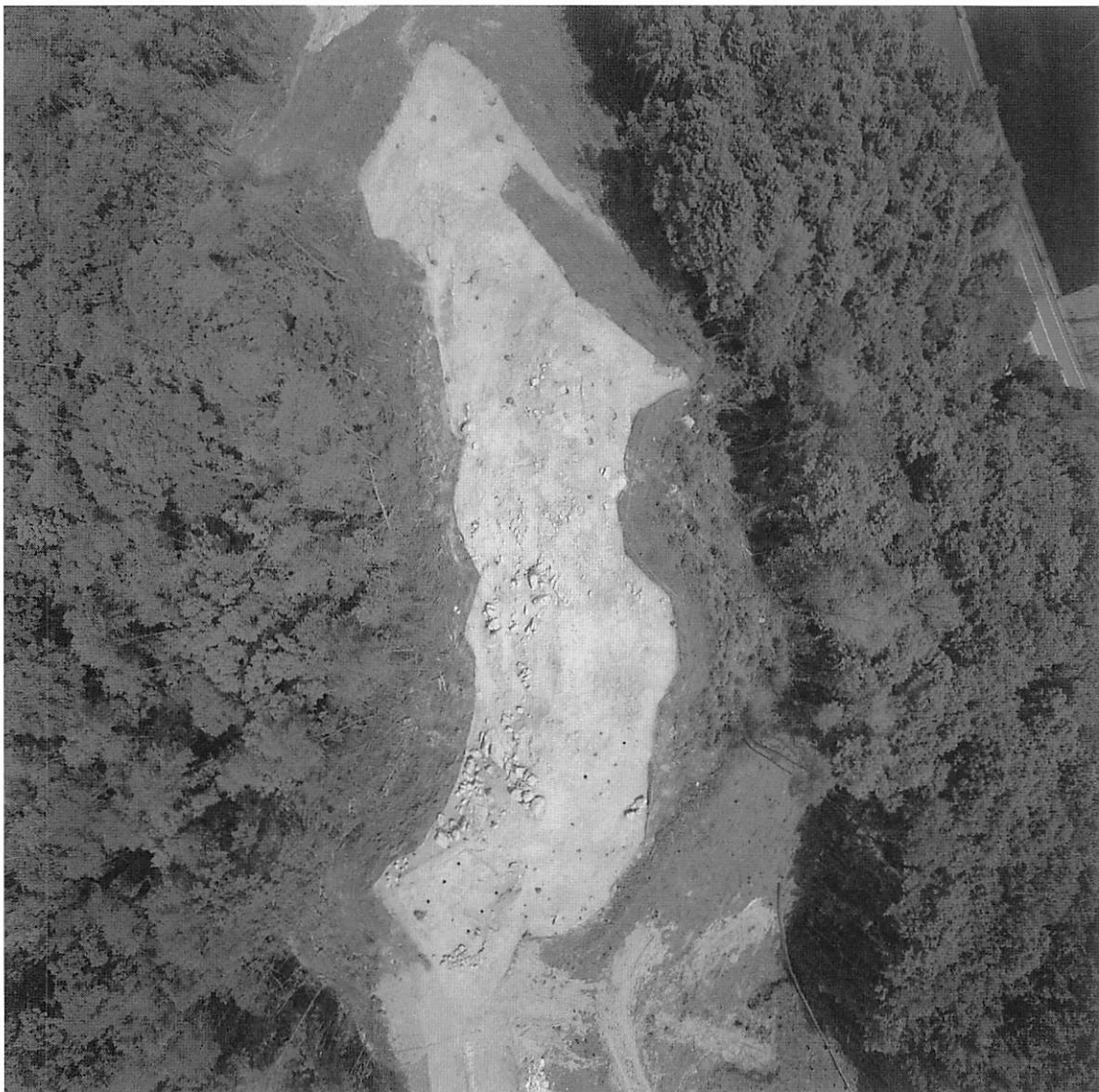
(22) 註(21)の文献のなかで小都氏は，広島県内で発掘調査された出城（ⅢＡ類）について，次のとおり合計15か所を挙げている。

15世紀（３か所）…月見城（広島市佐伯区）・今市城（広島市佐伯区）・三ツ城（広島市安芸区）

16世紀前半（５か所）…串山城（広島市佐伯区）・寺山城（広島市安佐北区）・龍山城（山県郡北広島町）・福原城（東広島市福富町）・寺谷城（東広島市志和町）

時期不明（７か所）…長尾城（広島市佐伯区）・市場城（広島市安佐北区）・丹渡尾城（廿日市市上平良）・熊崎城（廿日市市吉和町）・赤城（山県郡北広島町）・生坂山城（東広島市安芸津町）・鈴神城（庄原市門田町）

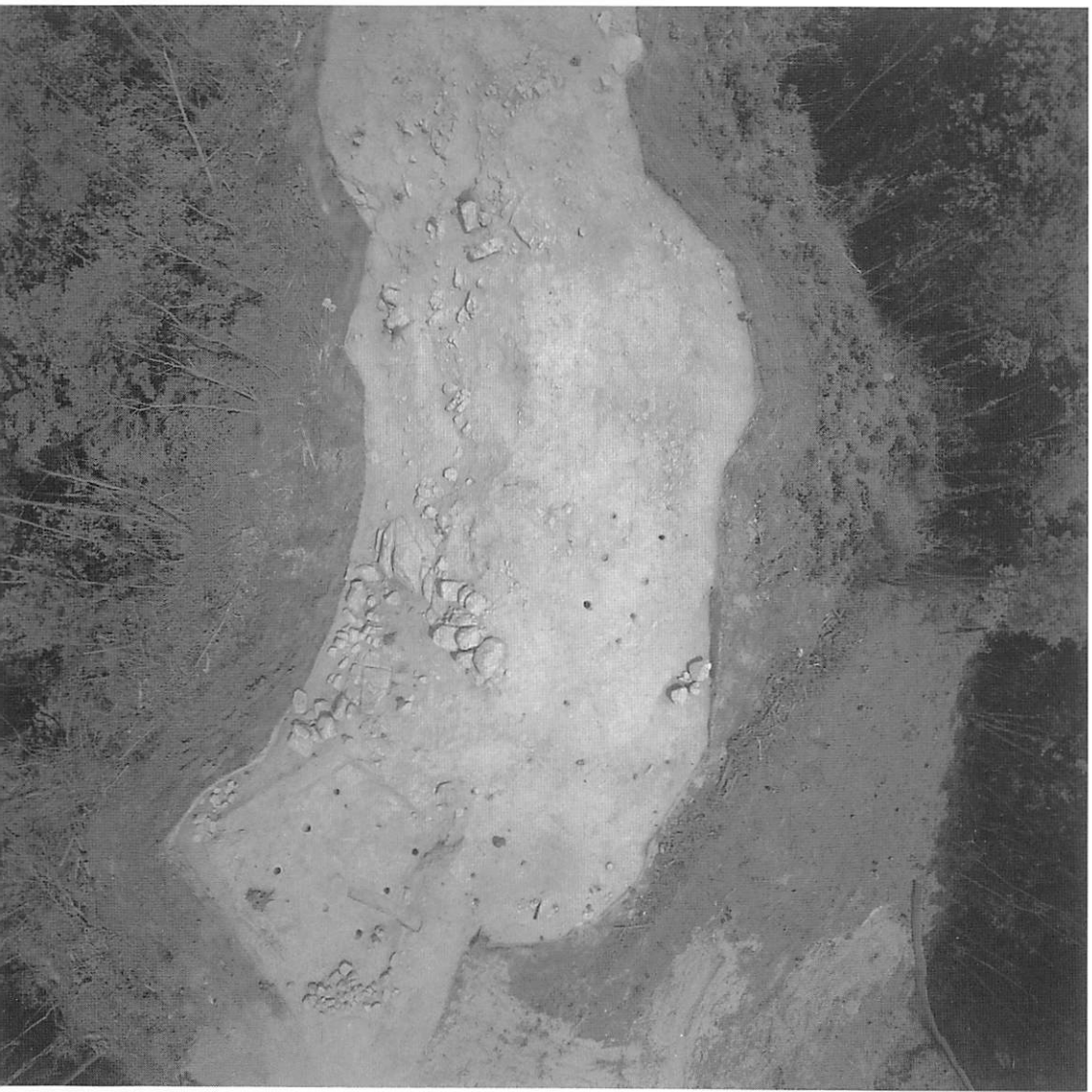
a　頼藤城跡遠景
（南西上空から）



b　第１郭群完掘全景
（真上から，上が北）

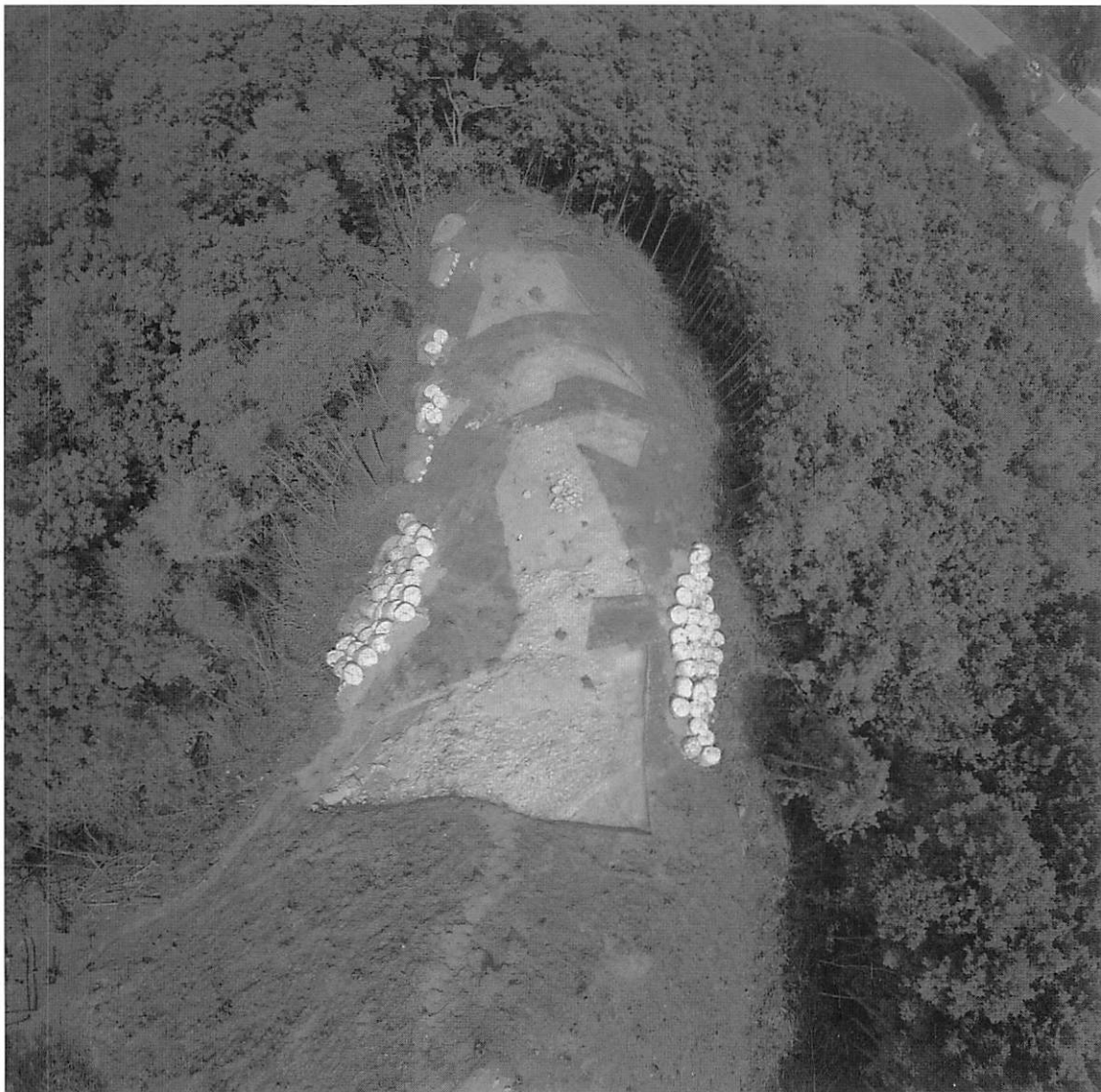
図版２

a　第１郭群北半部
　　完掘状況
　　（真上から，上が北）



b　第１郭群南半部
　　完掘状況
　　（真上から，上が北）

a　第２郭群完掘全景
（南上空から）



b　第３郭群完掘全景
（真上から，上が北西）

図版 4

a　第１郭群・堀切
調査前近景（南から）

b　第１郭群完掘状況
（南から）

c　第１郭群南半部
完掘状況（北から）

a　第１郭群北半部
　　完掘状況（南から）

b　第１郭群平坦面１－２
　　～１－４・１－14
　　～１－16完掘状況
　　（南東から）

c　ＳＢ２
　　（第１郭群平坦面１－２内）
　　（南東から）

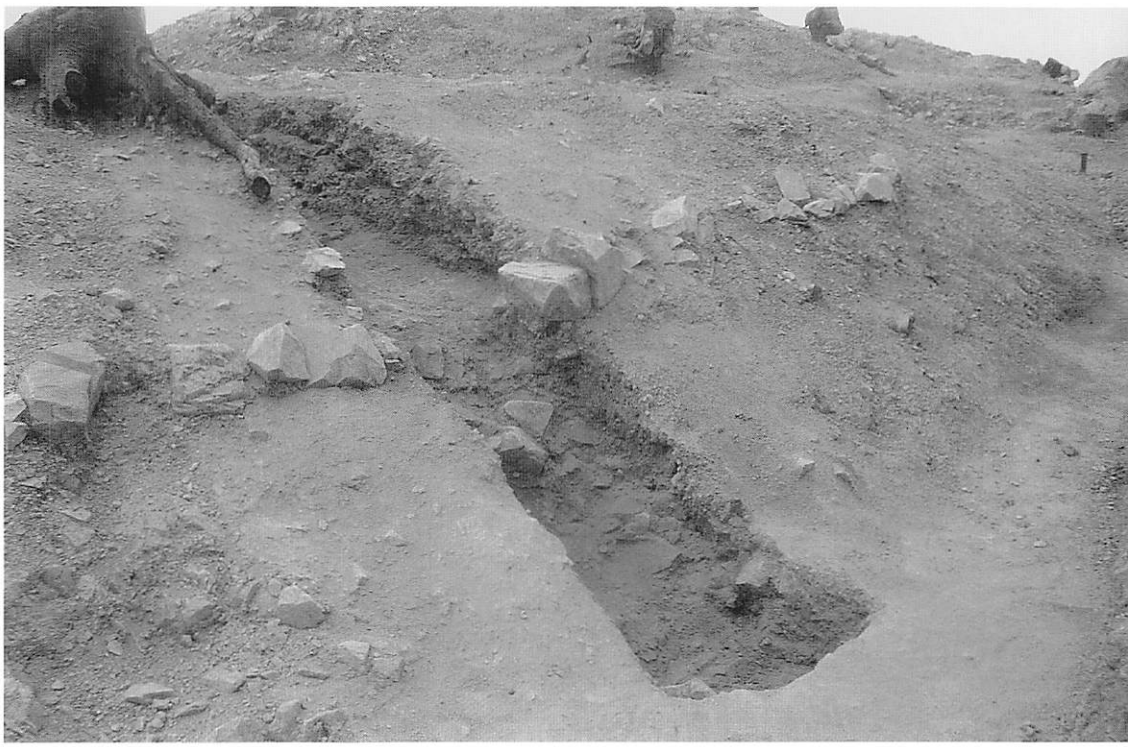
図版6

a　ＳＢ２（北西から）

b　石列１（第１郭群
平坦面１－２西側）
（東から）

c　石列１北半部
（西から）

a　石列１南半部（西から）



b　石列１土層断面
（北から）

c　石列２（第１郭群
平坦面１－２北側）
（南から）

図版8

a　石列２（北から）

b　石列２土層断面
（北西から）

c　第１郭群平坦面１－４
土層断面（南東から）

a　第１郭群平坦面１－５
完掘状況（北東から）

b　第１郭群平坦面１－５
完掘状況（南から）

c　第１郭群平坦面１－５
土層断面（西から）

a　第１郭群平坦面１－５
遺物出土状況
（西から）

b　ＳＢ３（第１郭群
平坦面１－５内）
（北東から）

c　土塁１（第１郭群
平坦面１－５西側）
（北東から）

a　土塁１（南東から）

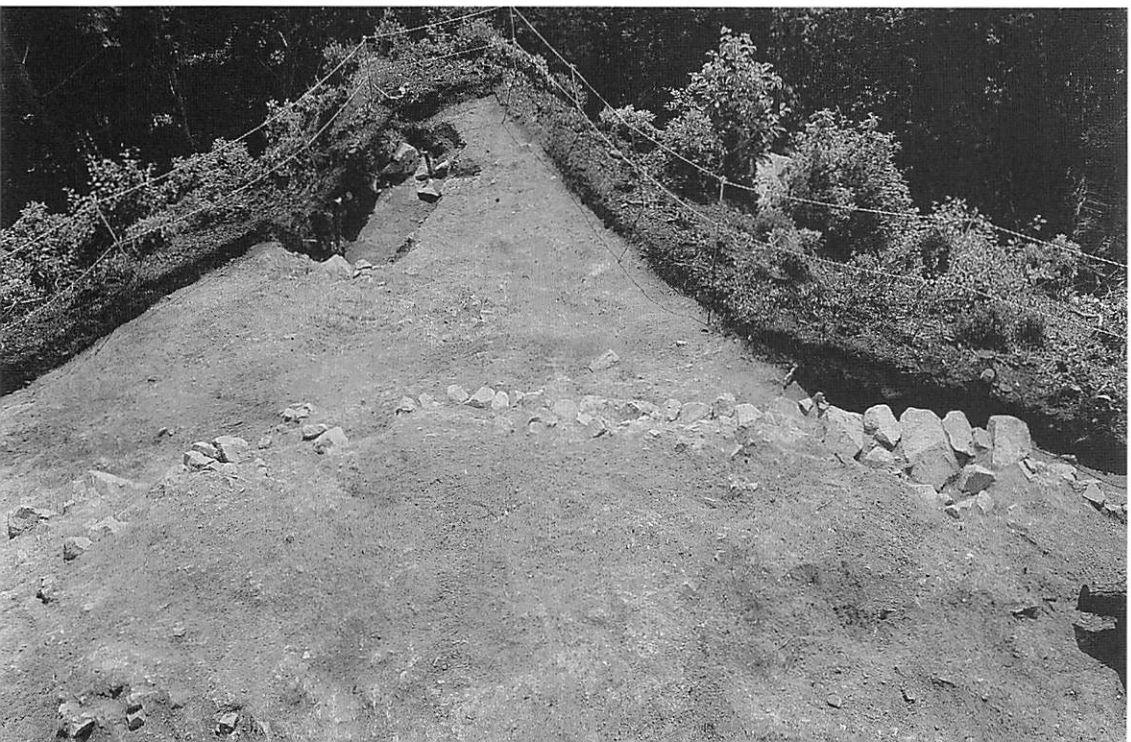
b　土塁２（第１郭群
平坦面１－５東側）
（北東から）

c　土塁２（北西から）

図版12

a　ＳＢ１（第１郭群
平坦面１－７内）
（西から）

b　ＳＢ１（南から）



c　石列３・４（第１郭群
平坦面１－７東側）
（西から）

a　石列３・４（北から）

b　石列３（東から）

c　石列３土層断面
（北西から）

図版14

a　石列４（北から）

b　石列４土層断面
（北西から）

c　第１郭群平坦面１-19
～１-21完掘状況
（北から）

a　ＳＢ４（第１郭群
平坦面１-20内）
（北西から）

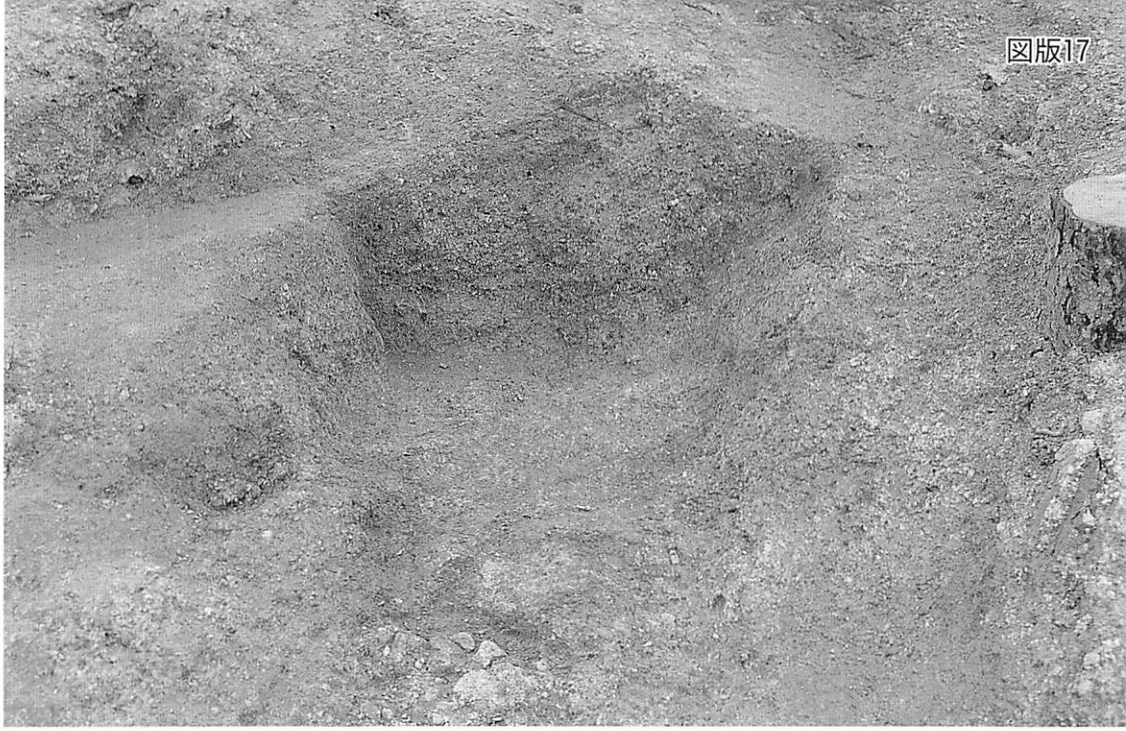
b　ＳＢ４（北東から）

c　第１郭群巨石群
（平坦面１-22北側）
（南西から）

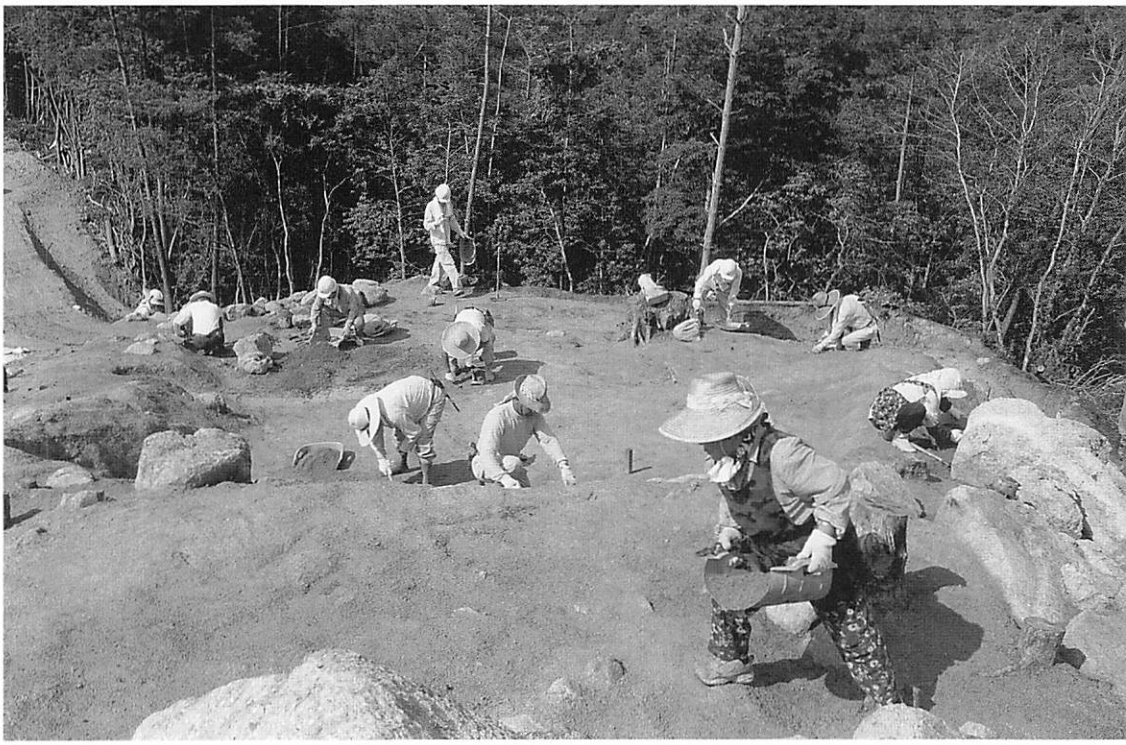
a　第１郭群平坦面１-24
・１-25完掘状況
（北から）

b　ＳＲ１（第１郭群
平坦面１-20南側）
検出状況（南から）

c　ＳＲ１土層断面
（西から）



a　ＳＲ１完掘状況
（南から）



b　第１郭群平坦面１－５
調査風景（北から）

c　第２郭群・堀切
調査風景（北から）

図版18

a　第２郭群・堀切
調査前近景（北から）

b　第２郭群西半部
完掘状況（北から）

c　第２郭群平坦面２－１
完掘状況（南から）

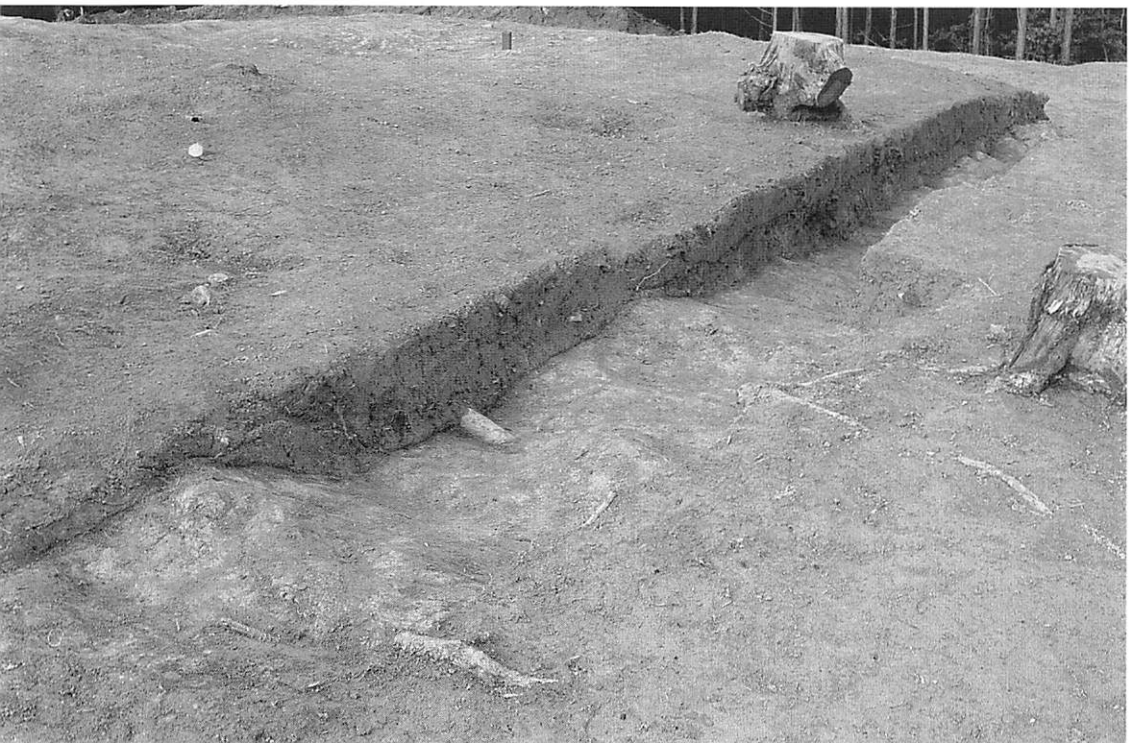
a　第２郭群平坦面２－２
・２－４・２－５
完掘状況（西から）

b　第２郭群平坦面２－２
完掘状況（東から）

c　第２郭群平坦面２－４
完掘状況（西から）

a　土塁３（第２郭群
平坦面２－４北側）
（南東から）

b　第２郭群平坦面２－５
～２-10完掘状況
（東から）



c　第２郭群平坦面２－５
土層断面（南西から）

a　第２郭群平坦面２－８
～２－11完掘状況
（西から）

b　第２郭群平坦面２－10
・２－11完掘状況
（西から）

c　第２郭群平坦面２－10
土層断面（南から）

a　第３郭群調査前近景
（南から）

b　第３郭群完掘状況
（南東から）

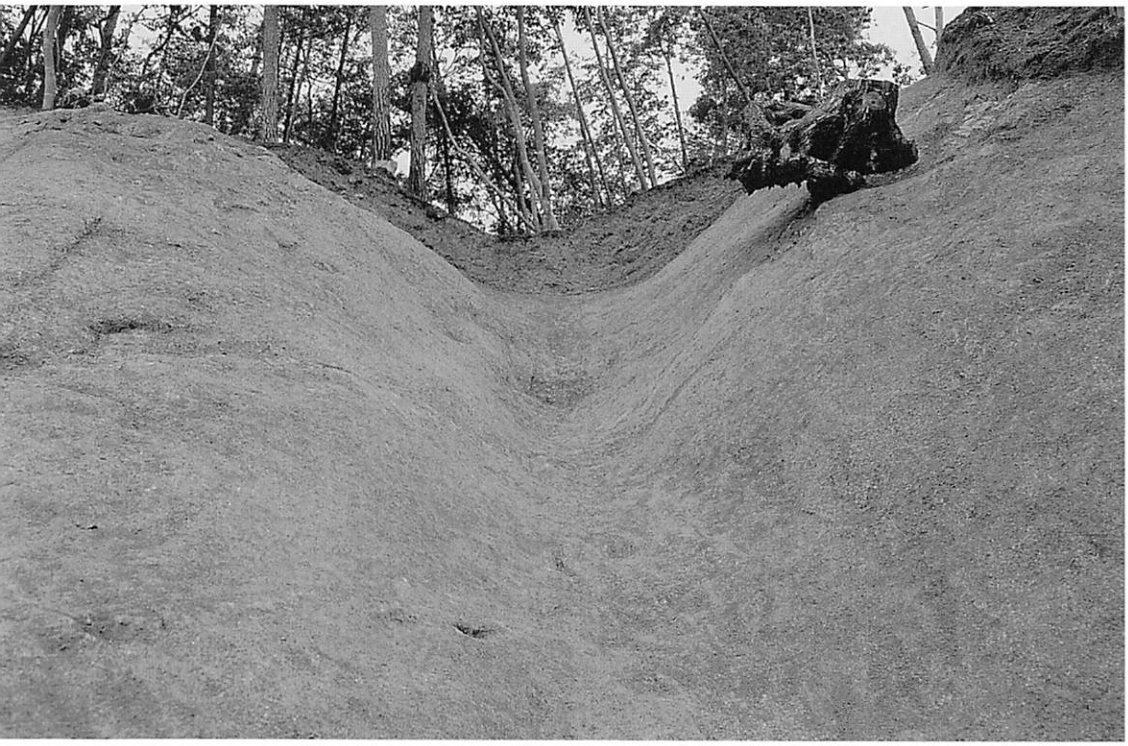
c　第３郭群平坦面３－１
・３－２完掘状況
（北から）

a　ＳＢ５（第３郭群
平坦面３－３内）
（北東から）

b　ＳＢ５（南東から）

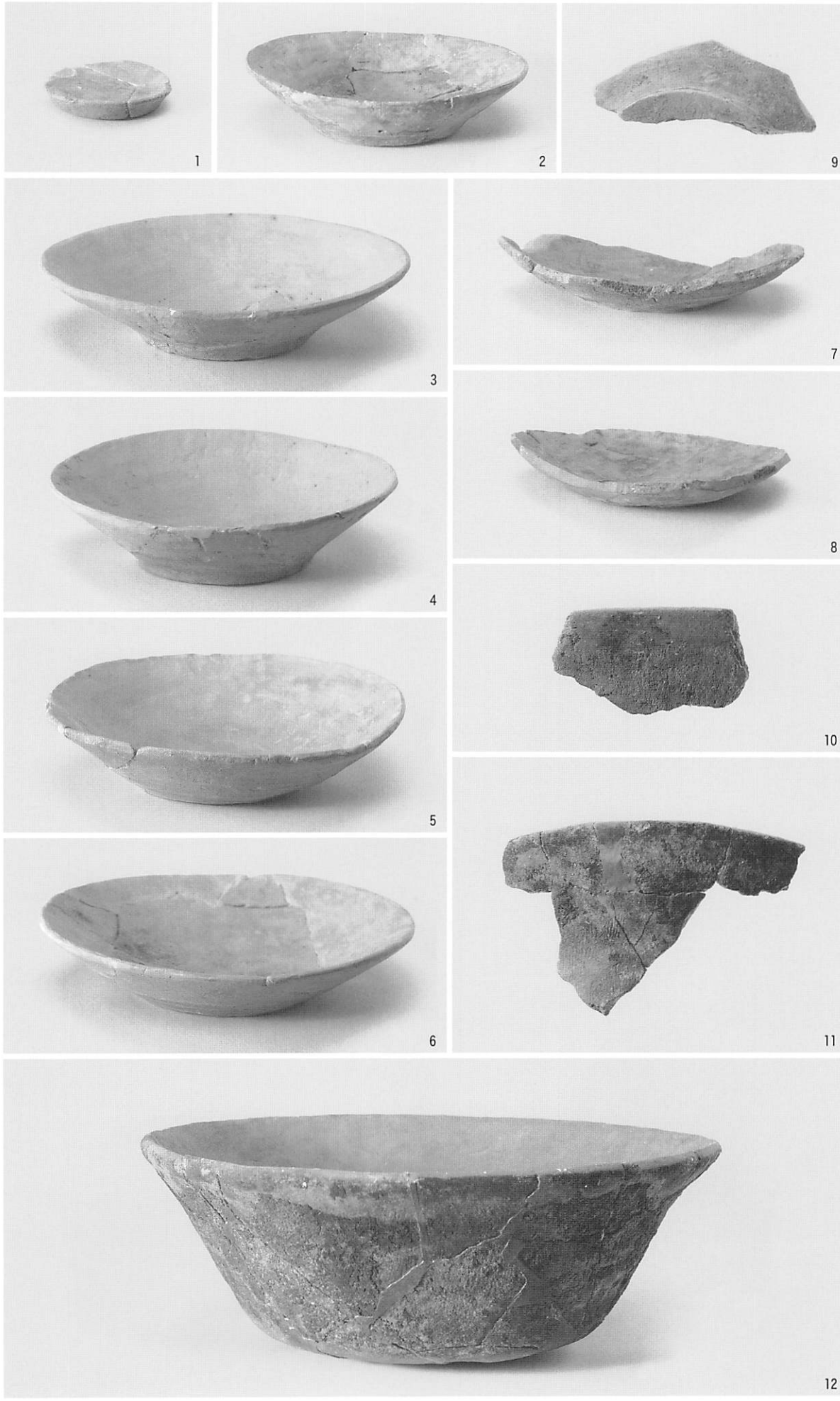
c　第３郭群平坦面３－４
～３－８完掘状況
（南東から）

a　堀切完掘状況
（南から）

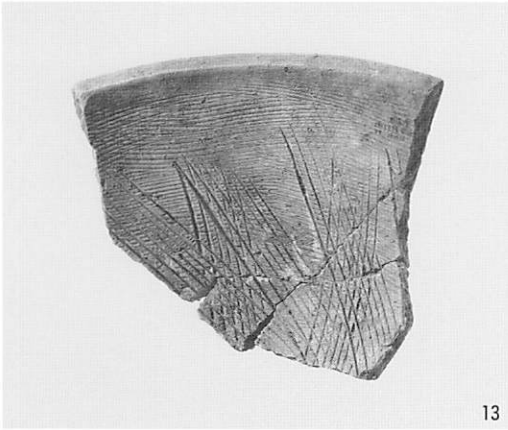


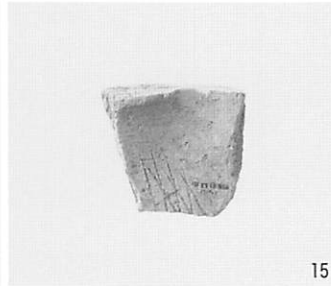
b　堀切完掘状況
（東から）

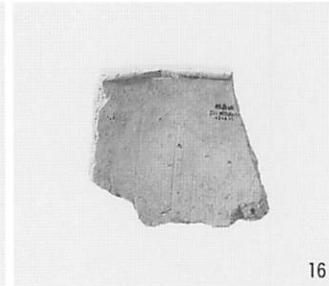
c　堀切土層断面
（北東から）

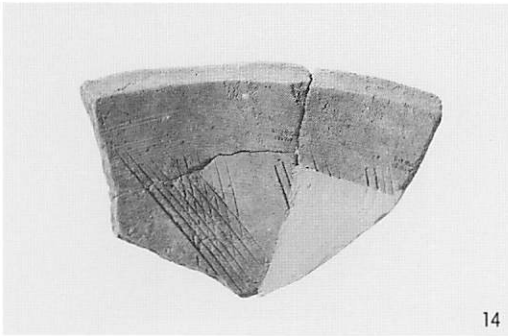


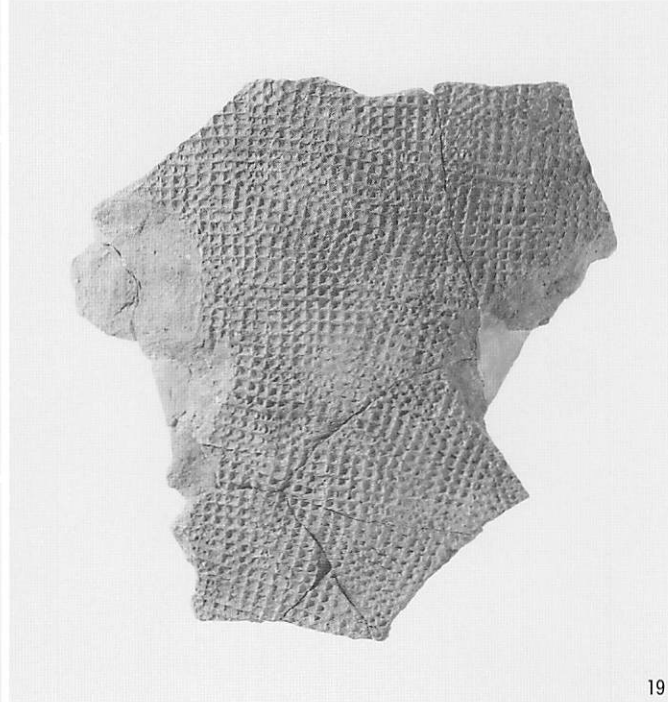
出土遺物（1）

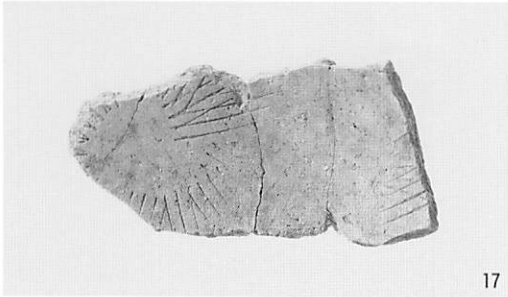

13

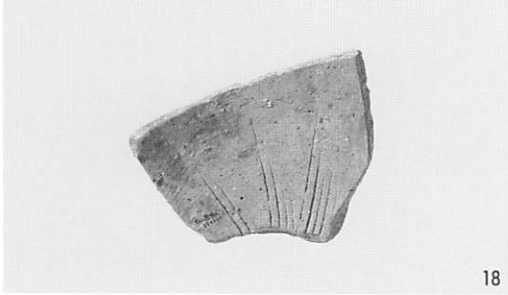

15


16


14

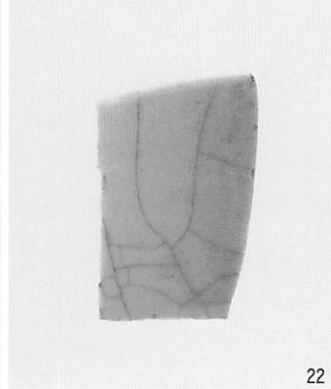

19

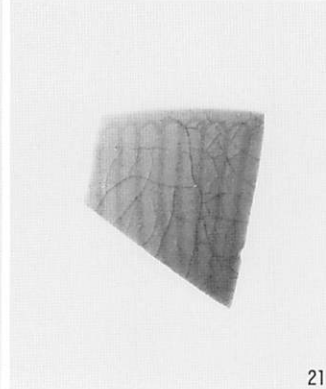

17

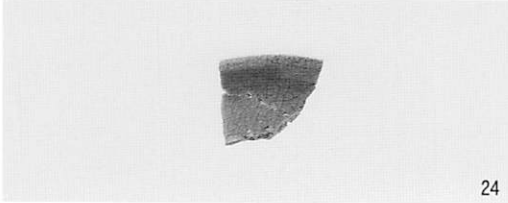

18

20

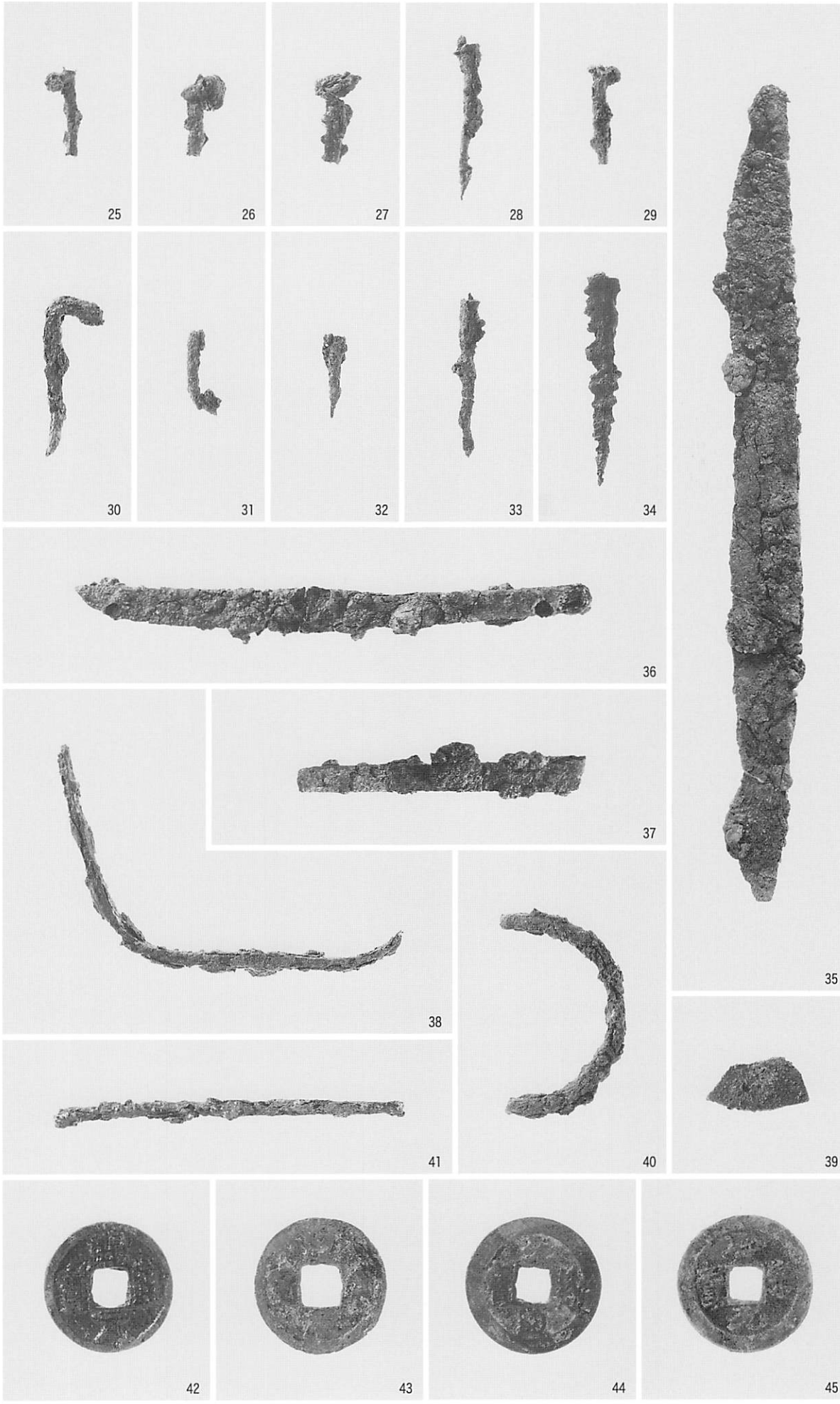
23


22


21


24

出土遺物（2）



出土遺物（3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく　37
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（37）
副書名	頼藤城跡
シリーズ名	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第65集
編著者名	沢元保夫・岩本芳幸・唐口勉三
編集機関	公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　TEL082-295-5751
発行年月日	2014年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
よりとうじょうあと 頼藤城跡	ひろしまけん みよしし 広島県 三次市 こうぬちょう ひち 甲奴町 小童	34209	34563 -153	34° 12′ 45″	132° 53′ 50″	20080421 ～ 20080731	8,187	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
頼藤城跡	城館跡	中世	平坦面45 建物跡５ 土塁３ 石列４ 炉跡１	土師質土器，瓦質土器，亀山焼，青磁，鉄釘，短刀，刀子，不明鉄製品，古銭	15世紀後半から16世紀前半を中心とする中規模の出城。２間×２間または２間×１間の建物跡を検出。

要約	頼藤城跡は，「祇園社領備後小童保」と言われていた小童地区のやや南西寄りに位置する。城跡の使用時期は15世紀後半から16世紀前半のうちの短い期間と推定され，山内氏が支配した時期かその前後と考えられる。本城跡は，立地・遺構・遺物などからみて，「出城」としての機能が考えられる。小童保の支配は，小童山根城跡が拠点となり，その周辺に配された諸施設と有機的に結ばれて行われたとも考えられ，本城跡はそのネットワークの一部として，街道とその交差点などの交通の要衝の監視や頼藤の集落など小童保南西部の監視を行っていたと思われる。また，狼煙を使った情報伝達を行っていた可能性がある。

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第65集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（37）

頼藤城跡

発行日　平成26（2014）年３月14日
編　集　公益財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3951
発　行　公益財団法人　広島県教育事業団
印刷所　株式会社　ニシキプリント